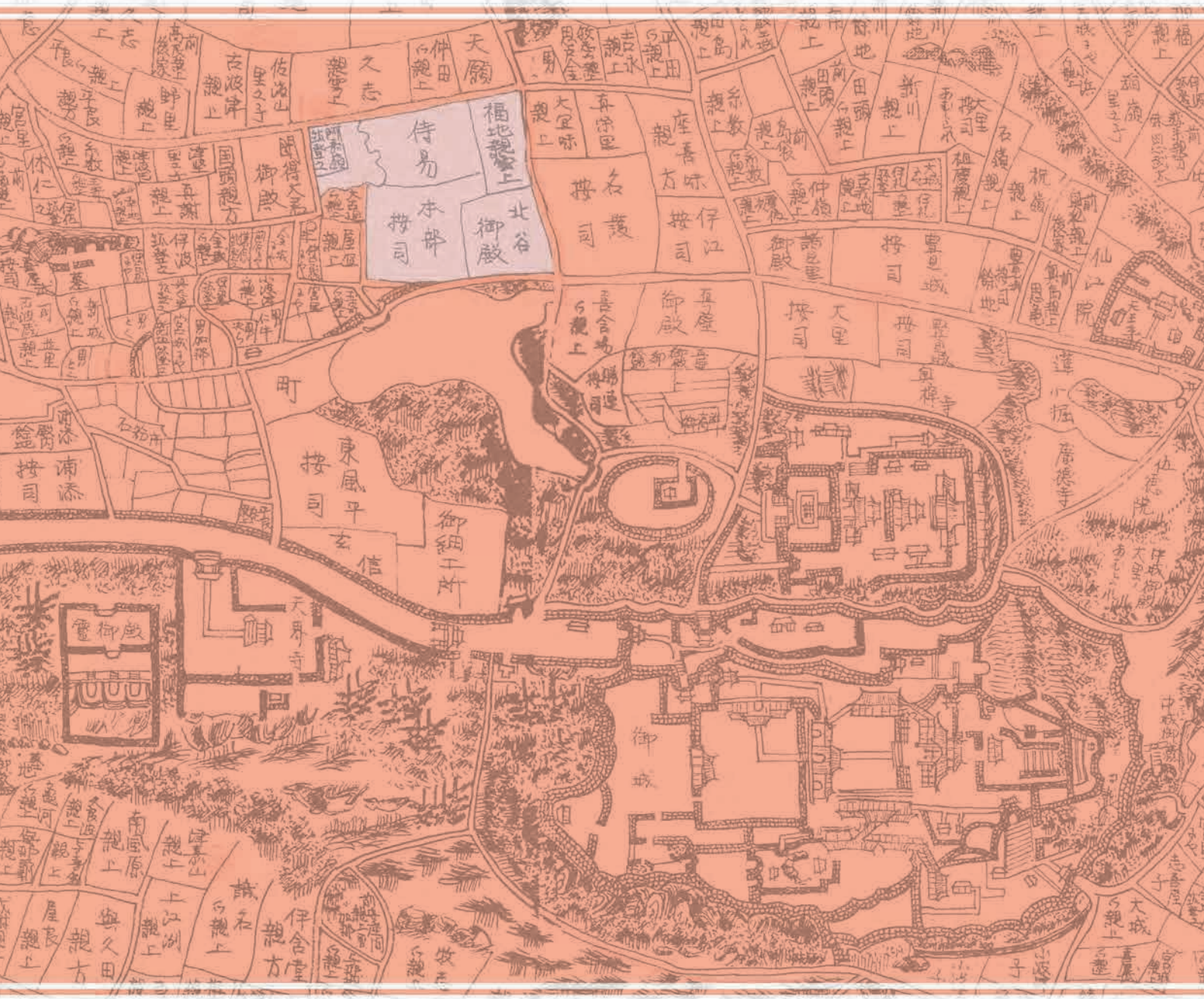
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第109集

中城御殿跡

― 県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（8）―



令和３（2021）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第109集

中城御殿跡

― 県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（8）　―

令和３（2021）年3月
沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 109 集

中 城 御 殿 跡

― 県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（8）―

令和3（2021）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、首里城公園整備に伴い、沖縄県土木建築部都市公園課より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成 27（2015）～ 29（2017）・令和元（2019）年度に行った中城御殿跡の遺構確認調査の成果をまとめたものです。

中城御殿は琉球国王世子の邸宅として、当初は現在の首里高等学校敷地内に創建されました。明治３（1870）年に今回の調査対象となった大中町に新たに造営が開始され、明治８（1875）年に移転します。そして、明治 12（1879）年の琉球処分を経て、昭和 20（1945）年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地にありました。

沖縄県立埋蔵文化財センターによる発掘調査は県営首里城公園整備の一環として、平成 19（2007）年度より遺構確認調査として開始しており、今回報告を行う調査では、上之御殿と呼ばれる、中城御殿西の標高の高い地区に位置する離れを中心として調査区を設けて行いました。

調査によって、上之御殿南の庭園や大岩の拝所周囲に残存する階段跡、西端の石牆、さらに中城御殿以前のものと考えられるごみ捨て場といった遺構が良好な状態で遺されていることがわかりました。また、上之御殿の調査以外にも、龍潭線（県道 29 号線）の道路拡幅による正面石牆の移設工事に伴って、石牆付近の調査も行っており、石牆の根石や、その下層の配石遺構などが見つかっています。調査に伴い、中国や日本各地で焼かれた陶磁器類が多数出土しているほか、戦後の造成時に埋められたガラス瓶などの現代遺物といった、中城御殿以前から戦時中の焼失、戦後の利用状況を示す遺物が多数得られています。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県における琉球王府時代末期から戦後の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について感心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

令和３（2021）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　瑞慶覧　勝利

１. 庭園跡（上空北西から）

２. 庭園跡（上空北から）

巻頭図版１

西側石牆周辺 トレンチ５・10 西側・12　遺構検出状況（上空西から）

巻頭図版２

1. トレンチ１ 配石遺構検出状況（南東から）

2. 西側石牆周辺 トレンチ２（西から）

巻頭図版３

1. 西側石牆周辺 トレンチ 5・10 西側・12　遺構検出状況（上空南から）

2. 西側石牆周辺 トレンチ５近景（南から）

巻頭図版４

１. 庭園・西側石牆周辺　トレンチ８　遺構検出状況（上空北西から）

２. 庭園・西側石牆周辺　トレンチ８　遺構検出状況近景（南から）

巻頭図版５

1. 拝所周辺　トレンチ 10　遺構検出状況（上空東から）

2. 拝所周辺　トレンチ 10　遺構検出状況（東から）

巻頭図版６

例　言

1　本報告書は、県営首里城公園の整備に伴い、平成 27（2015）～ 29（2017）・令和元（2019）年度に実施した発掘調査成果を令和元（2019）年度および令和２（2020）年度に資料整理を行い、まとめたものである。

2　本事業は、県営首里城公園整備事業に伴うもので、沖縄県土木建築部からの分任（委託）事業として沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括並びに、業務調整等は沖縄県教育庁文化財課が行い、発掘調査並びに、事業事務に関しては沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。

4　本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を使用した。

5　本書に掲載した中城御殿屋根伏図（第３図）や間取り復元図（第４・５図）は、中城御殿跡地整備検討委員会資料〔沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課提供〕を用いた。

6　本報告書に掲載した白黒の航空写真（第 53 図）は、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室所蔵の 1945 年４月２日米軍撮影（CV20-103-63）中城御殿周辺を複写した。

7　本報告書の編集は調査体制で記した方々の協力のもと田村薫が行い、各章の執筆は下記のとおり行った。

田村薫：第１・２章、第３章第１節～第３節、第５章
奥平大貴：第３章第４節１・３・４・６・８
久場大暉：第３章第４節９・13・14・17 ～ 20
島袋桃子：第３章第４節７・10・11・16
國吉ななせ：第３章第４節２・５・12・15
パリノ・サーヴェイ株式会社：第４章

8　本報告書に掲載された出土遺物の写真撮影は伊禮若奈、與儀暁裕が行った。

9　本書に掲載した古写真や古地図は沖縄県立図書館や、沖縄県立博物館・美術館の許可を得て掲載した。これらについては出典を明記し、文献は巻末にまとめた。

10　各章で参考・引用した文献一覧は、巻末にまとめて掲載した。

11　発掘調査で得られた出土遺物及び実測図、写真等は全て沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

12　各年度単位で設定したトレンチ名を、本報告書では次表のとおり統一して表記する。

本報告書記載 トレンチ名	調査時 トレンチ名	遺物注記
トレンチ１	平成 27 年度石牆地区	ﾅｶｳ '15 5 ﾄﾚ ○層
トレンチ２	平成 27 年度トレンチ３	ﾅｶｳ '15 3 ﾄﾚ ○層
トレンチ３	平成 27 年度トレンチ４	ﾅｶｳ '15 4 ﾄﾚ ○層
トレンチ４	平成 29 年度トレンチ１	ﾅｶｳ '17 1 ﾄﾚ ○層
トレンチ５	令和元年度トレンチ１	ﾅｶｳ '19 1 ﾄﾚ ○層
トレンチ６	平成 29 年度トレンチ３・４	ﾅｶｳ '17 3 ﾄﾚ ○層
トレンチ７	平成 27 年度トレンチ２	ﾅｶｳ '15 2 ﾄﾚ ○層
	令和元年度 SG２	ﾅｶｳ '19 SG2 ○層

本報告書記載 トレンチ名	調査時 トレンチ名	遺物注記
トレンチ８	平成 28 年度トレンチ１	ﾅｶｳ '16 1 ﾄﾚ ○層
トレンチ９	平成 29 年度トレンチ２	ﾅｶｳ '17 2 ﾄﾚ ○層
トレンチ 10	平成 27 年度トレンチ１	ﾅｶｳ '15 1 ﾄﾚ ○層
	令和元年度トレンチ２	ﾅｶｳ '19 2 ﾄﾚ 石ﾂﾞﾐ 1
		ﾅｶｳ '19 2 ﾄﾚ 石囲い 2
トレンチ 11	平成 29 年度トレンチ５	ﾅｶｳ '17 4 ﾄﾚ ○層
トレンチ 12	令和元年度トレンチ２	ﾅｶｳ '19 2 ﾄﾚ ○層

目次

序
巻頭図版
例言

第１章　発掘調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査体制 …… 1
第３節　発掘作業の経過 …… 3
第４節　整理作業の経過 …… 4

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境 …… 7
第２節　歴史的環境 …… 7

第３章　発掘調査の方法と成果

第１節　調査区の設定 …… 14
第２節　層序 …… 17
第３節　遺構
1　南側石牆周辺 …… 27
2　西側石牆周辺 …… 27
3　北側石牆周辺 …… 29
4　庭園周辺 …… 30
5　拝所周辺 …… 30
6　上之御殿建物周辺 …… 31
7　その他遺構 …… 31
第４節　遺物
1　中国産青磁 …… 60
2　中国産白磁 …… 60
3　中国産青花 …… 60
4　中国・タイ産褐釉陶器 …… 60
5　その他の輸入陶磁器 …… 60
6　本土産陶磁器 …… 60
7　沖縄産施釉陶器 …… 60
8　初期沖縄産無釉陶器 …… 60
9　沖縄産無釉陶器 …… 61
10　陶質土器 …… 61
11　瓦質土器 …… 61
12　土器 …… 61
13　煙管 …… 61
14　金属製品 …… 61

15　円盤状製品 …… 61
16　骨製品・土製品 …… 61
17　ガラス製品・ガラス玉 …… 62
18　石製品・石器・石造製品 …… 62
19　瓦・塼 …… 62
20　銭貨 …… 62

第４章　自然科学分析

第１節　試料 …… 118
第２節　分析方法 …… 118
第３節　結果 …… 118
第４節　考察 …… 119

第５章　総括 …… 123

引用・参考文献 …… 130
報告書抄録 …… 135

挿図目次

第１図　沖縄本島の位置図 …… 8
第２図　中城御殿跡の位置及び周辺の遺跡 …… 9
第３図　中城御殿屋根伏図 …… 11
第４図　中城御殿間取り復元図１ …… 11
第５図　中城御殿間取り復元図２ …… 12
第６図　トレンチ設定全体図 …… 16
第７図　トレンチ設定拡大図 …… 16
第８図　上之御殿層序概要１ …… 18
第９図　上之御殿層序概要２ …… 19
第 10 図　中城御殿層序模式図 …… 20
第 11 図　層序図１ …… 21
第 12 図　層序図２ …… 22
第 13 図　層序図３ …… 23
第 14 図　中城御殿全体図 …… 32
第 15 図　調査区全体図 …… 34
第 16 図　南側石牆周辺平面図 …… 36
第 17 図　南側石牆周辺立面・立断面・断面図 …… 37
第 18 図　西側石牆周辺平面図１ …… 39
第 19 図　西側石牆周辺平面図２ …… 40
第 20 図　西側石牆周辺立面図 …… 41
第 21 図　西側石牆周辺立断面・断面図 …… 42
第 22 図　北側石牆周辺平面図 …… 46
第 23 図　北側石牆周辺立面・立断面図 …… 47
第 24 図　庭園周辺平面図 …… 48
第 25 図　庭園周辺立面・断面図 …… 49
第 26 図　拝所周辺平面図 …… 52
第 27 図　拝所周辺立面・断面・壁面図 …… 53
第 28 図　上之御殿建物周辺平面図 …… 56
第 29 図　上之御殿建物周辺立断面・断面図 …… 57
第 30 図　中国産青磁、中国産白磁、中国産青花１ …… 75
第 31 図　中国産青花２ …… 76
第 32 図　中国産青花３ …… 77
第 33 図　中国・タイ産褐釉陶器、その他の輸入陶磁器１ …… 78
第 34 図　その他の輸入陶磁器２、本土産陶磁器１ …… 79
第 35 図　本土産陶磁器２ …… 80
第 36 図　本土産陶磁器３ …… 81
第 37 図　沖縄産施釉陶器１ …… 82
第 38 図　沖縄産施釉陶器２ …… 83
第 39 図　沖縄産施釉陶器３ …… 84
第 40 図　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器１ …… 85

第 41 図　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器２ …… 86
第 42 図　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器３ …… 87
第 43 図　陶質土器、瓦質土器、土器…… 88
第 44 図　煙管、金属製品１ …… 89
第 45 図　金属製品２、円盤状製品１ …… 90
第 46 図　円盤状製品２、骨製品、土製品、ガラス製品、ガラス玉 …… 91
第 47 図　石製品、瓦１ …… 92
第 48 図　瓦２ …… 93
第 49 図　瓦３ …… 94
第 50 図　瓦４、塼 …… 95
第 51 図　銭貨 …… 96
第 52 図　花粉化石群集 …… 121
第 53 図　上之御殿遺構図と戦前航空写真の合成 …… 129

図版目次

図版１　作業経過写真１ …… 5
図版２　作業経過写真２ …… 6
図版３　中城御殿跡正門付近 …… 10
図版４　建設中の琉球政府立博物館 …… 10
図版５　トレンチ設定状況 …… 15
図版６　層序図版１ …… 24
図版７　層序図版２ …… 25
図版８　層序図版３ …… 26
図版９　南側石牆周辺遺構 …… 38
図版 10　西側石牆周辺遺構１ …… 43
図版 11　西側石牆周辺遺構２ …… 44
図版 12　西側石牆周辺遺構３ …… 45
図版 13　北側石牆周辺遺構 …… 47
図版 14　庭園周辺遺構１ …… 50
図版 15　庭園周辺遺構２ …… 51
図版 16　拝所周辺遺構１ …… 54
図版 17　拝所周辺遺構２ …… 55
図版 18　上之御殿周辺遺構１ …… 58
図版 19　上之御殿周辺遺構２ …… 59
図版 20　中国産青磁、中国産白磁、中国産青花１ …… 97
図版 21　中国産青花２ …… 98
図版 22　中国産青花３、中国産褐釉陶器１ …… 99
図版 23　中国産褐釉陶器２、タイ産褐釉陶器、その他の輸入陶磁器 …… 100
図版 24　本土産陶磁器１ …… 101
図版 25　本土産陶磁器２ …… 102

図版 26　沖縄産施釉陶器１ …… 103
図版 27　沖縄産施釉陶器２ …… 104
図版 28　沖縄産施釉陶器３ …… 105
図版 29　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器１ …… 106
図版 30　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器２ …… 107
図版 31　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器３ …… 108
図版 32　陶質土器、瓦質土器、土器 …… 109
図版 33　煙管、金属製品１ …… 110
図版 34　金属製品２ …… 111
図版 35　円盤状製品、骨製品、土製品、ガラス製品、ガラス玉 …… 112
図版 36　石製品、瓦１ …… 113
図版 37　瓦２ …… 114
図版 38　瓦３ …… 115
図版 39　瓦４、塼 …… 116
図版 40　銭貨 …… 117
図版 41　花粉化石・寄生虫卵 …… 122
図版 42　大型植物遺体 …… 122
図版 43　遺構検出状況１ …… 127
図版 44　遺構検出状況２ …… 128

表目次

第１表　中城御殿跡関連年表 …… 13
第２表　主要層序一覧 …… 20
第３表　遺物観察一覧 …… 63
第４表　花粉分析・寄生虫卵分析結果 …… 120
第５表　微細物分析結果 …… 121

第１章　発掘調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

かつての首里には、国宝を含む多くの文化財が残されていたが、先の沖縄戦によりその殆どが灰燼に帰すことになる。終戦後発足した琉球政府文化財保護委員会は、戦災により破壊された文化財の復元整備として、昭和 31（1956）年に園比屋武御嶽を嚆矢として整備を開始する。その後、同委員会は昭和 45（1970）年に首里城跡及び周辺の戦災文化財復元計画を策定し、同年、日本政府は第一次沖縄復帰対策要綱を閣議決定した。その中で戦災文化財の復元修理を推進する旨を明らかにし、翌年にはその調査費が計上されている。

そして沖縄は、昭和 47（1972）年に本土復帰を果たす。その一環で同年策定された第一次沖縄振興計画に盛り込まれた要項に基づき、総理府外局沖縄開発庁の予算で、沖縄県教育庁文化課による首里城跡の復元整備を目的とした発掘調査が開始されることになる。その調査成果により、今日まで多くの建造物が復元を見ることができ、一般に公開されている。

今回報告する中城御殿跡の遺構確認調査は、昭和 63（1988）年度に沖縄県土木建築部が策定した、首里城公園基本設計に基づく公園整備を目的とした調査で、平成 19（2007）年度から沖縄県土木建築部より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施している。

調査にあたっては、予算分任元である沖縄県土木建築部都市公園課に対して予算要求を行い、調査開始後には文化財保護法第 99 条の規定により、沖縄県教育庁文化財課へ着手報告を行った（平成 27 年 6 月 3 日付 埋文第 188 号・平成 28 年 1 月 6 日付 埋文第 595 号・平成 28 年 11 月 8 日付 埋文第 512 号・平成 29 年 8 月 21 日付 埋文 326 号・令和元年 7 月 11 日付 埋文第 338 号）。

また、調査終了後には終了報告を行うとともに（平成 27 年 12 月 25 日付 埋文第 578 号・平成 28 年 1 月 6 日付 埋文第 595 号・平成 28 年 11 月 18 日付 埋文第 534 号・平成 30 年 3 月 9 日付 埋文第 658 号・令和元年 12 月 9 日付 埋文第 695 号）、発見された埋蔵文化財（出土品）の内訳・数量の報告を行った（平成 27 年 12 月 22 日付 埋文第 568 号・平成 28 年 1 月 6 日付 埋文第 595 号・平成 28 年 11 月 18 日付 埋文第 535 号・平成 30 年 3 月 9 日付 埋文第 657 号・令和元年 12 月 6 日付 埋文第 694 号）。

第２節　調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成 27（2015）～ 29（2017）年度及び令和元（2019）年度に実施し、調査報告書作成に係る資料整理業務は、令和元（2019）年度及び令和２（2020）年度に実施した。その体制は次のとおりである（職名は当時のもの）。

平成 27（2015）年度（発掘調査）
事業主体　沖縄県教育委員会
　教育長　諸見里明
事業所管　沖縄県教育庁文化財課
　課　長　萩尾俊章
　記念物班　班長 金城亀信、主任専門員 長嶺均
事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
　所　長　下地英輝
　副参事　盛本勲
　調査班　主任専門員 山本正昭、羽方誠、
　　専門員（臨任）新垣有一郎
発掘調査作業　文化財調査嘱託員
　田村薫
発掘調査作業員
　具志榮建、新本保明、池原進徳、川満昭男、
　久銘次均、城間正司、高橋正幸、仲村悦子、
　新本淳、比嘉美幸、渡邊愛依、渡邊瑞茂

平成 28（2016）年度（発掘調査）
事業主体　沖縄県教育委員会
　教育長　平敷昭人
事業所管　沖縄県教育庁文化財課

課　長　萩尾俊章
記念物班　班長 上地博、指導主事 神村智子
事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　金城亀信
副参事　濱口寿夫
調査班　班長 仲座久宜、主任専門員 山本正昭、
主任 宮城淳一、専門員 田村薫
発掘調査作業　文化財調査嘱託員
久場大暉、仲嶺真太、外間裕一
業務委託関係　株式会社島田組

平成 29（2017）年度（発掘調査）
事業主体　沖縄県教育委員会
教育長　平敷昭人
事業所管　沖縄県教育庁文化財課
課　長　萩尾俊章
記念物班　班長 上地博、主任専門員 羽方誠
事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　金城亀信
調査班　班長 仲座久宜、主任 宮城淳一、
専門員 田村薫
発掘調査作業　史跡・埋蔵文化財調査員
平良悟、高原彬浩、仲嶺真太
発掘調査作業員
新垣良雄、古我知勇、砂辺光義、平良猛、
玉寄守朗、知念和伸、安村重保、山本裕二、
山内昌敏、新垣智也

令和元（2019）年度（発掘調査・資料整理）
事業主体　沖縄県教育委員会
教育長　平敷昭人
事業所管　沖縄県教育庁文化財課
課　長　濱口寿夫
記念物班　班長 仲座久宜、主任専門員 羽方誠、
主任 宮城淳一
事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　城田久嗣
副参事　真栄田義光
調査班　班長 中山晋、主任 田村薫、
専門員 奥平大貴
発掘調査作業　史跡・埋蔵文化財調査員
久場大暉、國吉ななせ、島袋桃子、根間翔吾、
高原彬浩、平良悟
発掘調査作業員
新垣良雄、石川達貴、親川あや子、新本淳、
西山久、樋口光子、平安山良子、宮城親正、
安村重保、米田稔
資料整理作業　埋蔵文化財資料整理員
市川里恵、大城友理華、大村由美子、
崎原美智子、島千香子、島袋久美子、知花香織、
津多恵、當真香、富平砂綾子、仲村綾乃、
比嘉美智子、宮城初枝

令和２（2020）年度（資料整理）
事業主体　沖縄県教育委員会
教育長　金城弘昌
事業所管　沖縄県教育庁文化財課
課　長　諸見友重
記念物班　班長 仲座久宜、主任専門員 新垣力
事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　瑞慶覧勝利
副参事　真栄田義光
調査班　班長 中山晋、主任 田村薫、
専門員 奥平大貴
資料整理作業　史跡・埋蔵文化財調査員
久場大暉、國吉ななせ、島袋桃子
資料整理作業　埋蔵文化財資料整理員
市川里恵、大城友理華、大村由美子、島千香子、
多々良亜矢子、津多恵、當真香、仲村綾乃、
比嘉美智子、與儀暁裕

第３節　発掘作業の経過

平成 27 年度

平成 27（2015）年度の調査は、上之御殿に埋蔵する遺構を確認することを目的として６月１日から 12 月 18 日まで調査を実施した。

まず、６月１日に現場事務所周辺の草刈り及びユニットハウスの設置、使用道具類の搬入作業などを行い、その後６月 11 日まで、調査区周辺の草刈り作業を実施し、現場作業開始の準備を終えた。その間、トレンチ設定のための測量および磁気探査による異常点の確認も並行して行った（図版１－１）。

６月 12 日より重機による表土掘削を行った後に発掘調査作業員による人力掘削を開始し、調査区内の遺構検出作業を進めていった（図版１－２）。

８月に入り、南部土木事務所の街路事業の一環として行われている龍潭線（県道 29 号線）の道路拡幅工事の一環として、中城御殿跡の正面石積みを北側へ移設する工事が行われることとなった。その工事に伴い、石積みの移設先の発掘調査を実施することとなり、石牆地区として新たに調査区を設定し、８月 27 日から 10 月９日の期間、人力による遺構検出を実施した（図版１－３）。

平成 27 年度の調査では、上之御殿地区の調査では拝所に付随する階段の根石と考えられる石列や庭園内の池のほか、上之御殿西に位置する石牆などを確認した（図版１－４、２－12）。石牆地区の調査では、平成４（1992）年の県立博物館調査時に検出した石積み１の根石や、その下層にあった、根固めと考えられる配石遺構などを確認した。遺構の記録は写真撮影及び実測による図面作成にて行った。

調査終了後には、土嚢およびブルーシートによる遺構保護を行った上で、土砂を搬入し埋め戻しを行った。

平成 28 年度

平成 28（2016）年度の調査は、上之御殿庭園周辺の遺構検出を目的として調査を行った。株式会社島田組と平成 28 年６月 29 日から平成 29（2017）年３月 17 日までの約９か月間「平成 28 年度首里城公園発掘調査に伴う支援業務委託（人力掘削）」の契約を締結し、10 月 12 日から 11 月 11 日まで調査を実施した。

中城御殿跡の調査を行う前に、首里城公園発掘調査として真珠道跡の調査を８月から行い、現場事務所を中城御殿跡地に設置していたため、中城御殿の調査開始時には、その現場事務所を引き続き使用した。

調査区周辺の草刈り作業は 10 月７日から 10 月 11 日まで実施し、その間、調査区設定のための測量も行った。10 月 12 日には不発弾確認のための磁気探査を行うと共に、重機で表土の除去作業を行った。平成 27（2015）年度に検出した石牆の延長線上に調査区を設定し、重機による掘削を実施したが、石牆は見つからず、現代造成土が深く堆積する状況にあったため、実際はより東側に埋蔵されていると想定された。

10 月 17 日から庭園池部分の人力掘削を開始し、庭園に残る遺構の検出作業を進めていった。結果、平成 27 年度に検出した池や、池に繋がる石列などの遺構が発見され、庭園周辺の遺構が良好な状態で残存していることが判明した（図版２－10）。

調査終了後は、前年度同様土嚢による保護を行ったが、次年度に引き続き同地区を調査する予定のため、埋め戻しは実施せずに、耐光性のシートによる保護を行って調査を終了した。

平成 29 年度

平成 29（2017）年度の調査は、上之御殿の西側石牆と庭園遺構の検出を目的とし、平成 29 年８月２日から平成 30（2018）年２月 28 日まで実施した。平成 28（2016）年度の調査時に、石牆が想定より東側に存在する可能性が考えられたため、平成 28 年度調査時に検出した石列の延長線上の南北にトレンチを設定した。

現場事務所および現場機材の搬入は７月３日に行い、同日より草刈り作業を実施した。その後、人力による掘削を順次開始し、平成 27（2015）・28 年度に調査を行った部分までを再検出した。前年度までの調査状況を復元した後に、８月１日よ

り庭園部分と石牆想定部の磁気探査を実施し、未調査部分の人力掘削に着手した。庭園部分は前年度までの調査によりおおよその深度が判明していたため人力掘削のみで検出が可能だったが、石牆想定部はどの程度の深さから遺構が検出されるか不明だったため、当初は重機掘削を行わず、人力によって慎重に掘削を進めた。掘削開始より１か月半ほど経過した頃から、石牆の一部と見られる石積みが検出され始め、石積みが真下から積みあがっている状況が確認できた（図版１－５）。

調査終盤には、記録作業として通常の写真撮影のほか、高所作業車による上空からの写真撮影や、オルソ合成した写真を使用した現地測量などを実施した。

石牆の根石も残っているものと思われたが、調査区の掘削深度が２ｍを超え、崩落する危険があったため、根石部分の調査は安全策を考慮した上で次年度に行うことを決定し、調査を終了した。調査終了後は土嚢及び白砂による保護を行い、次年度に重機で掘り起こせるよう、目印としてブルーシートを被せ、埋め戻した。

令和元年度

令和元（2019）年度は、平成 29（2017）年度に検出した石牆の根石および、上之御殿の建物跡に関連する遺構を確認するため、令和元年６月 25 日から 12 月４日の期間、トレンチを２つ設定し、調査を行った。６月 25 日から現場事務所の設置・現場機材の搬入を行い、発掘調査作業員は７月１日より作業を開始し、７月７日まで調査区周辺の草刈りを実施した。草刈り作業終了後、人力にて平成 29 年度の埋土を掘削し、遺構検出地点を確認した後に、重機で平成 29 年度の調査深度まで掘削を行った。重機掘削及び埋め戻しについては、株式会社島田組と「首里城公園発掘調査に伴う重機掘削等業務委託」の契約を締結し実施した。その後人力による掘削で、石牆の根石部分の検出を行った。

調査の結果、石牆に直交して繋がる石積が、根石と同じ高さから検出された（図版１－７）。

石牆付近のトレンチの掘削と並行して、戦前の航空写真によって上之御殿の建物が位置していたと考えられる地点にもトレンチを設定し、７月 30 日より掘削を行った。庭園や拝所の標高より、地表面より１ｍ内の深度に遺構が残存していると想定し、掘削を行ったところ、戦後に建てられたと見られる、コンクリートの基礎が打設されており、大部分が破壊されている状況にあった。この建物は博物館当時も文化課の資料室として使用され、博物館閉館後に撤去されたものであり、その一部が残存したと考えられる。

上之御殿の遺構は大部分が破壊されているものの、一部に当時のものと見られる石敷き遺構と、併設するモルタルの平場を検出した。また、中城御殿以前の按司屋敷のものと考えられる石組遺構も検出している。

掘削終了後は高所作業車による写真撮影を 10 月 23 日に行い、その後地表での写真撮影及び実測作業を実施した。実測作業は 11 月８日まで行い、実測作業の終了した個所から順次土嚢及びブルーシートによる遺構保護を行い、埋め戻しをして調査を終了した（図版２－ 15・16）。

第４節　整理作業の経過

調査報告書の刊行に向け、令和元（2019）年度および令和２（2020）年度に資料整理作業を実施した。現場の雨天時に出土遺物の洗浄作業を行っていたが、すべてを終えることはできなかったため、資料整理作業は遺物の洗浄から開始した。その後、調査区の層序および遺構関係の整理をした上で、注記作業を行った。注記終了後は、順次接合・図化対象遺物の抜出・図化・トレース・図版作成・写真撮影を行った。現場からは遺構よりサンプリングした土壌サンプルを持ち帰っていたため、そのサンプルの花粉分析・微細物分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託した。

これら作業と並行して、遺構図・土層図等のトレース後、現場で撮影した写真と併せてレイアウトを行い、原稿執筆ののち編集後、随意契約により印刷業者と契約を行い、本調査報告書を刊行する手順をとった。

1．磁気探査作業（トレンチ 10）

2．重機掘削作業（トレンチ 10）

3．配石１検出作業（トレンチ１）

4．石牆１検出作業（トレンチ２）

5．石牆１検出作業（トレンチ４）

6．石畳１検出作業（トレンチ４）

7．石積み３・４検出作業（トレンチ５）

8．インターンシップ生による遺構検出作業（トレンチ６）

図版１　作業経過写真１

９. 庭園周辺清掃作業（トレンチ７）

10. 溜池２検出作業（トレンチ８）

11. 石列２検出作業（トレンチ８）

12. 石積み６検出作業（トレンチ 10）

13. 方形石組１検出作業（トレンチ 12）

14. 遺物洗浄作業

15. 土嚢による遺構保護作業（トレンチ５）

16. 重機による埋め戻し作業（トレンチ５）

図版２　作業経過写真２

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅跡である。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切及び知行を下賜され、中城王子あるいは中城御殿と称されたことによる。当初その建物は、17 世紀前半に現首里高等学校敷地内（現首里真和志町）に創建され、王府の別邸である大美御殿の東面に位置していたことから東宮とも呼ばれた。その後、中城御殿は明治３（1870）年に現在の首里大中町に移転することが決まる。ここでは今回の調査対象となる移転後の環境について記すことにする。

中城御殿跡は、沖縄本島南部の那覇市首里、北緯 26° 13′ 15″、東経 127° 43′ 05″、標高約 100m の台地上に位置し、地番は那覇市首里大中町１丁目１番１～３にあたる。

この基盤を構成するのは、地質時代の第四紀更新世（180-160 万年前～１万年前）に区分される琉球石灰岩で、敷地西側の上之御殿が存在した地区においては、拝所及び庭園でその露頭が確認できる。またその下位には、鮮新世（500 万年前～160 万年前）から中新世（2,300 万年前～ 500 万年前）に区分される島尻層群が堆積している。この表層を成す琉球石灰岩層は透水性が高く、そこに浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ（泥岩・砂岩）の面でとめられ、両者の境界から泉として湧き出すことになる。この湧水を利用した井泉・樋川は、現在も首里の各地に点在するほか、中城御殿の古写真においても確認でき、今日も豊富な湧水量を誇っている。

中城御殿の南は、道路を隔てて龍潭に面し南東側に首里城を望むことができる。地形は首里城に至る南側が高い形状をなすが、敷地の大半はテラス状の比較的平坦な場所に位置しており、この北側に面する儀保町や末吉町の町並みを見渡すことはできない。しかし、上之御殿が建つ西側は石牆で区画され小高くなっており、西方に広がる那覇の街や港をはじめ、遠くは慶良間・粟国諸島の島影を望むことができる。

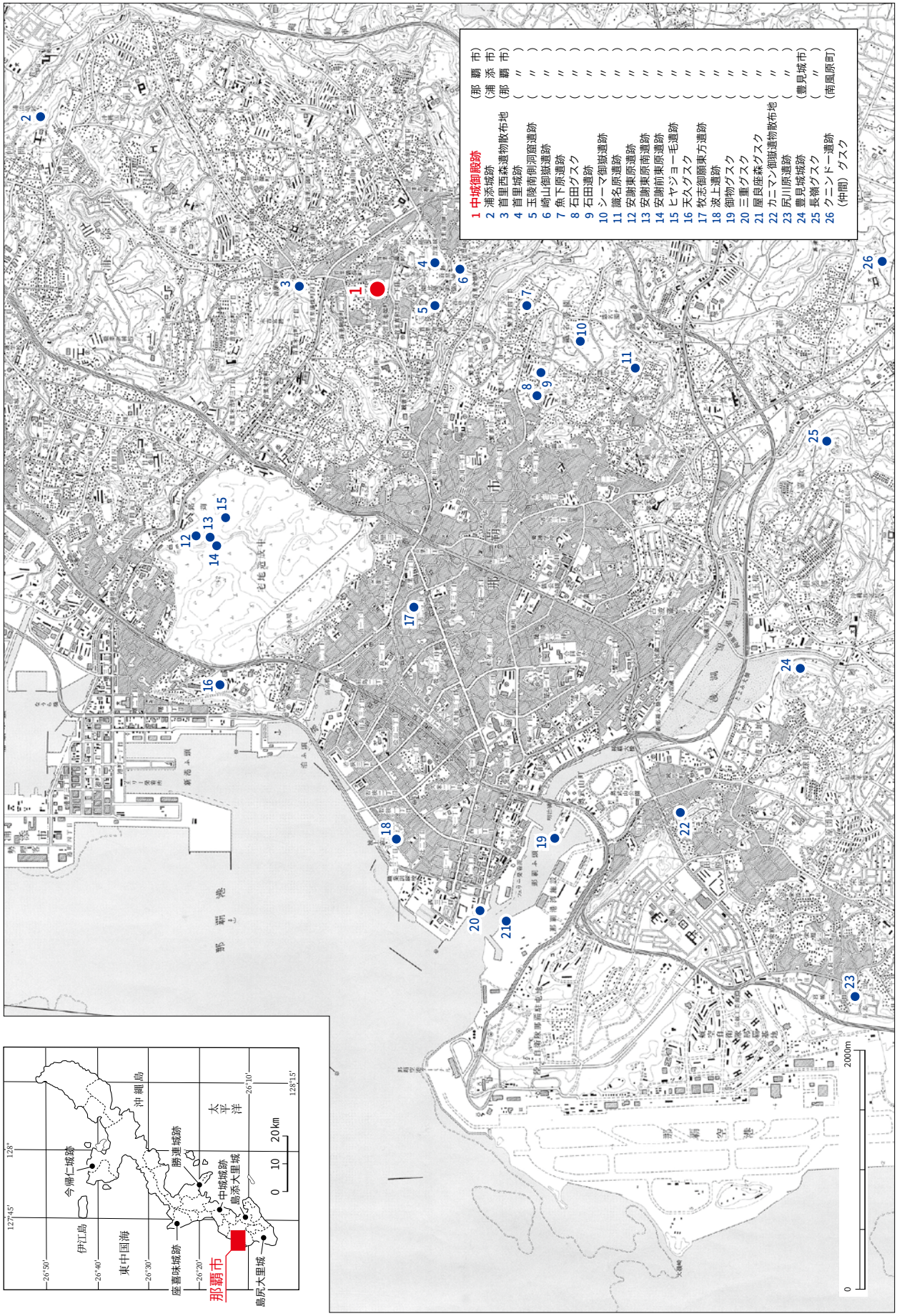
この立地に関し、中城御殿の南東側に近接する首里城をもとにみることにする。首里城は、北側に虎頭山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ嶽及びナゲーラ川、南に安里川を擁して立地している。1713 年、蔡温はこの立地に関し「恭しく玉陵を観るに、国都の高処に発祖し、最も好し」（球陽 688 号球陽研究会編 1974）と遺している。なお、この立地を風水地理学的観点から見ると、弁ヶ岳は発粗としてエネルギーの源泉である龍脈として捉えられている。その龍脈は虎頭山や西森、末吉の連続する山並みをとおり、西海岸へ抜けていく。そしてその先に浮かぶ慶良間諸島は錦屏という案山にあてられ、北谷・読谷の丘陵が白虎、小禄・豊見城の丘陵を青龍とする風水空間としている。つまり、龍脈から流れでる気を隅々まで巡らせることにより、国王の安泰を願ったのである（都築昌子 2005）。このように首里城の立地は、軍事・政治・経済的な実利性のみならず、風水思想の上からも蔵風得水の地として優れた条件を備えているとされる。

今報告の対象となる中城御殿の造営に際しても、明治元（1868）年に久米村の地理師である与儀親雲上ら３人を中国福州に派遣して風水を学ばせ、建物の配置が行われたとされ（球陽 2206 号球陽研究会編 1974）、前記した首里城の例とも調和した思想により、選定立地から設計・施工までが計画的に行われたことが考えられる。

第２節　歴史的環境

中城御殿は、国王の世子殿として、当初は尚豊王代（在位 1621 ～ 1640 年）に綾門大道北側、現在の首里高等学校敷地内に創建された（第１表）。その後、明治元（1868）年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。工事は明治３（1870）年に着工、明治７（1874）年３月に竣工し、尚典は明治８（1875）年に移転

第１図　沖縄本島の位置図


1 中城御殿跡
2 浦添城跡
3 首里西森遺物散布地
4 首里城跡
5 玉陵南側洞窟遺跡
6 崎山御嶽遺跡
7 魚下原遺跡
8 石田グスク
9 石田遺跡
10 シーマ御嶽遺跡
11 識名原遺跡
12 安謝東原遺跡
13 安謝東原南遺跡
14 安謝前東原遺跡
15 ヒヤジョー毛遺跡
16 天久グスク
17 牧志御願東方遺跡
18 波上遺跡
19 御物グスク
20 三重グスク
21 屋良座森グスク
22 カニマン御嶽遺物散布地
23 尻川原遺跡
24 豊見城城跡
25 長嶺グスク
26 クニンドー遺跡
(仲間) グスク
(那覇市)
(浦添市)
(那覇市)
〃
〃
〃

した。世子はこの御殿において生活を送るとともに執務を行った。

中城御殿の敷地は 3,408 坪（11,246 ㎡）で、そのエリアは東西に大きく二分することができる。東側は主要な建物が群立する約 2,400 坪の区域で、20 棟以上の建造物が密接して軒を連ねていた。これに対し、西側は約 1,000 坪の区域で、巨木が鬱蒼と茂る中に上之御殿が１棟建ち、周辺は自然の岩盤を利用した庭園や、大岩を取り囲むように石造の螺旋階段を設置した拝所のほか、御射場と称される弓場が存在した。

そして、明治 12（1879）年の廃藩置県により琉球王国は終焉を迎えることになる。首里城は明け渡され、熊本鎮台沖縄分遣隊により占拠される。これにより、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王をはじめとする王族は退去を余儀なくされ、一時的に中城御殿に移り住むことになるが、明治 18（1885）年には華族令により東京に移転することになる。

その後、第二次世界大戦が始まると御殿の一部は陸軍少佐の宿舎として使用される。その際に中城御殿所蔵の宝物を分散させ、敷地内の岩陰に隠すなどの避難措置を執った。しかし、昭和 20（1945）年４月、米軍の砲撃により建物は破壊されることになる。避難した宝物類は残されていなかったため、建物とともに焼失したか、米軍により戦利品として持ち去られたことが考えられる（その一部は昭和 22 年にフィリピンから、昭和 28 年にアメリカから返還）。その直後は、陸軍の機関銃陣地として使用されることで尚家職員は退去させられ、終戦を迎えることになる（沖縄県立博物館 1996）。それまでの間、御殿は尚家の屋敷（尚侯爵邸）として、王府の伝統的なしきたりが保たれた空間であったとされる。

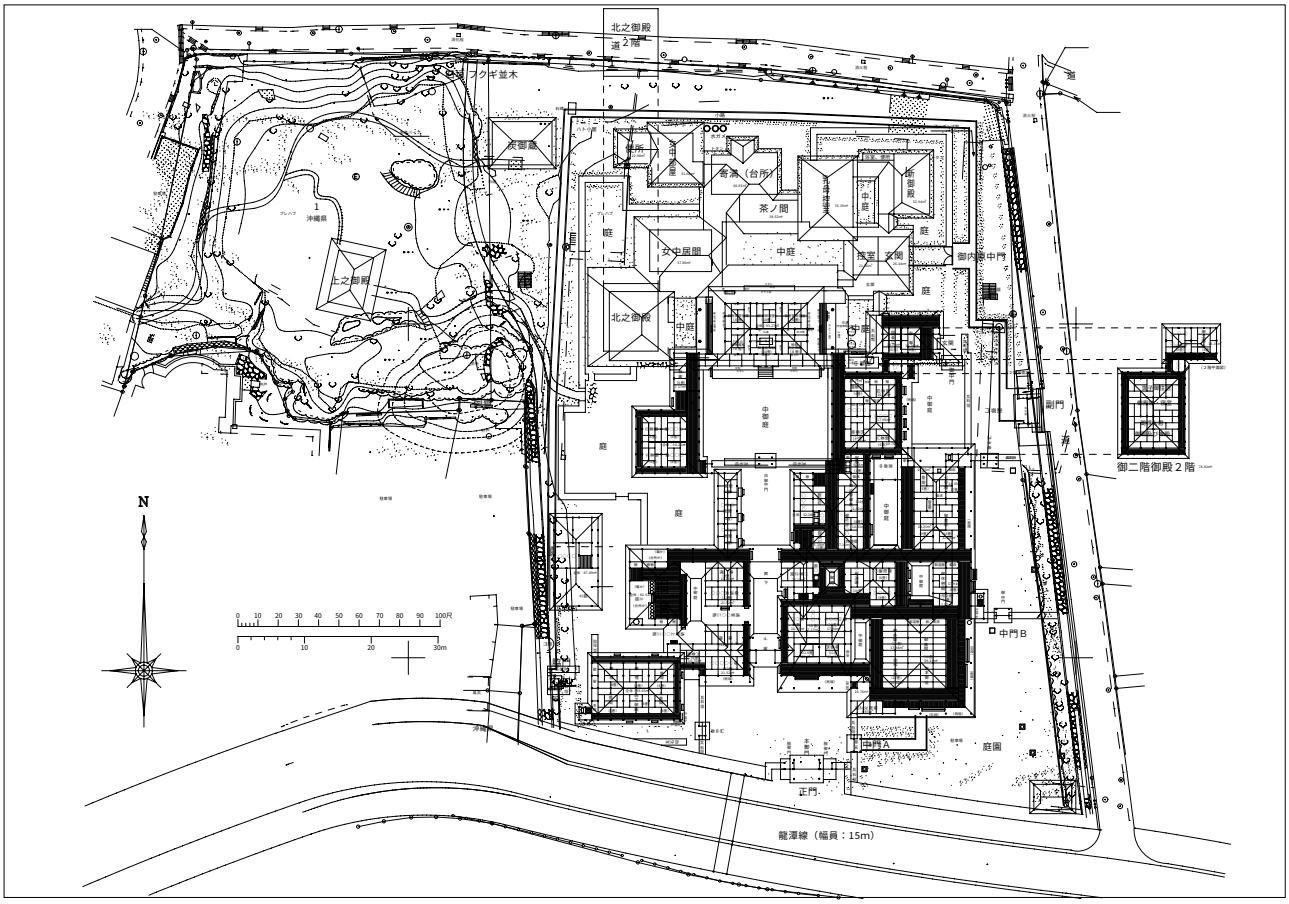
終戦直後の跡地には、一時引揚者のバラックが建つが、その後、首里市役所、首里バス会社として使用され、のちに龍潭東側にあった博物館を移転するため、琉球政府により買い上げられる。そして昭和 40（1965）年から翌年にかけ、米国民政府の援助により琉球政府立博物館新館が建設され（図版４）、昭和 47（1972）年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称される。

この本土復帰から 20 年を記念し、首里城正殿を含む周辺一帯が首里城公園として開園するにあたり、その一環として中城御殿の石牆を復元する計画が浮上した。復元に先立ち平成３（1991）年度、平成４（1992）年度、平成６（1994）年度の３次にわたり石牆部分の発掘調査が実施され、石積み根石や石組遺構、ピット等の遺構を検出し、平成４（1992）年に正面及び東側石牆の復元整備が行われた（沖縄県立博物館 1993、1994、1995）。その後、博物館は開館から 40 年が過ぎ、施設の老朽化及び収蔵機能の低下に伴い新館への移転が計画され、平成 18（2006）年３月に休館、平成 19（2007）年３月に閉館・移転し、同年 11 月３日、那覇市おもろまちに沖縄県立博物館・美術館が開館する。そしてこの旧館建物は、平成 21（2009）年の解体工事により撤去された。博物館移転後は、平成 19（2007）年度より跡地利用計画策定に先立ち、埋蔵文化財の基礎資料を得るための遺構確認調査が行われ、現在に至る。

図版３　中城御殿跡正門付近

図版４　建設中の琉球政府立博物館

第３図　中城御殿屋根伏図



第４図　中城御殿間取り復元図１

第５図　中城御殿間取り復元図２

第１表　中城御殿跡関連年表

西 暦	元 号	事 項
1621 ～ 40 年	尚豊王代	尚豊王代　中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1864 年	尚泰 17/ 元治元年	尚典（のちの中城王子）が生まれる
1866 年	尚泰 19/ 慶応２年	尚泰王が冊封をうける
1868 年	尚泰 21/ 明治元年	尚典が尚泰王の世子となる
		久米村の与儀親雲上を福州に派遣して風水を学ばせ中城御殿の風水見を行う
1870 年	尚泰 23/ 明治３年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1872 年	尚泰 25/ 明治５年	琉球藩設置
1874 年	尚泰 27/ 明治７年	中城御殿竣工
1875 年	尚泰 28/ 明治８年	中城王子が新築された屋敷に移る
1879 年	尚泰 32/ 明治 12 年	３月　廃藩置県　首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る
		５月　尚泰・尚典ともに上京し東京麹町に屋敷を賜り華族となる
1880 年頃	—	尚泰子女の安室御殿が離縁のため中城御殿へ移り住み最後の聞得大君として御殿の神事に奉仕する
1884 年	明治 17 年	中城御殿ほか 21 ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定される
1901 年	明治 34 年	尚泰逝去し玉稜に葬られる
1906 年	明治 39 年	尚典帰郷し中城御殿で暮らす
1917 年	大正６年	尚昌の長女　文子が生誕する
1920 年	大正９年	尚典 57 歳で没し玉稜に葬られる
		尚泰子息の尚時が妻静子とともに上之御殿に移り住む
		このころ尚文子が中城御殿を訪れる
1921 年	大正 10 年	東宮殿下（のちの昭和天皇）来訪にあたり事前に大広間が洋間に改装される
		３月４日　東宮殿下が来県し中城御殿を訪問する
1922 年	大正 11 年	尚泰夫人の松川御殿が中城御殿で逝去する
1923 年	大正 12 年	鎌倉芳太郎が中城御殿にあった多くの美術品を調査する
1932 年	昭和７年	尚典子女の今帰仁御殿が安室御殿（聞得大君）を継ぐため北之御殿に移る
1933 年	昭和８年	尚文子が来訪し新御殿に滞在する
1934 年	昭和９年	田邊泰が来訪する
		尚典夫人の野嵩御殿が逝去する
1936 年	昭和 11 年	尚昌義姉の津軽照子が来訪する
1937 年	昭和 12 年	尚文子が井伊家に嫁ぐ
1939 年	昭和 14 年	日本民芸協会の柳宗悦・坂本万七らが来訪する
1944 年	昭和 19 年	第 32 軍司令部参謀の長野英夫少佐が御殿の一室を宿泊所として使用する
		10 月 10 日　米軍による空襲により旧那覇市の９割が焼失する（十・十空襲）
1945 年	昭和 20 年	３月下旬　宝物を３つの大金庫へ移す
		４月６日頃　中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上する
		４月８日頃　火災をのがれた御後絵（肖像画）を御嶽岩のうしろに移す
		４月 10 日頃　日本軍が上之御殿や防空壕などを機関銃陣地にする
		戦後　一時引き揚げ者のバラックが建つ
1950 年	昭和 25 年	１月　首里市役所が中城御殿跡に移転する
		７月　首里市営バスが営業所を同敷地内に設置する（1966 年まで）
1954 年	昭和 29 年	首里市が那覇市に合併され首里市役所が首里支所となる
1959 年	昭和 34 年	井伊文子が中城御殿跡を訪れる
1965 年	昭和 40 年	琉球政府が敷地を購入する
1966 年	昭和 41 年	首里支所が当蔵に移転　首里バス（1951 年に民営化）が当蔵へ移転する
		10 月　米国の援助により新敷地に鉄筋コンクリート建の博物館新館を建設する
		龍潭池畔にあった「琉球政府立博物館」が移転し 11 月に開館する
1972 年	昭和 47 年	５月　日本復帰にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1991 年	平成３年	沖縄県立博物館による石牆部分の第１次発掘調査が実施される
1992 年	平成４年	沖縄県立博物館による石牆部分の第２次発掘調査が実施される
1994 年	平成６年	沖縄県立博物館による石牆部分の第３次発掘調査が実施される
2004 年	平成 16 年	井伊文子逝去し伊是名玉稜に葬られる
2006 年	平成 18 年	３月　沖縄県立博物館が那覇市おもろまちの新館へ移転するため休館する
2007 年	平成 19 年	沖縄県立埋蔵文化財センターによる遺構確認調査が開始される

第３章　発掘調査の方法と成果

第１節　調査区の設定

平成 27（2015）年度から令和元（2019）年度まで、合計 12 のトレンチを設定し、調査を行った。本報告の調査ではトレンチごとに主体となる遺構がまたがって残存しているため、南側石牆周辺・西側石牆周辺・北側石牆周辺・庭園周辺・拝所周辺・上之御殿建物跡周辺の６地区に分けて報告を行う。各地区のトレンチ設定は次のとおりである。

南側石牆周辺（トレンチ１）

トレンチ１は中城御殿正門の西側石牆の移設工事に伴い、その北側の移設先、石牆の内側に南北約４m、東西約 13 mで設定した。屋根伏図によると、中城大親の南にあたり、平成４（1992）年度に沖縄県立博物館が実施した調査では、石積みと井戸が検出された地点にあたる。戦前の航空写真では植栽に覆われ、判然としない。

西側石牆周辺（トレンチ２～５）

上之御殿の西に位置する場所で、南北に走る石牆の一部が地表に露出する。トレンチ２は、上之御殿の南端側から石牆の西面に沿うように、南北約 10 m、東西は南端約 2.5 m、北端約６mの台形状に設定した。戦前の航空写真では木々に覆われていた部分にあたる。

トレンチ２と同年に調査を実施したトレンチ３は、上之御殿の中でも北西の隅付近にあたる部分で、石牆などの境界を確認するために東西約２m、南北約 2.5 mで設定した。

トレンチ４は、トレンチ２で検出した石牆の北側延長線上に、南北方向約 13.5 m、東西方向約 6.2 mの範囲で設定し、延長部の確認を目的とした。県立博物館当時は、文化課整理室のプレハブが位置していた地点にあたる。

トレンチ５は、トレンチ４で検出された石牆の根石部分及び石牆西の遺構残存状況の確認を目的として、石牆上部から西側にかけて、東西約 16 m、南北約７mで設定した。

北側石牆周辺（トレンチ６）

上之御殿の北端に位置する。縁から北は急斜面になっており、北側の石牆が存在していたと想定される地点となっている。縁に沿って東西約 12 mに渡ってトレンチを設定し、北側石牆の上部遺構の確認を目的として調査を実施した。

庭園周辺（トレンチ７～９）

上之御殿の南側に位置する庭園で、現在も池の一部が地表面に露出している。トレンチ７は、池から南の庭園上部の南側傾斜付近までの範囲に、東西約 15 m、南北約９mで設定し、庭園遺構の検出を目的とした。

トレンチ８は、トレンチ７で検出した庭園池の延長部を確認する目的で、トレンチ７の西側から西側石牆の露出部までの範囲に東西約 10 m、南北約 10 mで設定した。

トレンチ９は、庭園の南北ラインでの堆積状況を確認する目的で、トレンチ８の南側に東西約３m、南北約３mの範囲に設定した。

拝所周辺（トレンチ 10）

トレンチ 10 は、大岩の拝所に付随していた階段遺構を検出する目的で、岩の周囲に東西約 10 m、南北約 10 mで設定した。戦前の航空写真では木々に覆われているが、その中でもひときわ高くなっている地点にあたる。また、大岩は県立博物館当時も地表に露出していた。

上之御殿建物周辺（トレンチ 11・12）

トレンチ 11 は、トレンチ４で検出した石畳の東側延長部を確認する目的で、東西約６m、南北約３mの範囲で設定した。

トレンチ 12 は、トレンチ 11 の南側に東西約４m、南北約８mの範囲に設定した。戦前の航空写真や屋根伏図では上之御殿の北にあたる部分で、県立博物館当時は文化課整理室の建物が位置していた。

１．トレンチ２・３・７・10（平成 27 年度調査区）

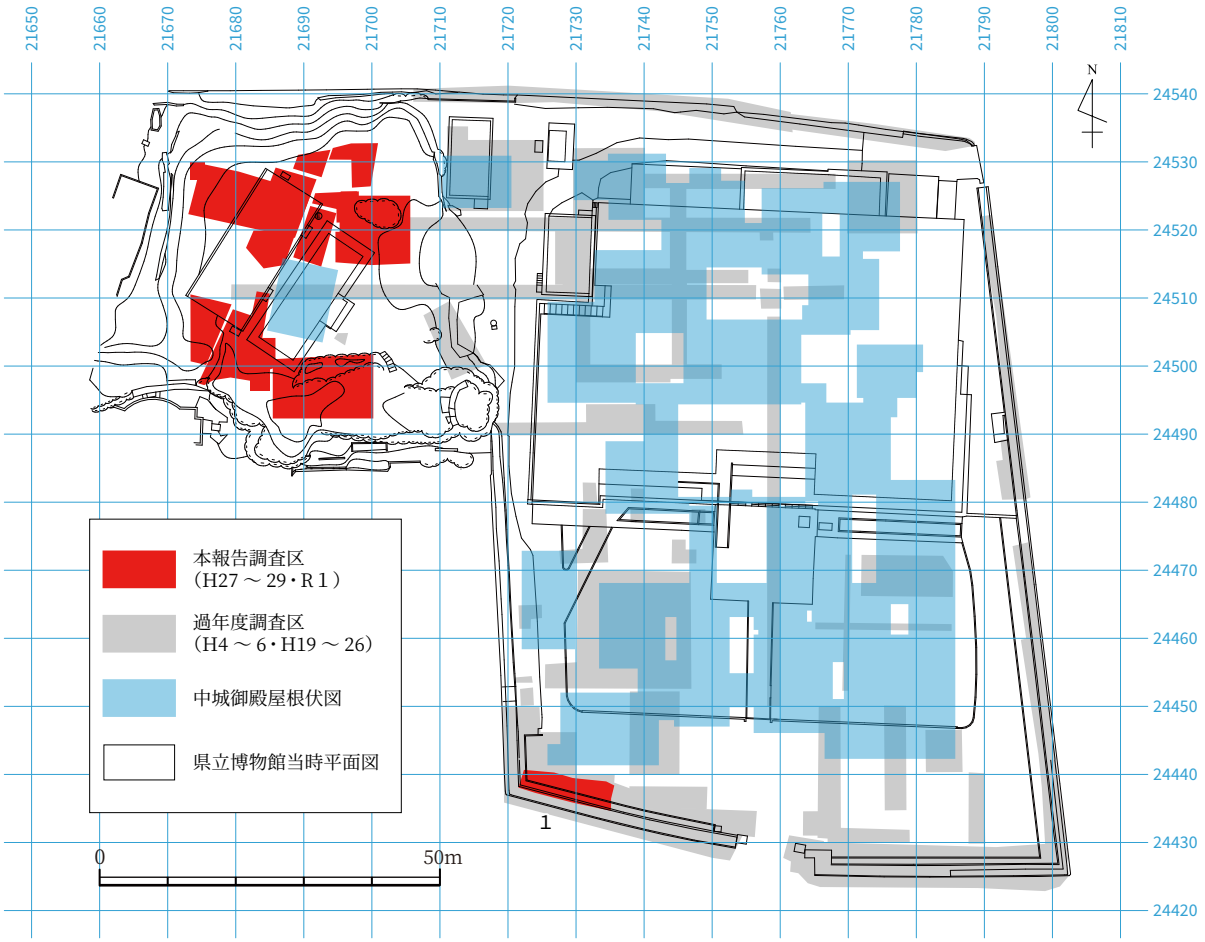
２．トレンチ４・６（平成 29 年度調査区）

３．トレンチ５・トレンチ 12（令和元年度調査区）

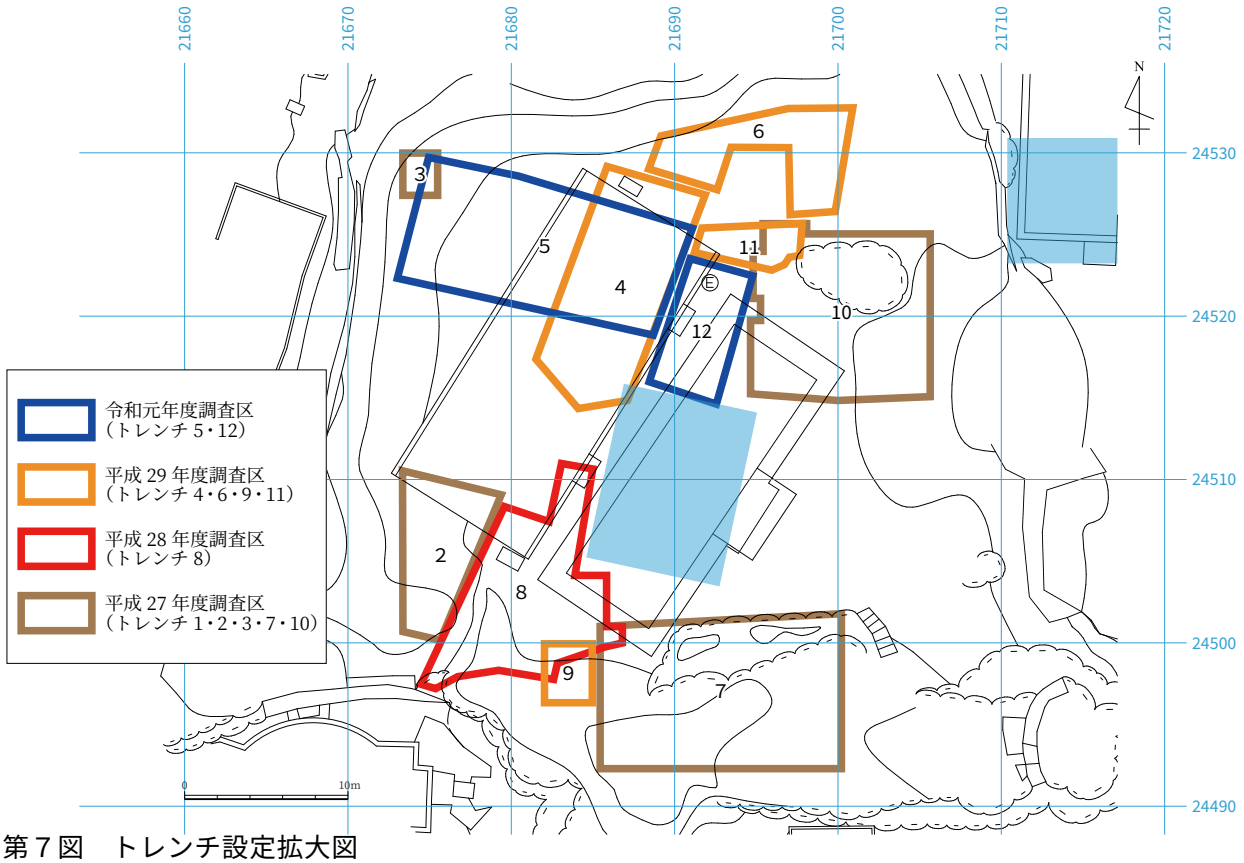
４．トレンチ８（平成 28 年度調査区）

５．トレンチ１（平成 27 年度調査区）

図版５　トレンチ設定状況



第６図　トレンチ設定全体図



第７図　トレンチ設定拡大図

第２節　層序

平成27（2015）～29（2017）、令和元（2019）年度調査区の層序は、基本的に平成26（2014）年度調査から設定している層序を踏襲し、基本層序第Ⅰ層～第Ⅴ層までを設定している。なお、各層の状況については本文に記すが、一覧は第２表に示した。

第Ⅰ層：表土、撹乱層。おもに戦後の開発により撹乱された層や持ち込まれた土砂を指す。県立博物館解体後の造成土にはコンクリート片や鉄筋類を多く含むが、撹乱により混入した中城御殿当時の遺物も含まれる。これらの遺物は、表土除去中にⅠ層の遺物として回収した。

主な遺物：撹乱層が主体であることから、新旧の遺物が多数混在している。15世紀代の青磁や白磁のほか、17世紀以降の肥前陶磁器などが含まれるが、大半は沖縄産の陶器である。これらの遺物から、本遺跡の変遷を見ることができるとともに、戦災やその後の開発により、大きく改変されたことを窺い知ることが出来る。

第Ⅱ層：戦中～終戦後の堆積層。中城御殿の遺構上に堆積する層で、中城御殿の瓦をはじめとする遺物が多く含まれる。また、地点によっては戦時中に被弾した穴を周辺の瓦礫や廃棄物で埋めたと思われる痕跡が確認されており、この堆積土もⅡ層とした。ここからは、終戦直後に使用されたと思われるガラス瓶類、金属製品が大量に出土している。

主な遺物：かつて中城御殿に葺かれた大量の瓦や、戦中～戦後に廃棄されたと思われるガラス瓶類、金属製品が多く含まれる。その中には戦前のある一定期間、全国各地で焼成された統制陶器や軍用食器が含まれている。

第Ⅱｂ層：中城御殿当時の遺構直上に堆積する層。第Ⅱ層に含まれるが、本層は被熱した状態で木炭を多く含み、破砕した遺物とともに、遺構表面を覆うように堆積している。この状況から、戦災により破壊された直後に堆積した層であることがわかる。本層は第Ⅱ層造成時に転圧され堅く締まっており、その影響で含まれる遺物も破砕した製品が多い。

主な遺物：遺物は被熱して破砕した製品が大半である。明治以降に焼成された肥前や瀬戸美濃産の陶磁器が主体である。蓋付きの碗や小碗・急須類が多く、複数個体が確認されていることから、揃いで存在していたことがわかる。

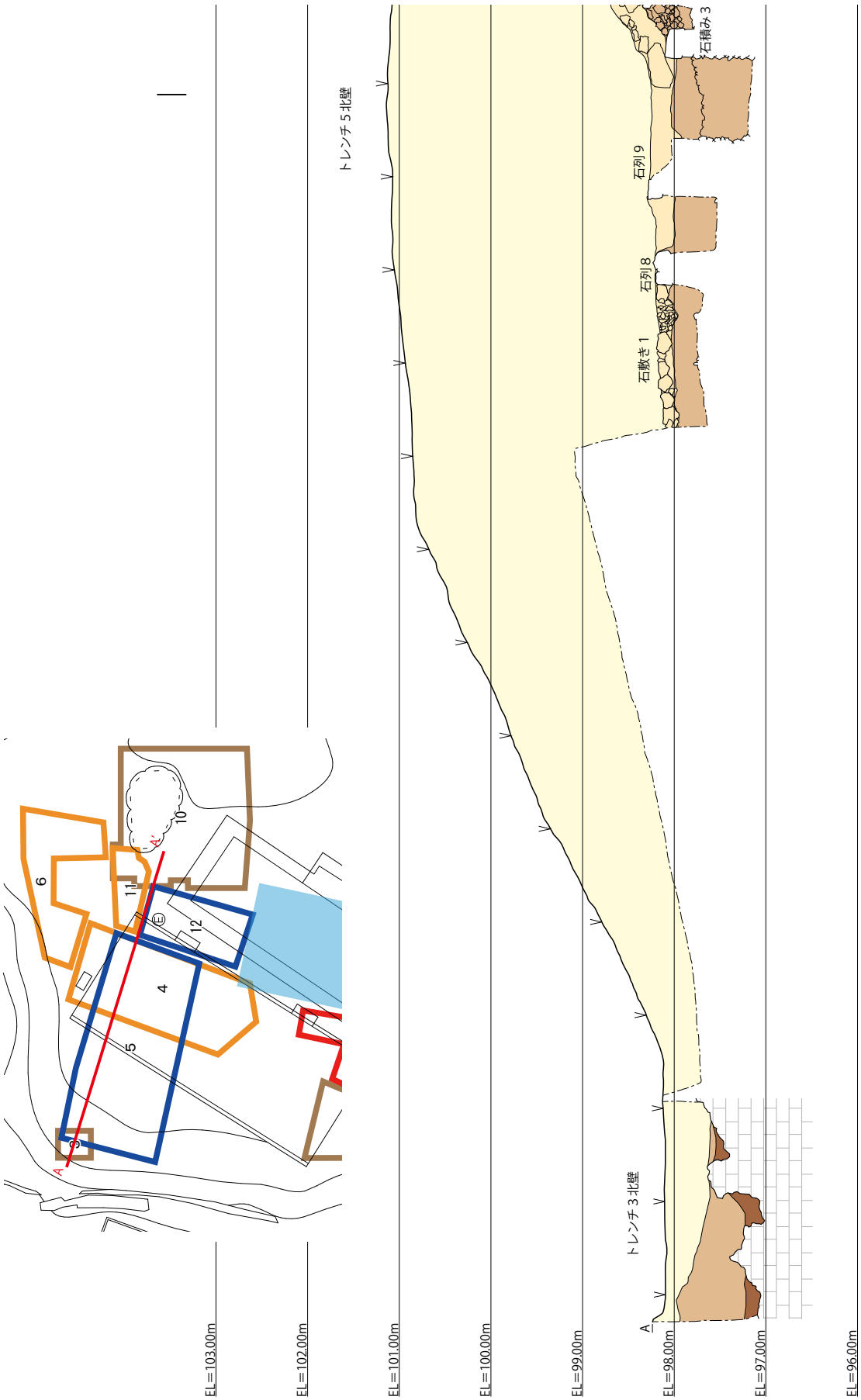
第Ⅲ層：基本的に中城御殿を造営するために盛土造成した層を指す。この造成層には、近世以降の陶磁器が多数含まれる。土層は均質でなく、礫などの混入も規則性が見あたらない。また、陶磁器などの遺物も多数含まれることから、周辺の土砂を投入したことが想定できる。土質及び混入物からⅢａ層、Ⅲｂ層、Ⅲｃ層に三分されるが、大きく時期の変わるものではない。

主な遺物：造成層には近世以降の沖縄産陶器が多く含まれ、その中に中国や肥前産陶磁器がわずかに含まれる。中城御殿造営にあたり客土として持ち込まれた土砂に混入していた遺物であることが考えられる。

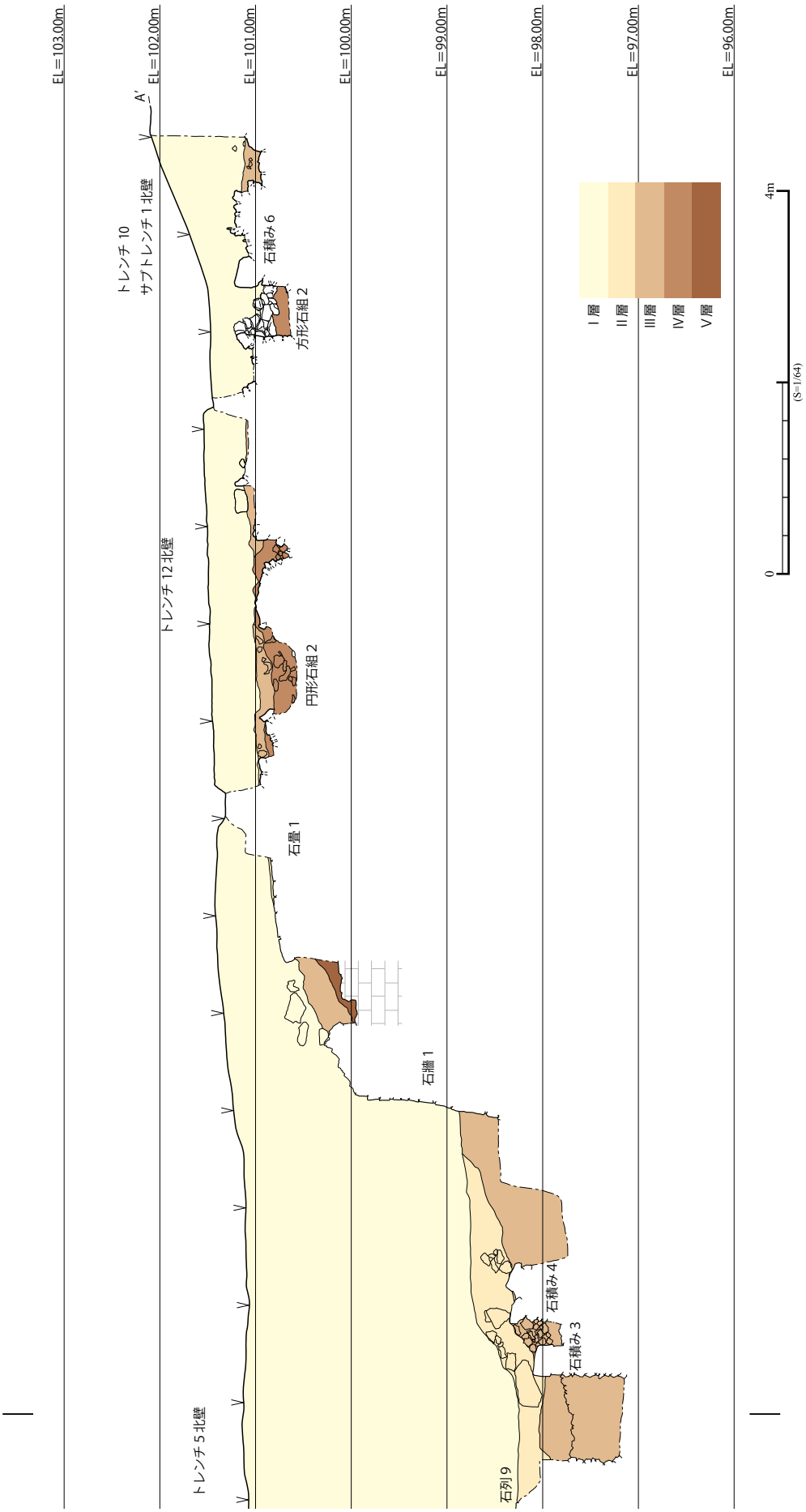
第Ⅳ層：中城御殿以前の生活層と考えられる層である。首里古地図によると中城御殿が当地に移転する前には、数件の士族屋敷が存在していたとされ、本層はこの時期のものと考えられる。遺物は近世以降の陶磁器が主体であるが、それ以前となる中世段階の陶磁器類もわずかながら散見でき、当地の変遷を物語っている。土質などからⅣａ層、Ⅳｂ層に二分できるが、大きく時期の変わるものではない。

主な遺物：近世以降の沖縄産陶器や薩摩産陶器のほか、陶質土器が多い傾向にある。その中で沖縄産陶器は、胎土に白土を混入する初期沖縄産無釉陶器が多くみられる。その他、中国や肥前産の陶磁器を含み、うち福建など中国南部で焼成された青花が多くみられる。

第Ⅴ層：平成19（2007）～22（2010）年度調査においては、地山として泥岩（クチャ）及び赤土（マージ）が確認されていたが、今回の調査では黄白色の琉球石灰岩の岩盤が確認されている。



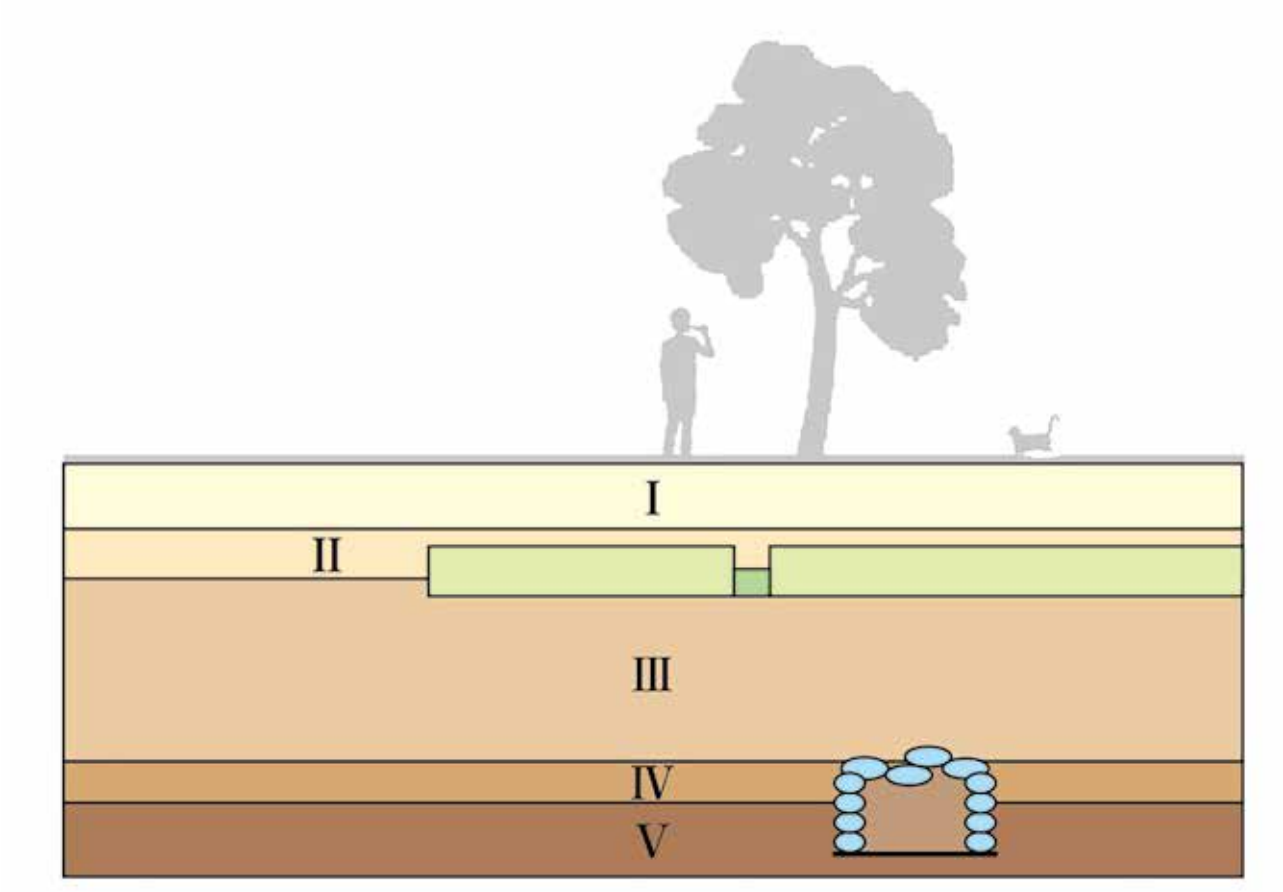
第８図　上之御殿層序概要１



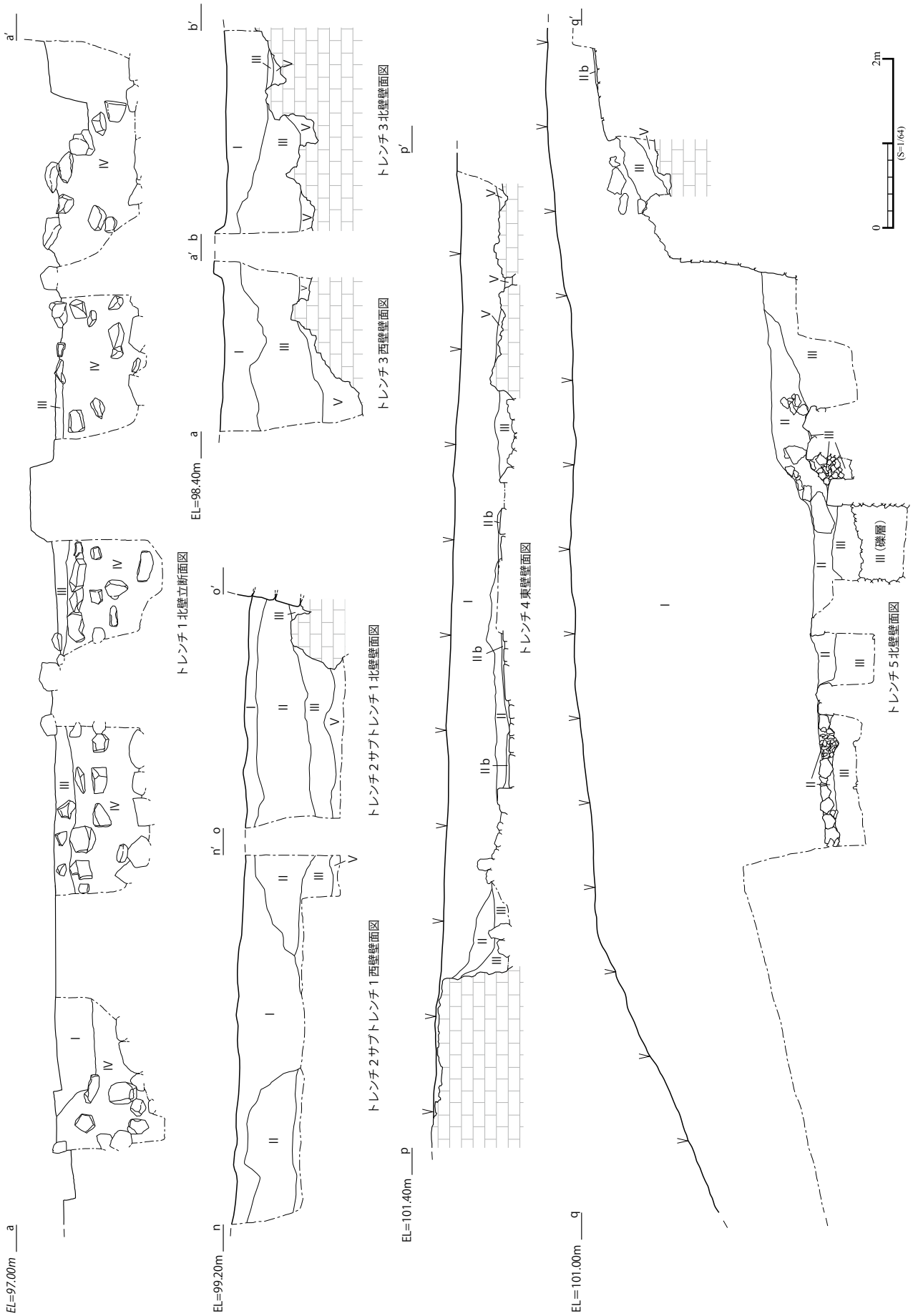
第９図　上之御殿層序概要２

第２表　主要層序一覧

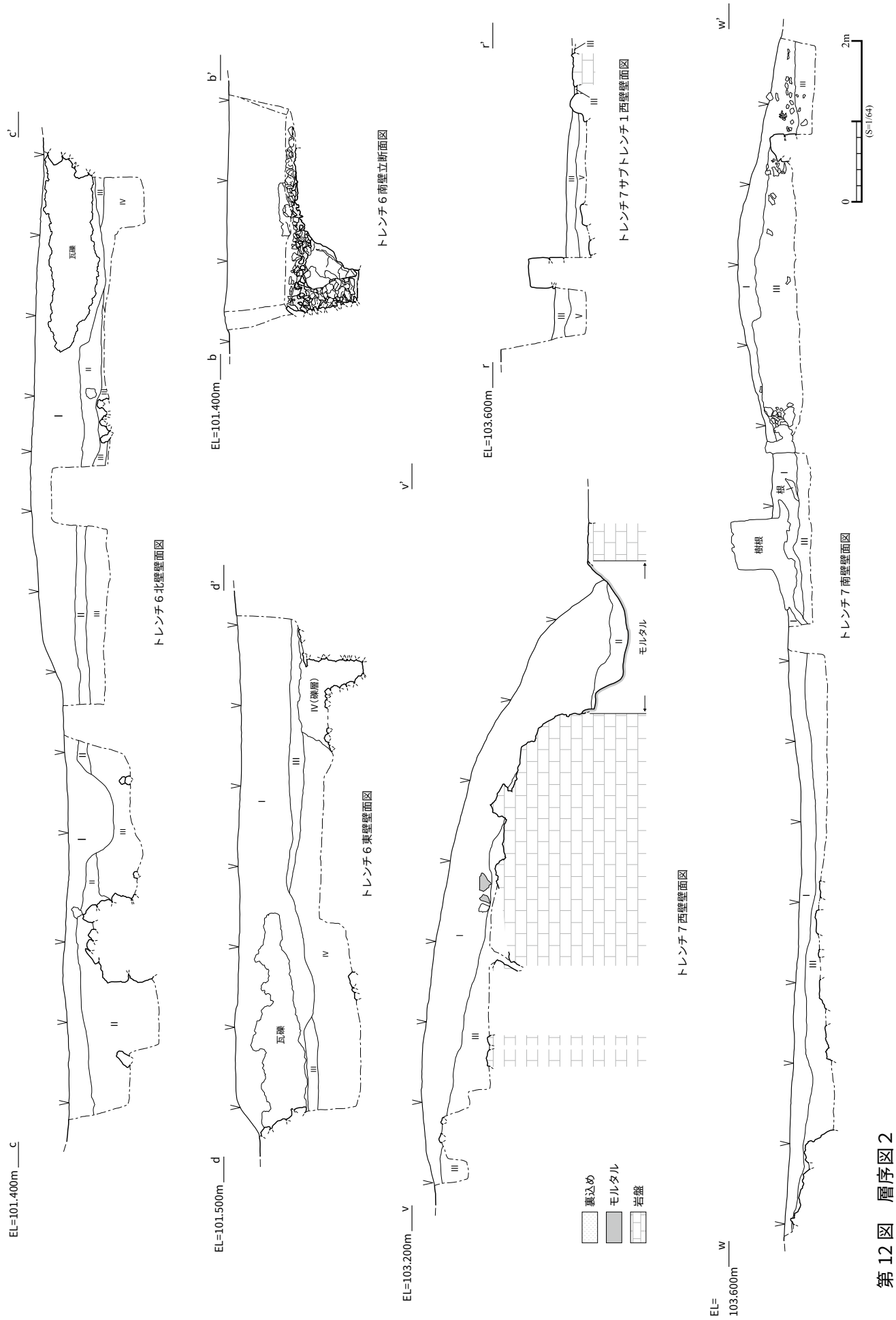
層序		主な色調	年代	層・土質所見
Ⅰ層		暗褐色	現代	県立博物館やその解体後の造成土で、コンクリート片や鉄筋、埋設管用の砂、石灰岩礫･切石などが多く含まれる。
Ⅱ層		黒褐色・鈍い黄褐色	沖縄戦中～終戦後	中城御殿の遺構上に堆積。含まれる遺物から、終戦直後に周辺の瓦礫を被弾痕に投棄して整地したものと思われる。
Ⅱｂ層		鈍い褐色・オリーブ褐色	近代～沖縄戦	中城御殿の遺構直上に堆積。焼土や被熱した木炭を多く含む層であることから、沖縄戦により家屋が焼失した際の堆積層と思われる。上之御殿には木々が植栽されていたことから、それらが焼け落ちたものも含まれると考えられる。
Ⅲ層	Ⅲａ層	暗オリーブ褐色	近代	中城御殿築造に係る造成層か、建物改修の際の層と思われる。土質は密で粘性が高く、こぶし大前後の石灰岩礫が混入する。
	Ⅲｂ層	暗褐色		
	Ⅲｃ層	灰白色		
Ⅳ層	Ⅳａ層	暗オリーブ褐色	近世～近代	中城御殿以前の造成層か、士族屋敷が存在した頃の文化層と思われる。
	Ⅳｂ層	灰白色		
Ⅴ層		白色・黄白色	－	地山、岩盤。敷地北西一帯に分布するとみられる。白色で硬質、黄白色で軟質の石灰岩がみられる。



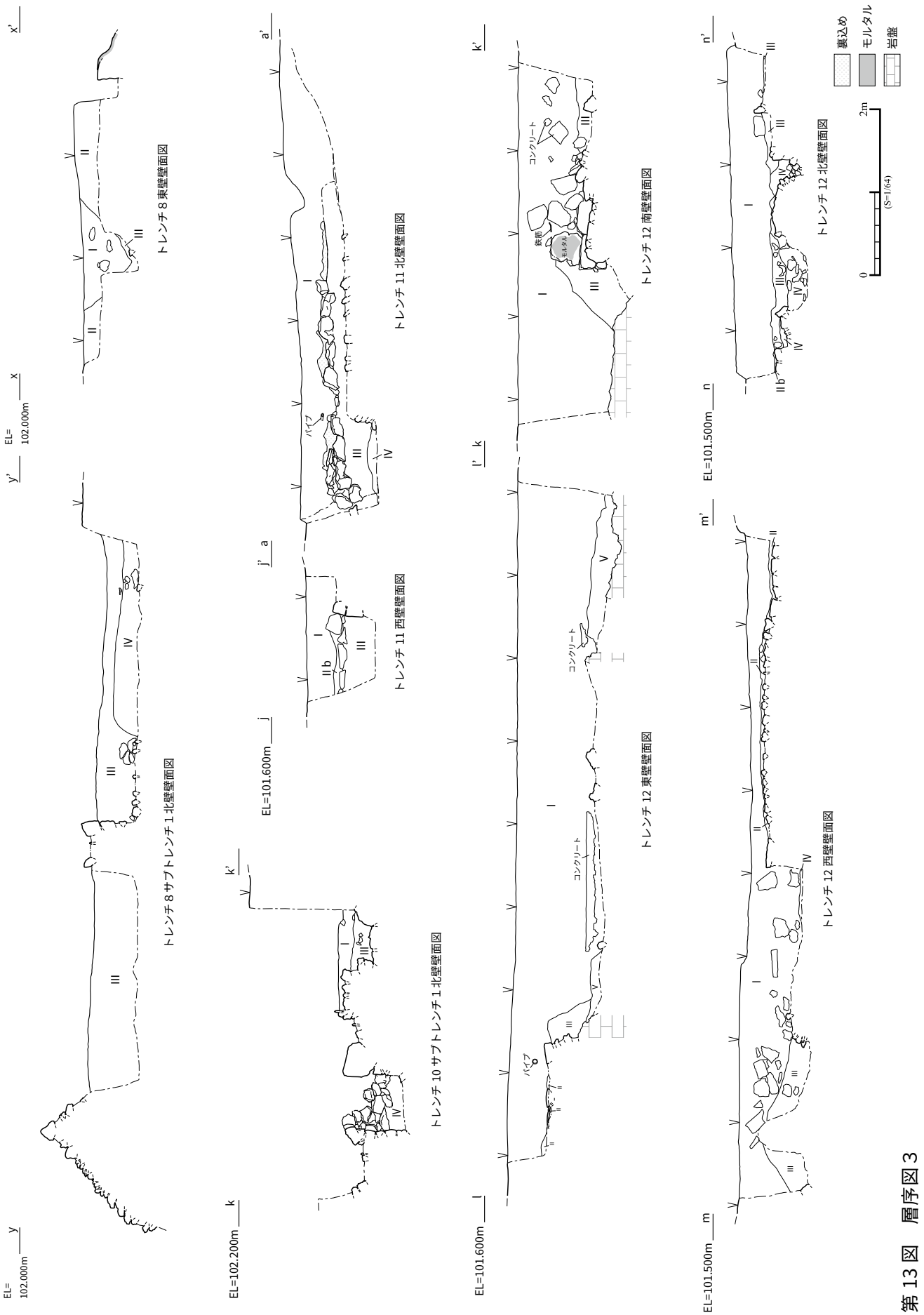
第 10 図　中城御殿層序模式図


トレンチ１北壁立断面図
トレンチ３北壁壁面図
トレンチ３西壁壁面図
トレンチ２サブトレンチ１北壁面図
トレンチ２サブトレンチ１西壁面図
トレンチ４東壁壁面図
トレンチ５北壁壁面図
Ⅲ（礫層）
EL=97.00m
EL=98.40m
EL=99.20m
EL=101.40m
EL=101.00m
0
2m
(S=1/64)

第 11 図　層序図１


トレンチ６北壁面図
トレンチ６南壁立断面図
トレンチ７サブトレンチ１西壁面図
トレンチ６東壁面図
トレンチ７西壁面図
トレンチ７南壁面図
EL=101.400m
EL=101.400m
EL=103.600m
EL=101.500m
EL=103.200m
EL=
103.600m
瓦礫
IV（礫層）
モルタル
樹根
裏込め
モルタル
岩盤
0
2m
(S=1/64)

第 12 図　層序図２


トレンチ８東壁壁面図
トレンチ８サブトレンチ１北壁壁面図
トレンチ 11 北壁壁面図
トレンチ 11 西壁壁面図
トレンチ 10 サブトレンチ１北壁壁面図
トレンチ 12 南壁壁面図
トレンチ 12 東壁壁面図
トレンチ 12 北壁壁面図
トレンチ 12 西壁壁面図
EL=102.000m
EL=102.200m
EL=101.600m
EL=101.500m
コンクリート
鉄筋
パイプ
裏込め
モルタル
岩盤
2m
0
(S=1/64)

第 13 図　層序図３

1. トレンチ１北壁 (南東から)

2. トレンチ２サブトレンチ１西壁 (東から)

3. トレンチ２サブトレンチ１北壁 (南から)

4. トレンチ３西壁 (東から)

5. トレンチ３北壁 (南から)

6. トレンチ４東壁 (西から)

7. トレンチ５北壁 (南西から)1

8. トレンチ５北壁 (南から)2

図版６　層序図版１

1. トレンチ６北壁西側（南から）

2. トレンチ６北壁東側（南から）

3. トレンチ６東壁（西から）

4. トレンチ６南壁（北から）

5. トレンチ７南壁西側（北から）

6. トレンチ７南壁東側（北から）

7. トレンチ７西壁南側（東から）

8. トレンチ７西壁北側（東から）

図版７　層序図版２

1. トレンチ８ サブトレンチ１北壁 (南から)

2. トレンチ 10 サブトレンチ１北壁 (南から)

3. トレンチ６西壁 (東から)

4. トレンチ６北壁 (南から)

5. トレンチ 12 東壁 (南西から)

6. トレンチ 12 南壁 (北から)

7. トレンチ 12 西壁 (南東から)

8. トレンチ 12 北壁 (南から)

図版８　層序図版３

第３節　遺構

平成 27（2015）～ 29（2017）、令和元（2019）年度の調査では、中城御殿の北西側に位置する上之御殿地区および、御殿南の正門付近の石牆を対象とし、合計 12 か所にトレンチを設けて遺構確認を行った。トレンチの設定及び概略は、第３章第１節で示したが、複数のトレンチに渡って同一の遺構が検出されているため、ここでは遺構をまとめた地区毎に報告を行い、その解釈にあたっては往事の情報を照合しながら行った。なお、遺構の情報は文章で詳述し、続いて遺構図、写真を掲載した。各地区の遺構は次のとおりである。

１　南側石牆周辺

トレンチ１は屋根伏図および戦前の航空写真によると中城御殿南側石牆の西端付近で、沖縄県立博物館が平成４（1992）年度に行った第１次調査の南Ａ地区および、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成 24（2012）年度に行った調査のトレンチ７付近にあたる。

石積み１

平成 24（2012）年度の調査でその一部が検出された遺構で、トレンチ１より検出した。石牆の移設工事に伴い解体されるため、根石及び全体像の確認のため、再度検出を実施した。同遺構は平成４（1992）年度の調査で検出された４号石垣と同一のもので、屋根伏図によると、中城大親の南に位置する石垣だと見られる。平成４年調査時には、南北両面に面をもち、根石が野面積み、上部が相方積みで構成され、天端までの高さは根石付近から約 110cm ほどだったと記録されているが、現在は取り壊され、北面の根石のみが残る状況となっている。根石は約 40 ～ 50cm の琉球石灰岩を使用し、粗加工された面を持つ。

石積み２

トレンチ１西端より検出した遺構。屋根伏図や戦前の航空写真では、脇門に繋がる西側石牆の南端付近にあたる。トレンチの西端だったため、その一部しか検出できていないが、位置関係から沖縄県立博物館が平成４（1992）年度調査時に検出した２号石垣の延長部と見られる。２号石垣は東西両面に面を持つ石牆の根石であり、今回検出した石積み２も同様のものと考えられる。

石積みは約 40 ～ 50cm 大の琉球石灰岩を使用しており、東側に面をもち、北側へと延びると考えられる。上部は破壊されており、３段のみ残る。

配石１

石積み１の下層より検出した遺構で、約 30cm 大の自然礫を斜面に均等に並べる。方向性を持って並べられており、土留めとしての機能をもつと考えられる。東西 8.7 m、南北約 1.8 mの範囲に広がる。

勾配は約 47 度、斜辺約 1.4 mの斜面に５段の礫が並べられ、それぞれが南東に延びる列になっている。トレンチ１の南東端で北東にほぼ 90 度曲がり、延長すると想定される。延長先には平成 24（2012）年度調査時のトレンチ７が位置するが、当時の調査時には検出されていないため、より深い位置に残存しているものと考えられる。

配石１と同様のものと考えられる遺構が平成 23（2011）年度調査時のトレンチ７から検出されている。屋根伏図及び戦前航空写真と比較すると中城大親の建物付近にあたる。

２　西側石牆周辺

トレンチ２～５および、トレンチ８・11・12 の一部で検出された遺構を報告する。上之御殿を南北に走る石牆や、石牆下西側では井戸や通路と思われる石敷きなどが検出されている。石牆を境に西側では、表土が約３m堆積している状況が見られ、戦後の造成によるものと考えられる。次に各遺構の報告を行う。

石牆１

上之御殿の南北に走る石積みをトレンチ２・４・５で確認した。石牆の状況は屋根伏図及び航空写真では直接確認できないが、航空写真と位置を照らし合わせてみると、木々の生い茂っている部分と、その西側の広場と思われる部分との境目にあたる状況が見られる。

石牆は西に面しており、南の庭園側岩盤から北北東へと、若干蛇行しながら約 32 m続く。20 ～ 30cm 大の粗加工の石灰岩を積むが、南側の根石付近のみ 60 ～ 70cm 大の大きな石灰岩が積まれている。傾斜角はどの面でも約 78 ～ 80 度を示す。

トレンチ５にて、石同士の積み方が噛み合っておらず、東側からの土圧により孕んでいる箇所があった。崩落する危険があったため、写真撮影と図面記録を行った後、取外しを実施した。作業中、石積み内部の裏込めから金属製のスプーンやボールチェーン等、明らかに現代の遺物が出土したため、戦後に積み直されたと見られる。

天端は残っていない部分が多いが、トレンチ４の北側および南側では良好な状態で残存している様子が見られる。天端はいずれも標高約 100 mに位置し、ほぼ水平を保ちながら北から南へ続き、破壊によって一度途切れる。トレンチ２では再び残存部を確認できるが、天端は消失している。

石積みが南北に走る中で、自然の岩盤を利用している様子も見られる。トレンチ４北側では石積みが岩盤に接続するが、この岩盤は石積みの天端より標高が１mほど高くなっており、岩盤が上方から見たときに壁のように平らになるよう垂直に削平されている。垂直面は石積み天端より東に 30cm ほど奥まった所に位置し、天端との隙間には、上面を水平に加工した、厚みのない石が配置される。また、岩盤は北側のトレンチ６まで続き、垂直面を維持しながら上之御殿の北端まで続く様子が確認できる。

石牆２

石牆１南端地点の岩盤接続部で、石牆１から南に約１m 離れた地点から石牆２を検出した。石牆１同様、屋根伏図や航空写真ではその様子を窺い知ることはできないが、現在も境界線外南側の地表面から、高さ約３m の壁を確認できる。

石牆２は粗加工の 20 ～ 30cm 大の琉球石灰岩で積まれており、北側と南側の２面を持つ。天端は破壊されており、南と北の面との幅は約 50cm となっている。上之御殿側にあたる北側の面を掘削したところ、現地表面から約 80cm 深い、標高約 99.6 mで根石を確認した。

石列１

石牆１南側の根石に並行する石列。約 10 ～ 20cm 大の自然礫が１列に並ぶ。列は根石と約 25cm の幅を保ちながら、南北約 4.5 mの範囲に配置される。南側はトレンチの壁際まで延び、先の延長については不明だが、北側は岩盤に接続した所で途切れる。溝としての機能を持つかは不明。

石列２

石牆１に平行する石列で、トレンチ８より検出した。庭園池から北北東へ、石牆１に平行して延びる。石牆１との間隔は約 4.2 mある。約 20cm 大の琉球石灰岩の切り石を使用している。比較的丁寧な表面の加工により、東側に面が形成される。石列としているが、下層にはもう一段石が積まれており、また、上部の列は石が噛み合うように斜めに面を取られていることから、本来は天端を持つ石積みだった可能性が考えられる。

残存部は約 7.2 mで、所々列が途切れる箇所や、鉄筋コンクリートの柱によって破壊されている部分が見られ、戦後の造成や建築物によるものと考えられる。トレンチ８北端にて完全に途切れるが、10 mほど北のトレンチ 12 より同一の遺構と考えられる石列５を検出している。

石列３

トレンチ４およびトレンチ 11 で確認された石列で、石畳１の北側に隣接する。約 20 ～ 30cm 大の琉球石灰岩の切り石を使用している。破壊により大きく崩れ、根石と見られる１段しか残っていないが、石列の高さが不揃いなことから、本来はもう何段か積まれる石積みだったと考えられる。

石畳端部からさらに南東の拝所方向へと延びるため、上之御殿内を仕切っていたと見られる。

石列４

石列３の南反対側に位置する、石畳を挟む石列。トレンチ４およびトレンチ 12 にて検出された。石列２同様約 20 ～ 30cm 大の琉球石灰岩を使用し、北東に面をもつ。南東端には礎石と見られる一回り大きな約 30cm 四方の石を角として、石列５と直交して接続する。

石列５

石列４の接続部を起点として、南西方向に延びる石列。現代の造成によって破壊され、一部が残存する。残存部長は約 2.7 m。約 20 ～ 30cm 大の琉球石灰岩を使用し、東側に面を持つ。他の石列等より比較的丁寧に面が形成されることや、位置関係から、石列２の延長部である可能性が考えられる。

石列６

石畳１から約 2.8 m東側で検出した、石畳１および石列５に並行する石列。約 15 ～ 20cm の細長い琉球石灰岩を並べる。西向きに面をもち、南北約１mの範囲に並べられる。裏込めなどは見られない。北端では向きを西側に直角に曲げるが、そこからどのように延びるかは、残存していないため不明。南端は石列７によって切られている。

石列７

石列６の南約 30cm に位置する。石列６に対して約 80°で交差する、東西に走る石列。約 20cm 大の台形に近い琉球石灰岩を東西約１mの範囲に並べる。面は南向けに作られ、後背は 10cm 大の自然礫で固められる。一段しか確認できなかったため石列としているが、石積みであった可能性も考えられる。

石畳１

トレンチ４北側の石牆１の天端より約 70cm 標高の高い地点で、石牆１に隣接する石畳を検出した。石畳は約 20 ～ 30cm の琉球石灰岩の切り石を南東から北西方向に並ぶ石列の間幅約 2.3 mの間に敷き、石牆１に対して直交する。北西側の大部分は破壊され、延長した先については不明である。

この石畳の端と考えられる部分がトレンチ 11・12 の北西端からも検出されている。トレンチ 11・12 で検出された石畳は、北東から南西方向に直線状に端が揃えられ、地表面の破壊痕が見られないことから、この地点から北西方向へと石畳が伸びていくと想定される。

石積み３

トレンチ５から検出された石積みで、石畳１の西側延長線上に並行する。標高約 98 mの地点で根石が確認され、岩盤を介して石牆に直交して延びる。約 2.7 m延びた地点から緩やかなカーブを描いて曲がり、向きを 90 度変える。そこから北北東へ延びる様子が、トレンチの北壁で確認された。石積みは約 40 ～ 50cm 大の琉球石灰岩で積まれ、南西側に面を持つ。石は最大で３段積まれている状況が確認できたが、上部は戦後の造成時に破壊されたと見られ、天端までの高さは不明である。

石積み４

石積み３の後方北側約 60cm の一回り小さい石積みで、面の部分が石畳の延長線上に位置する。面石は約 30 ～ 40cm 大で、根石を含めて最大２段積まれている。裏込めの小礫などは見られず、粒子の細かい褐色土のみで埋められている。岩盤から延びたのち、約２mの地点で直角に向きを変え、北北東へと延びる。

井戸１

トレンチ２にて琉球石灰岩の石組で作られた円形の井戸を検出した。石牆１から約 1.2 m西に位置する。検出部の標高は石牆１の根石より約 10cm 低く、床面の敷石等も見られないため、上部が破壊されたものと考えられる。井戸内部の径は約 50cm で、深さは約３mを測る。

内部は約 20cm の面を持つ琉球石灰岩を円形に積み上げて作られている。

３　北側石牆周辺

トレンチ６の範囲で、明確な遺構は残されていなかったが、西端には石牆１に接続する岩盤の一部が見られる。岩盤はトレンチ６でも石牆１接続部と同様に垂直に削平されており、北端では東方向へと曲がる様子を確認できたため、当時の北側石牆のあった地点に近いと考えられる。

また、トレンチの南東端では、拝所周囲の造成時のものと考えられる、礫の詰め込まれた層を確認した。

４　庭園周辺

トレンチ７・８・９にて調査を行った地区で、上之御殿南側の庭園部分に位置する。地表面に露出していた溜池の延長で、地下に埋もれていた部分や、庭園内の高い標高に位置する石積みなどの、庭園の中城御殿当時の情景を構成する遺構を検出した。

溜池１

東西幅約 10.6 m、南北幅約 1.5 mの細長い池。溜池１は地表面に露出していた。調査によって検出された遺構ではないが、後述の溜池２との関連があるため、溜池１として報告する。琉球石灰岩の岩盤を削り、床面をモルタルで塗り固めることで、溜池として機能していたと見られる。池北側の淵から底までの深さは約 20cm で浅い。西端には排水用の溝が彫られており、溜池２に接続する。

溜池２

溜池１の西端と接続する池で、トレンチ７・８にて検出した。溜池１より縁石の標高が若干低く、内部は埋土で埋まっていた。埋土は上層が戦後の造成によるもので、戦後に残った瓦礫を埋めたと考えられる。床面付近には、中城御殿当時の砂泥とみられる黒色土が堆積していたため、サンプルとして回収した。

池の構造は、南側は琉球石灰岩の岩盤を掘り込み、北側では石灰岩礫を敷くことで底部が構成されている。周囲には大きな礫を縁石として配置し、底面から縁石までの内部をモルタルで塗り固めている。

石積み５

幅約 3.8 mの石積みで、トレンチ７の南西端より検出した。面は北北西に向いており、約 30 ～ 40cm 大の琉球石灰岩の切石を緻密に組み上げている。東西端がそれぞれ角になっており、そこから直角に曲がり、南南東へと延びる様子が見られた。延長先の地表面には、石積みの延長部と見られる石の頭が露出しているため、全体像は方形状になると考えられる。

庭園基盤

池より南側の一帯は、水平に削岩された琉球石灰岩の岩盤が広がる。大広間南東の庭園を写した古写真には、なだらかな小山を作り、その上に芝や松、ソテツなどを植栽している様子が写しだされており、上之御殿南側の庭園跡も近似した様相を呈していたと考えられる。

５　拝所周辺

トレンチ 10 として調査を行った地区で、屋根伏図や戦前の航空写真によると、大岩の拝所が位置していた地点である。拝所に関しては古写真が何点か見つかっており、岩の周囲に石積みと階段が作られていた当時の拝所の様子が伺える。

また、石積みや階段などは取り壊されてしまっているものの、大岩は現在も地表面に露出しており、岩を削って作られた階段の痕跡等を見ることが出来る。

石積み６

大岩を取り囲むように積み上げられる石積み。古写真では岩の上部まで石積みに取り囲まれていた様子が見えるが、戦後の破壊により、現在は根石および上段の２段のみが残る。約 50 ～ 60cm 大の大きな琉球石灰岩を楕円形に積み上げ、岩の周囲に向かって面をもつ。後背は約 10 ～ 20cm 大の自然礫が裏込めとして積み込まれており、階段を支える土台としての役割を持っていたと考えられる。東側では根石が取り外され、ほら穴状に掘り込まれていた。穴は調査開始時にはⅠ層およびⅡ層の土砂や瓦礫で埋まっていたが、掘削を続けると、根石の下層約 80cm の深さまで達した。何らかの理由で穴が掘られ、戦後に埋まったと想定できる。

石積み７

石積み６から分岐し、岩の根本に沿うように並ぶ石積みが確認された。現在、岩は下部がノッチのように抉れており、古写真等と比較すると、石積み７は階段横の岩盤の隙間を埋めるためものであった可能性が考えられる。

６　上之御殿建物周辺

トレンチ 12 にて調査を行った地区で、屋根伏図及び戦前の航空写真によると、上之御殿建物の北端に位置する。戦時中の破壊や、戦後の造成による影響で、遺構の残存状況はあまり良くない。

方形石組１

トレンチ 12 にて検出した石組遺構。屋根伏図によると上之御殿の建物の北隣にあたる。四方を約 20 ～ 30cm 大の琉球石灰岩の石積みで囲み、内部は南北約 70cm、東西約 60cm の範囲に、石畳状に加工された切石を配置して埋めている。

方形石組１の東隣には、モルタルで塗り固められた床が接続する。モルタルの床面は石組の床面より約 20cm 高くに位置しており、石組との接続部に穴が開けられている。

７　その他遺構

その他遺構として、中城御殿以前や、戦後以降に作られたと考えられる遺構を挙げる。

円形石組１

トレンチ 12 中央部より検出された遺構で、幅約 1.2 mの楕円形に琉球石灰岩を積んで構成される。石積は内面に面が作られ、石積みによって囲まれた内部は、石を敷き、その上に漆喰のような赤土を塗布している。

円形石組２

トレンチ 12 北側より検出した。幅約 80cm で、円形石組１同様、楕円形に石を積む。底には円形石組１同様赤土が塗布されており、石組み内部には、廃棄したと見られる陶磁器や夜光貝などが含まれていた。

石敷き１

トレンチ５より検出した石敷き遺構。約 10 ～ 30cm の不定形な石を、平らな面を上面にしてまばらに配置する。Ⅱ層上に構築されている状況だったため、戦後に作られたと考えられる。

石列８

石敷き１に隣接する石列。約 20 ～ 40cm の不揃いな大きさの琉球石灰岩を、東側に面を向けて配置する。石列９と並行しており、溝のような配置になっているが、底石や溝内の堆積土などは確認されなかった。Ⅱ層上に構築されており、石のサイズや形状から、戦時中に破壊され、周囲に散らばっていた石積み３・４の石材を流用して作られたと見られる。

石列９

石列８同様石積み３・４の石材を流用して作られたと考えられる石列。Ⅱ層上に構築されるため、戦後のものと考えられる。石列の背後には裏込めや掘方などの、構築時の痕跡は見られなかった。

方形石組２

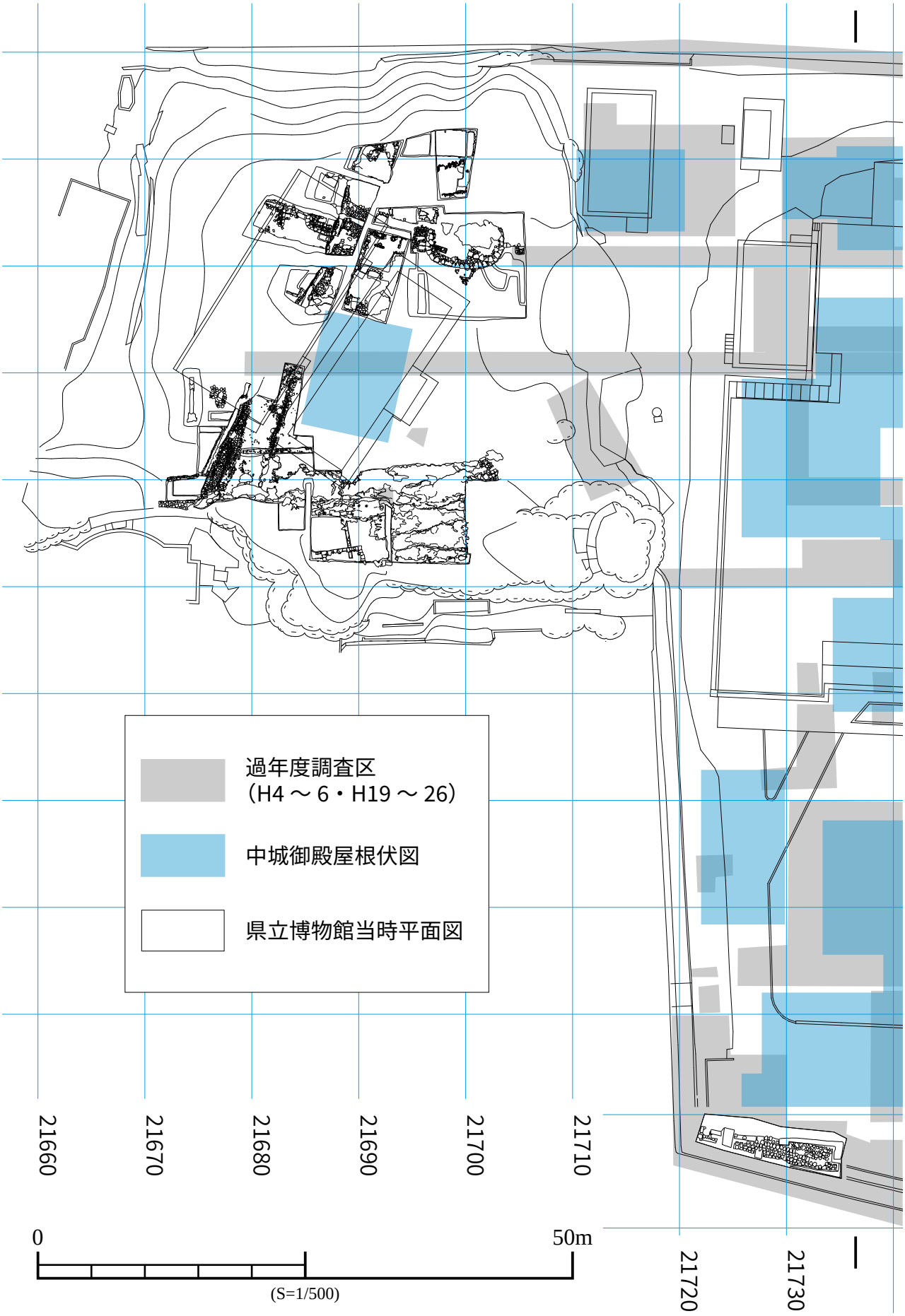
石積み７西側の下層に位置する石組。約 80cm 四方に琉球石灰岩の切石を積んで囲む。約 20cm 大の石灰岩を使用し、粗加工の面を内部に向けてもつ。南側は方形石組３によって切られ、内壁はほとんど残っていない。東側は石積み６によって切られており、残存部の深さも約 30cm ほどのため、中城御殿以前の時期のシーリが階段を作る際に壊されたものと考えられる。

方形石組３

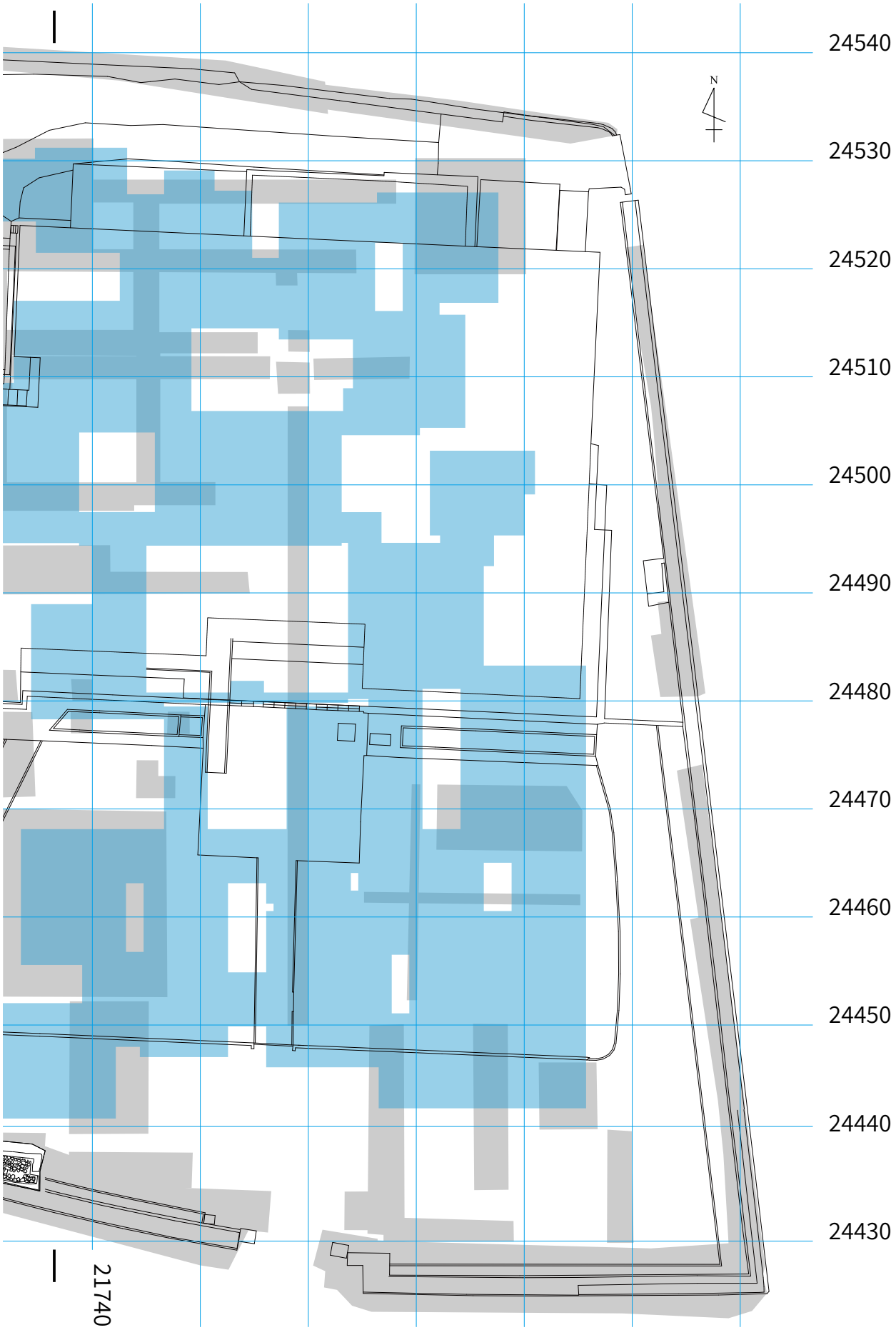
方形石組２の南に隣接する石組。約 60cm 四方を石灰岩で囲む遺構で、方形石組２と共に石積み６によって切られる。こちらも方形石組２と同様の遺構と考えられる。

方形石組４

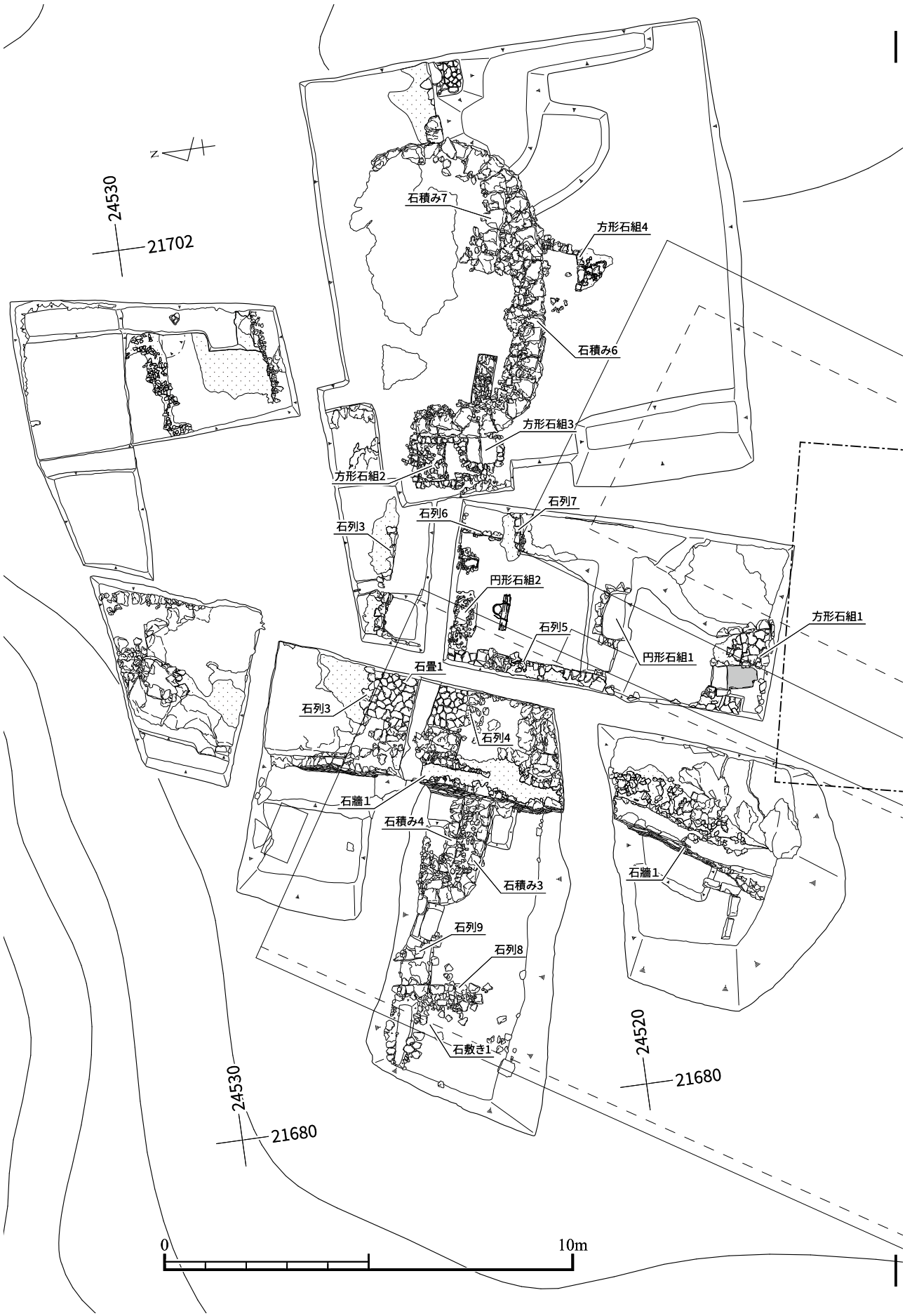
石積み６南側の下層に位置する石組。方形石組２・３同様、石積み６によって切られており、中城御殿以前の遺構と考えられるが、底と見られる１段が残るのみで、詳細な状況については不明。



第 14 図　中城御殿全体図１



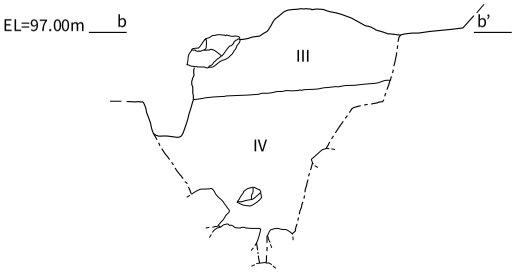
第 14 図　中城御殿全体図２



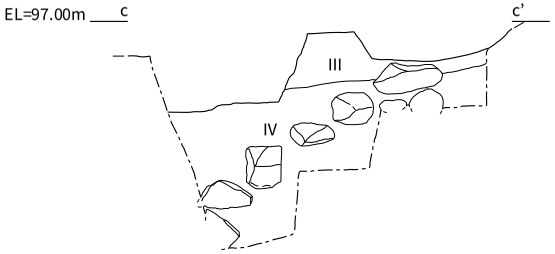
第 15 図　調査区全体図１

第 15 図　調査区全体図２

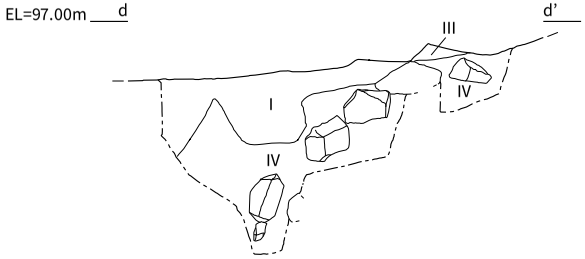
第 16 図　南側石墻周辺平面図



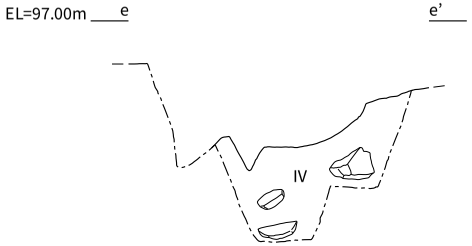
トレンチ１立断面図（b-b’）



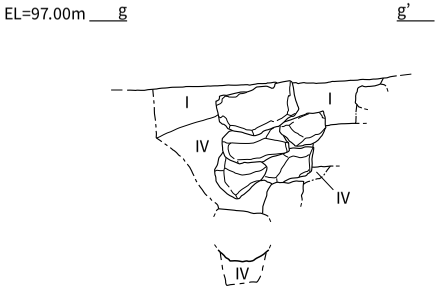
トレンチ１立断面図（c-c’）



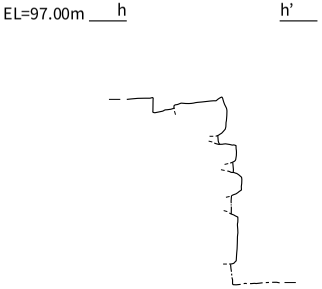
トレンチ１立断面図（d-d’）



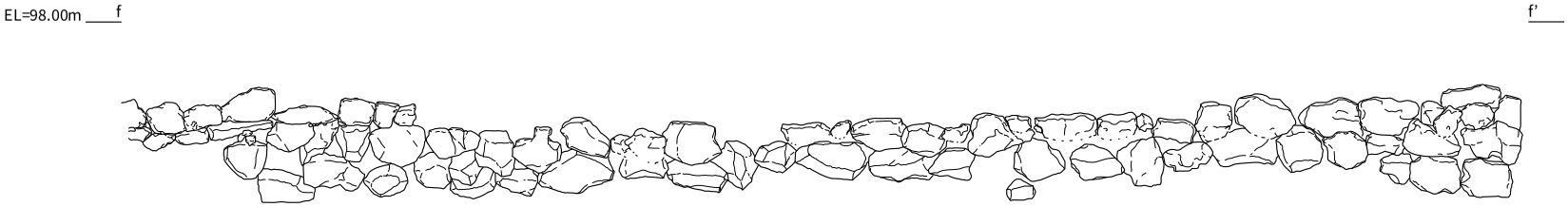
トレンチ１立断面図（e-e’）



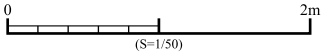
石積み２立断面図



石積み２断面図



石積み１立面図



※a-a’の壁面図は、「第２節　層序」に掲載した

第 17 図　南側石牆周辺立面・立断面・断面図

１.石積み１（北西から）

２.石積み１（南東から）

３.石積み１（北から①）

４.石積み１（北から②）

５.配石１（南東から）

６.配石１（東から）

７.配石１（南から）

８.配石１断割り後（南東から）

図版９　南側石牆周辺遺構

第 18 図　西側石壇周辺平面図１

第 19 図　西側石牆周辺平面図２

第 20 図　西側石壇周辺立面図

第 21 図　西側石壇周辺立断面・断面図

１.石牆１（トレンチ２、西から）

２.石牆１（トレンチ４北端、西から）

３.石牆１（トレンチ４南端、西から）

４.石牆１（トレンチ５、西から）

図版 10　西側石牆周辺遺構１

１.石牆１周辺遺構１（トレンチ８上空東から、写真上：石牆１、左下：溜池２、右下：石列２）

２.石牆１周辺遺構２（トレンチ５上空東から、写真上：石牆１）

３.石牆２（トレンチ２、東から）

４.石列１（トレンチ２、北西から）

図版 11　西側石牆周辺遺構２

１. 石牆１周辺遺構３（トレンチ５上空南から）

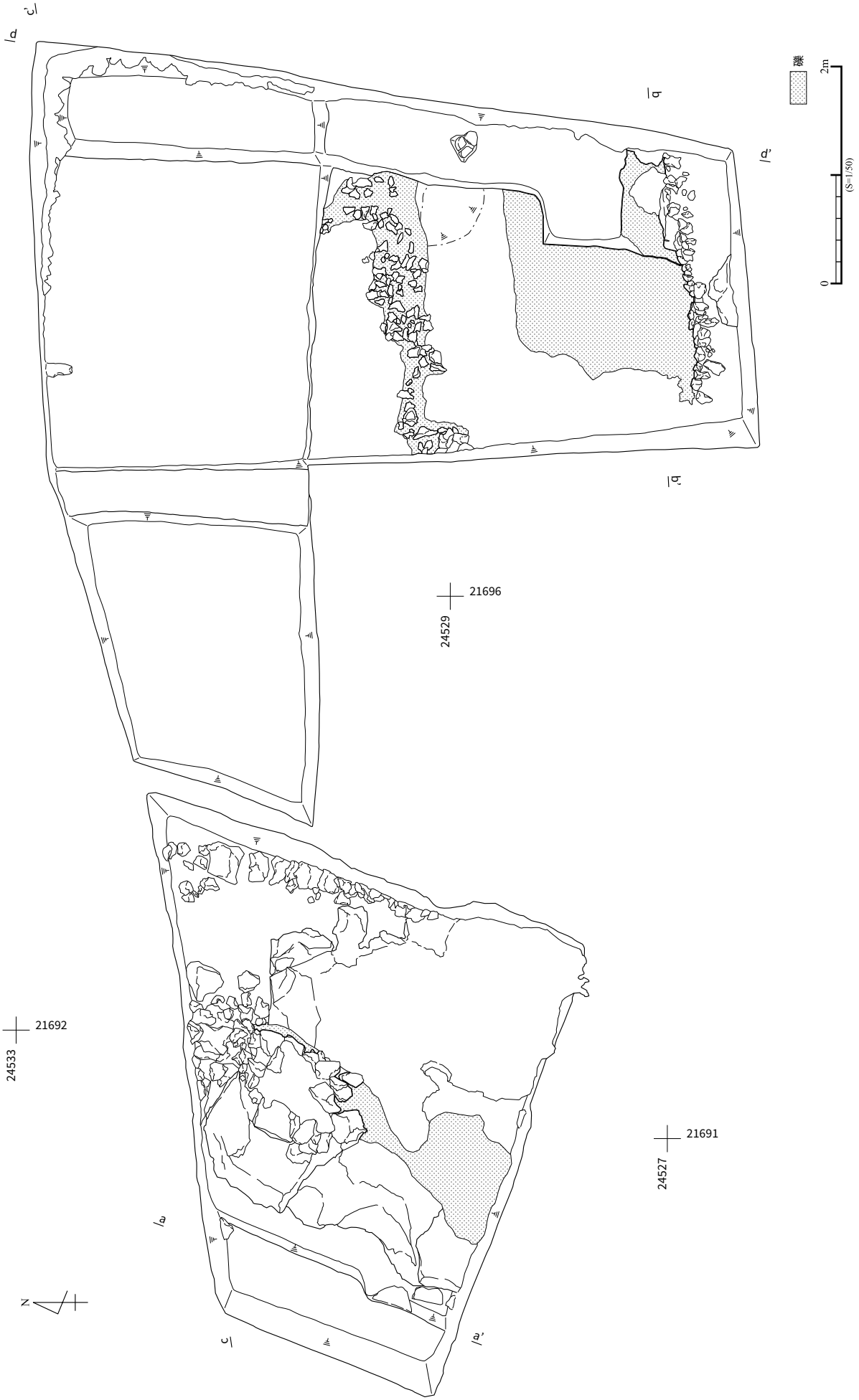
２. 石積み３・４（トレンチ５、南西から）

３. 石畳１（トレンチ５、南から）

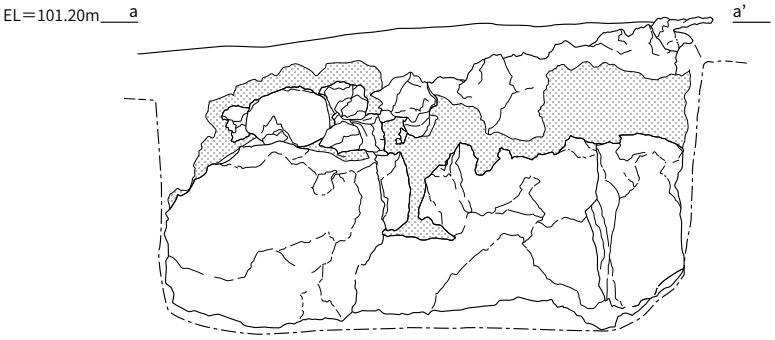
４. 石列３（トレンチ 11、写真左は石畳１端部、南から）

５. 井戸１（トレンチ２、東から）

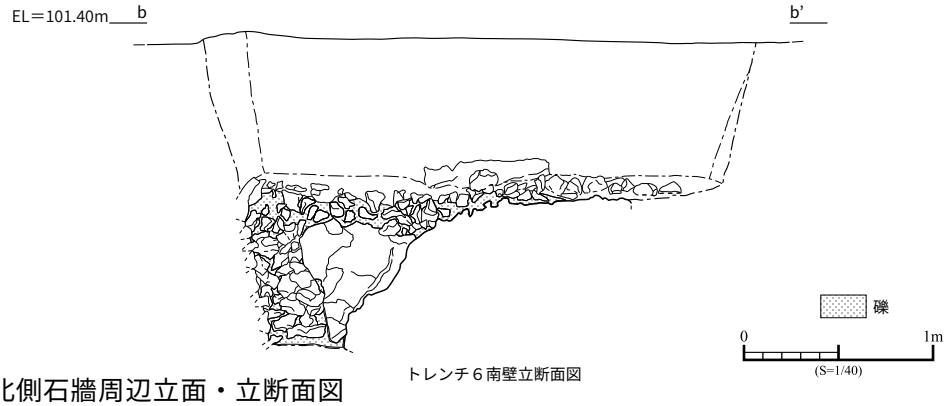
図版 12　西側石牆周辺遺構３



第 22 図　北側石墻周辺平面図



岩盤石牆１北側接続部立面図



トレンチ６南壁立断面図

第 23 図　北側石牆周辺立面・立断面図

１. トレンチ６岩盤石牆１北側接続部 (西から)

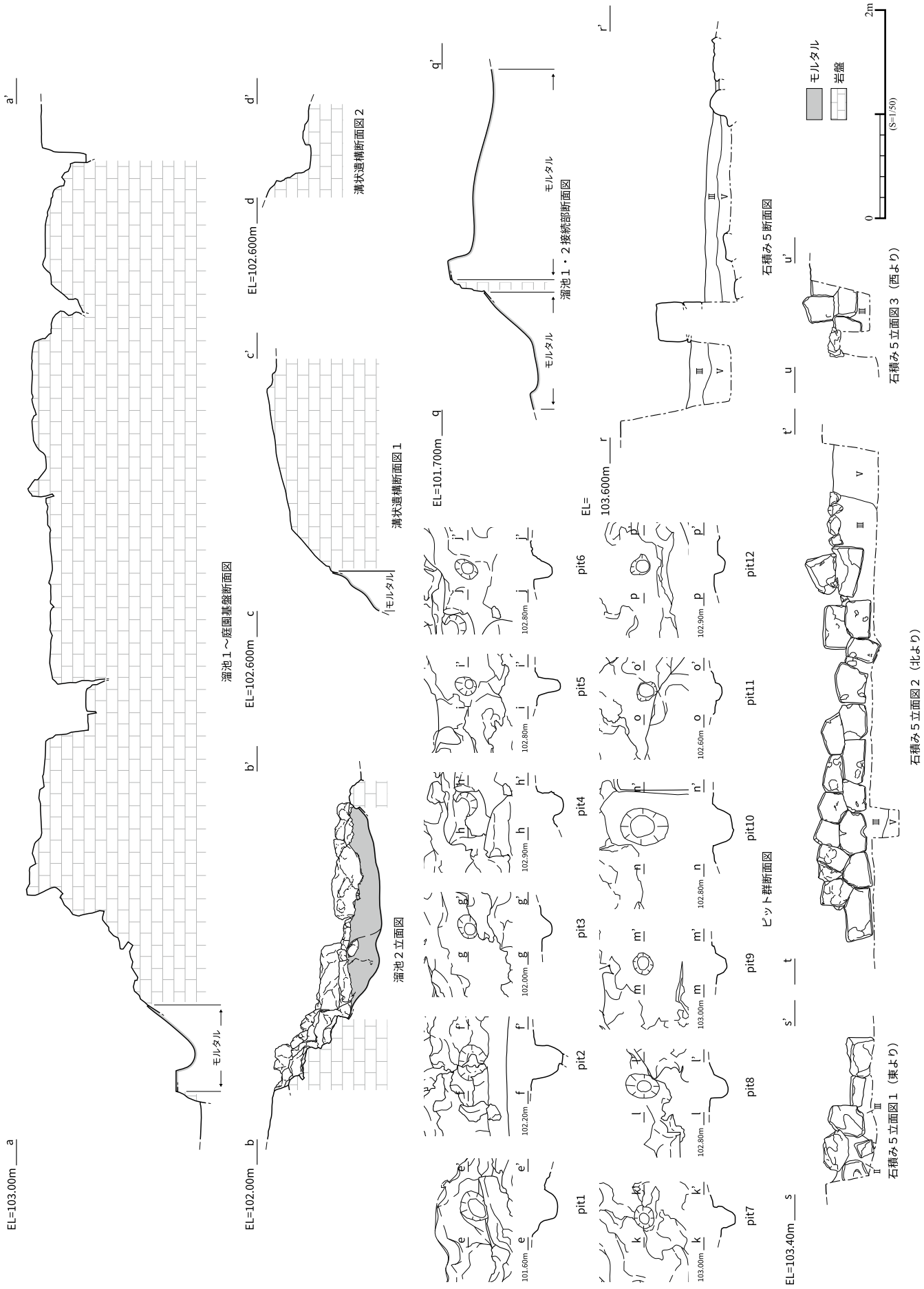
２. トレンチ６岩盤石牆１北側接続部 (南から)

３. トレンチ６南壁壁面 (北から)

４. トレンチ６南壁壁面 (西から)

図版 13　北側石牆周辺遺構

第 24 図　庭園周辺平面図



第 25 図　庭園周辺立面・断面図

１.庭園（トレンチ７上空北から）

２.庭園（トレンチ７、北東から）

３.溜池２（トレンチ８、北から）

４.溜池２モルタル湾曲部（トレンチ８、南から）

５.溜池２モルタル破損部断面（トレンチ８、北から）

図版 14　庭園周辺遺構１

１. 庭園基盤（トレンチ７、北から）

２. 石積み５（トレンチ７、西から）

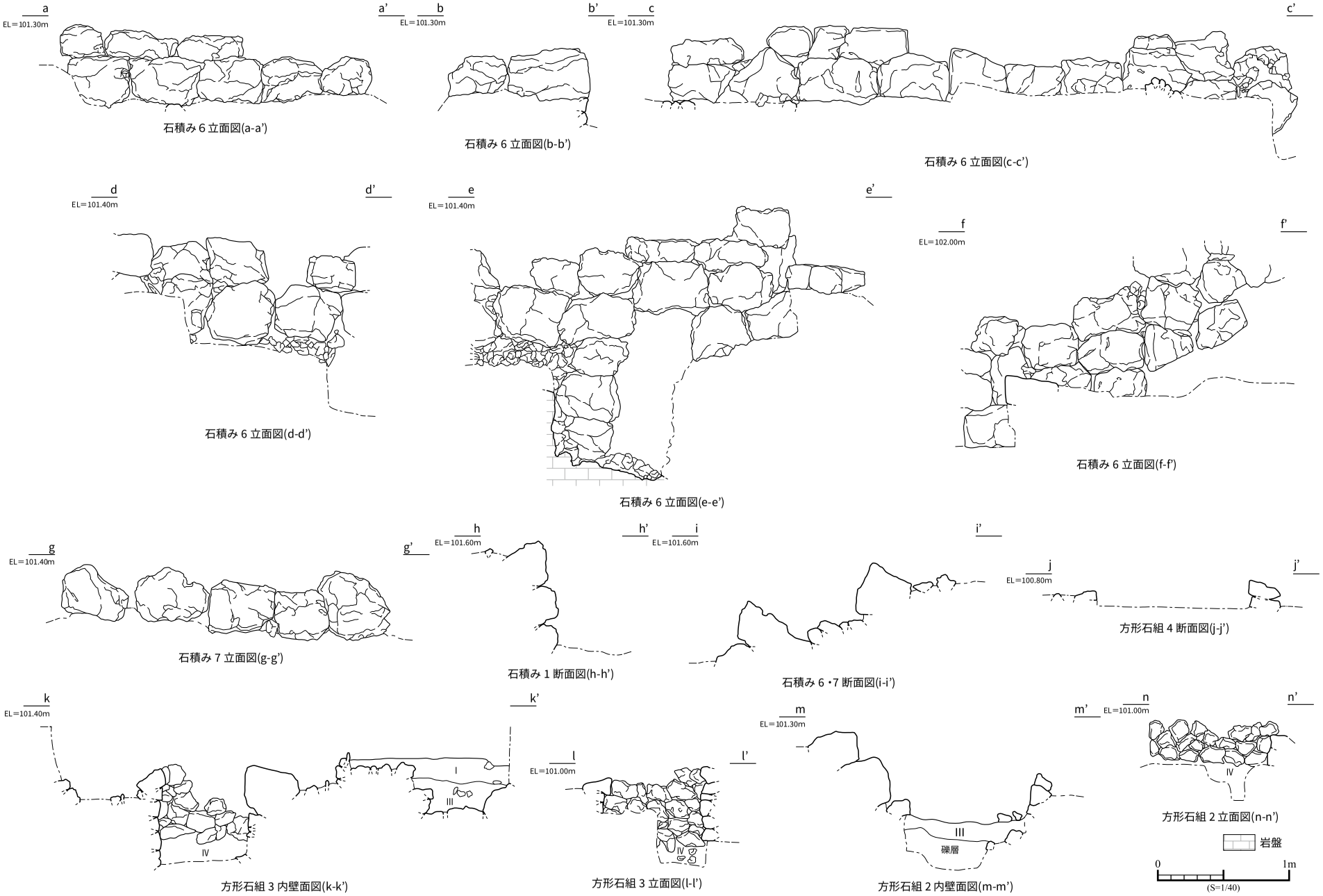
３. 石積み５（トレンチ７、東から）

４. ピット群（トレンチ７、pit ７~10、東から）

５. 溜池１・２接続部（トレンチ７、北から）

図版 15　庭園周辺遺構２

第 26 図　拝所周辺平面図



第 27 図　拝所周辺立面・断面・壁面図

１.拝所周辺遺構（南東から）

２.拝所周辺遺構（上空南から）

図版 16　拝所周辺遺構１

１. 拝所周辺遺構（北東から）

２. 石積み６西側（南西から）

３. 石積み６西側（西から）

４. 石積み１東側開口部（東から）

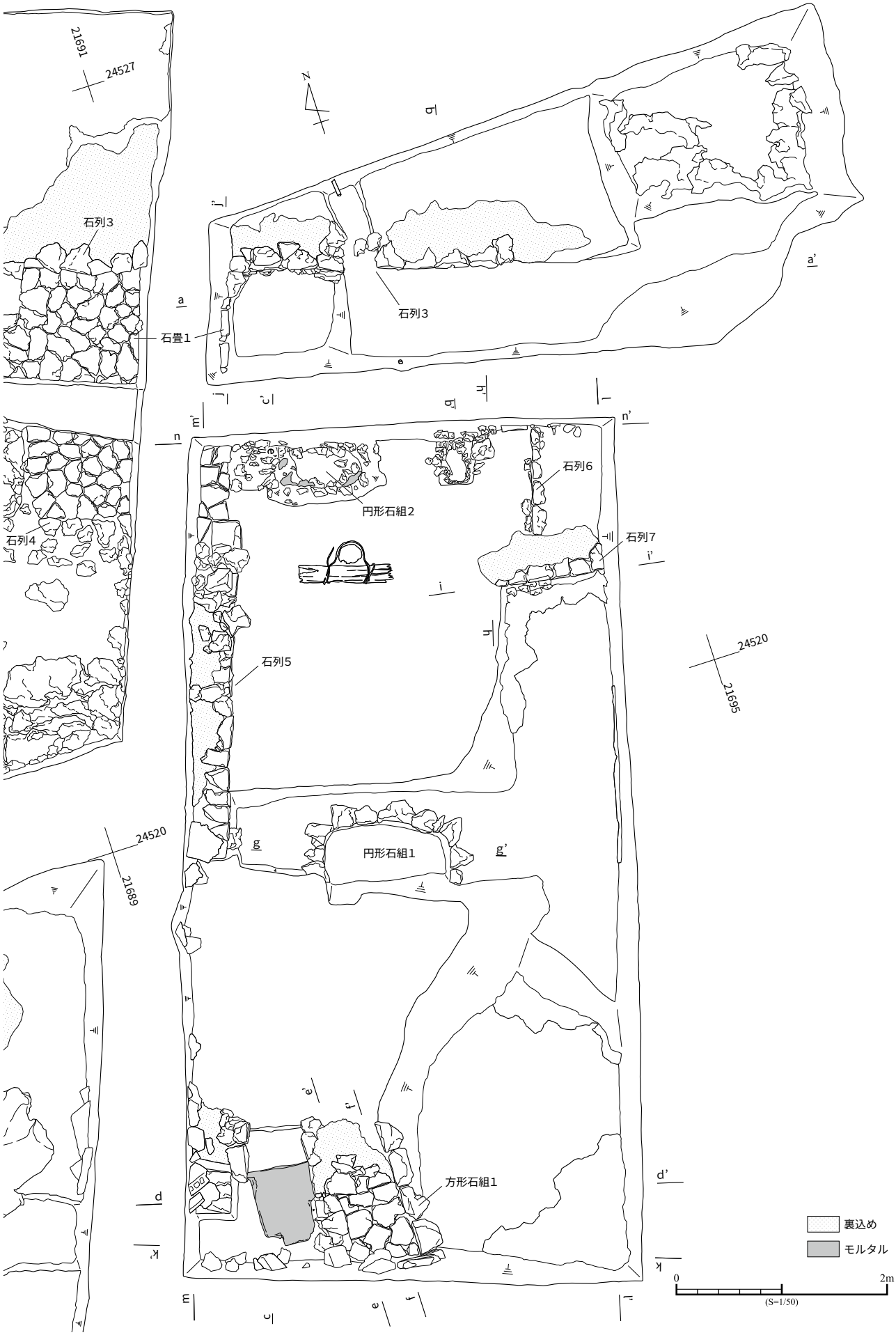
５. 石積み１造成状況（北から）

６. 方形石組２（北から）

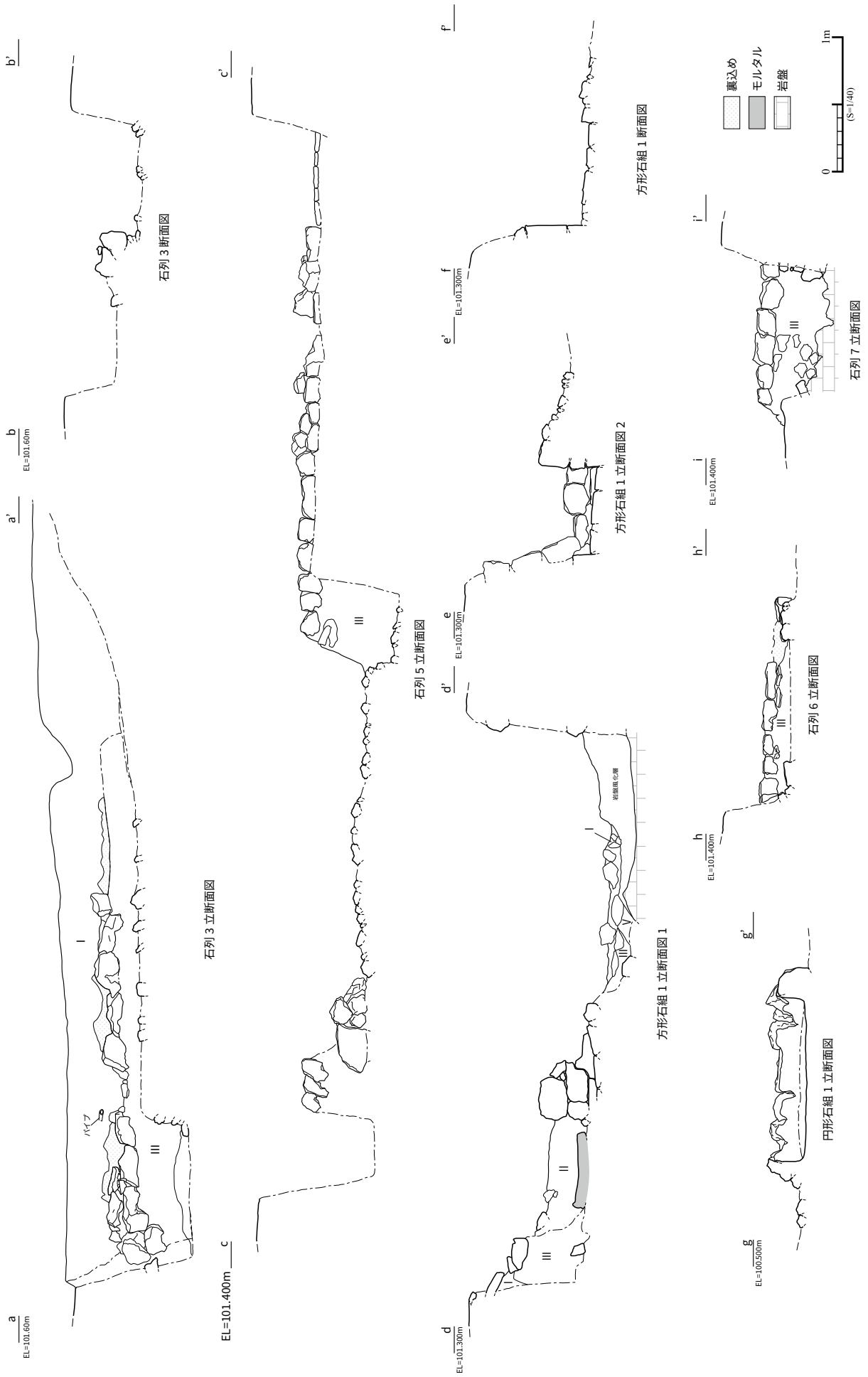
７. 方形石組３（南から）

８. 方形石組４（北から）

図版 17　拝所周辺遺構２



第 28 図　上之御殿建物周辺平面図



第 29 図　上之御殿建物周辺立断面・断面図

１. 上之御殿周辺遺構（トレンチ 12、上空西から）

２. 方形石組１（北から）

３. 方形石組１（南から）

４. 方形石組１（東から）

５. 方形石組１モルタル施工部（北から）

図版 18　上之御殿周辺遺構１

１. 上之御殿周辺遺構（トレンチ 12、上空北東から）

２. 石列６（トレンチ 12、西から）

３. 石列７（トレンチ 12、南から）

４. 円形石組１（トレンチ 12、北から）

５. 円形石組２（トレンチ 12、南から）

図版 19　上之御殿周辺遺構２

第４節　遺物

平成 27（2015）～ 29（2017）年度、令和元（2019）年度調査の人工遺物は総計で 46,344 点である。遺物の種類としては、中国・タイなどの外国産各陶磁器、本土産の各陶磁器、沖縄産陶器、瓦、塼、石・金属などの製品が出土している。

当節では、遺物の種別ごとに報告を行い、遺構出土や状態が良好な遺物を図化対象とした。図化対象外の人工遺物でも、当遺跡の特質を表し、変遷を知るうえで必要と思われる遺物は写真のみを掲載している。図化対象・写真のみの人工遺物の写真は 97 頁～117 頁に掲載している。

１　中国産青磁

中国産青磁は特徴的な６点の図化を行った（第 30 図１～６）。器種は碗、小碗、皿、盤、高足杯、瓶などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

２　中国産白磁

中国産白磁は特徴的な 10 点の図化を行った（第 30 図７～ 16）。器種は、碗、小碗、皿、杯、小杯、壺、瓶、袋物、蓋などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

３　中国産青花

中国産青花は特徴的な 46 点の図化を行った（第 30 図 17 ～第 32 図 62）。器種は碗、小碗、皿、鉢、壺、杯、小杯、蓋、蓮華など豊富にみられた。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

４　中国・タイ産褐釉陶器

中国産褐釉陶器は特徴的な５点の図化を行った（第 33 図 63 ～ 67）。器種は、壺、鉢、擂鉢、蓋、急須などがみられた。

タイ産褐釉陶器は状態の良好な壺４点の図化を行った（第 33 図 68 ～ 71）。器種は、壺や瓶と考えられる遺物などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

５　その他の輸入陶磁器

本項では、前項に収まらない外国産の輸入陶磁器を一括して報告する。種類は、中国産の色絵、黒釉陶器、瑠璃釉、褐釉磁器、褐釉染付、施釉陶器、彩釉陶器、三彩、紫砂、青磁染付、青磁色絵、銅緑釉などの他に、西洋陶器や東南アジア産の陶磁器が出土している。

そのうち特徴的な 17 点の図化を行った（第 33 図 72 ～第 34 図 88）。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

６　本土産陶磁器

本項では、近世と考えられる本土産の陶器や磁器、近現代磁器を一括して本土産陶磁器として報告する。種類は、青磁、白磁、染付、色絵、近代磁器などが得られている。

特徴的な 35 点の図化を行い（第 34 図 89 ～第 36 図 123）、１点は写真のみの報告を行う（図版 25　124）。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

７　沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は、方言で「上焼（ジョウヤチ）」と呼ばれるもので、器の表面に釉及び絵付けを施す陶器の一群である。本報告では特徴的な 45 点の図化を行った（第 37 図 125 ～第 39 図 169）。器種は碗、小碗、皿、鉢、瓶、急須、按瓶、蓋、鍋、壺、火炉、火入、香炉、餌入れ、尿瓶など多種多様な製品が出土している。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

８　初期沖縄産無釉陶器

初期沖縄産無釉陶器は、荒焼（アラヤチ）とも称される無釉焼締陶器のうち、特に高火度で焼成され、器面に泥釉などが施釉される一群を指す（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010）。また、胎土に白土が筋状に混ざる例が多数あり、白色粒や赤褐色粒を含む（新垣 2013）。

本報告では特徴的な８点の図化を行った（第

40 図 173、174、176、177、179、第 42 図 186 ～ 188)。器種は、擂鉢、植木鉢、蓋、香炉などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

９　沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器は､方言で「荒焼（アラヤチ）」と称する焼き締め陶器の一群であり、特徴的な 13 点の図化を行った（第 40 図 170 ～ 172､175、178、第 41 図 180 ～ 185、第 42 図 189、190)。器種は碗、灯明皿、鉢、擂鉢、植木鉢、蓋、甕、壺などがみられる。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

10　陶質土器

陶質土器は､方言で「アカモノ」「アカムヌー」「カマグヮーヤチ」と呼ばれるもので､表面に釉を掛けない窯焼成の土器である。ニービが混ざるため器色は橙色や黄色っぽく、轆轤引きや輪積みによって成形される。焼成が悪く触れると粉末が付着するのが特徴で、主に日用品として用いられた。本報告では特徴的な６点の図化を行った（第 43 図 191 ～ 196)。

器種は鍋、火炉、急須、蓋、壺、灯明皿、鉢、フライパン状製品などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

11　瓦質土器

瓦質土器は特徴的な４点の図化を行った（第 43 図 197 ～ 200)。器種は焜炉、擂鉢、壺、蓋、植木鉢、香炉などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

12　土器

土器は宮古式土器、パナリ焼、硬質土器、グスク土器などが出土した。

ここで扱う硬質土器とは、胎土が精選され、砂粒、黒色粒、赤色粒、雲母などを混入し、轆轤引きや指撫でによって成形され、焼成は悪く、触れると粉末が付着するものを示し（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001)、本土産近世の土器とする。出土した資料はほとんどが小破片であり、ここでは器形的特徴が窺える資料５点を図化し報告する（第 43 図 201 ～ 205)。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

13　煙管

出土した煙管はすべてパイプ状のもので、沖縄産施釉陶器製、銅製、アルミ製、真鍮製と思われるものが得られている。ここでは３点の図化を行った（第 44 図 206 ～ 208)。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

14　金属製品

中城御殿は、近代～戦前まで機能しているうえ、戦後も様々な土地利用が行われていたこともあり、中城御殿建立時と思われる製品だけでなく近現代と思われる製品も見られる。

種類としては建築材（釘、鋲、鎹など）装身具（簪、ボタン)、飾り金具、道具類･器物（香炉、蓋など）に大別できる。そのうち特徴的な 17 点の図化を行った（第 44 図 209 ～第 45 図 225)。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

15　円盤状製品

円盤状製品は日常生活において使用した陶磁器や瓦などを円形に打割調整した二次利用品である。

本報告では 13 点の図化を行った（第 45 図 226 ～第 46 図 238)。

素材のバリエーションは多く見られ、今回は石製やガラス製の製品も得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

16　骨製品・土製品

骨製品は装飾品と考えられる資料、人形などが出土した。そのうち人形１点の図化を行った（第 46 図 239)。

土製品は土人形１点の図化を行った（第 46 図 240)。

図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

17　ガラス製品・ガラス玉

祭事に使われたと思われるガラス玉の他、薬品や化粧の瓶や酒瓶など、近代から現代にかけて使用された製品も多く出土している。

ここでは特徴的な４点の図化を行った（第 46 図 241、244 ～ 246）。また、戦後の中城御殿の様相が窺える資料として、２点の遺物を観察表と写真のみで報告する（図版 35　242、243）。

18　石製品・石器・石造製品

石製品・石器・石造製品は特徴的な石製の角皿２点と硯を１点図化している（第 47 図 247 ～ 249）。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

19　瓦・塼

瓦は特徴的な 15 点を図化し（第 47 図 250 ～ 第 50 図 264）、４点は写真のみで報告を行う（図版 38　265、図版 39　266 ～ 268）。造瓦技術別には、明朝系瓦、近代大和系瓦、近代大和瓦、近現代瓦の４種に大別できる。

塼は特徴的な１点の図化を行った（第 50 図 269）。図化を行った遺物の個々の特徴については観察表に記載する。

20　銭貨

銭貨は寛永通宝、嘉慶通宝、乾隆通宝、世高通宝、唐國通宝、無文銭（無文銭と思われるもの含む）、鳩目銭、二銭、雁首銭、１セント硬貨などが出土している。

本遺跡で出土する銭貨は近世以降のものが中心で、寛永通宝の割合が最も多い。ここでは、15 点の図化を行った (第 51 図 270 ～ 284)。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

第３表　遺物観察一覧１

挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 30 図 図版 20	1	中国産青磁	碗	底	―	5.2	―	全面に施釉。外底を蛇の目釉剥ぎ。内底に「福」のスタンプか。外面の細蓮弁は高台付近まで施文。胎土は灰白色で堅緻。龍泉窯系で 15c ～ 16c。	４トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	2	中国産青磁	碗	底	―	5.6	―	全面に施釉。外底を蛇の目釉剥ぎ。内底に３条１組の沈線あり。胎土は灰白色で堅緻。龍泉窯系で 14c 後～ 15c 半。	６トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	3	中国産青磁	小碗	底	―	3.4	―	外面は厚い青磁釉、内面は透明釉を施釉。畳付を釉剥ぎ。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	４トレ Ⅱ層
第 30 図 図版 20	4	中国産青磁	小碗	底	―	4.2	―	外面は厚い青磁釉、内面は透明釉を施釉。外底に銘の一部あり。畳付を釉剥ぎ。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	４トレ 石畳１ Ⅱｂ層
第 30 図 図版 20	5	中国産青磁	高足杯	底	―	―	―	透明がかった青磁釉を全面に施釉。外底は露胎。細かい貫入多い。胎土は灰白色で堅緻。龍泉窯系か。明代。	９トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	6	中国産青磁	盤	底	―	8.2	―	釉厚く全面に施釉。外底は蛇の目釉剥ぎか。内底に文様あるが不明瞭。胎土は灰白色で堅緻。龍泉窯系で 14c ～ 15c 半。	４トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	7	中国産白磁	小碗	口～底	8.4	4.2	3.9	両面に透明釉。胎土は白色で堅緻。外面に型成形によるシワあり。徳化窯系で 18c ～ 19c 前。	５トレ 石積み４ 土中
第 30 図 図版 20	8	中国産白磁	小碗	口	9.0	―	―	両面に透明釉。外面に唐草文。胎土は白色で堅緻。外面に型成形によるシワあり。徳化窯系で 18c ～ 19c 前。	５トレ Ⅲ層
第 30 図 図版 20	9	中国産白磁	小碗	底	―	4.8	―	両面に透明釉。胎土は白色で堅緻。外底に型成形によるシワあり。畳付に籾痕。徳化窯系で 18c ～ 19c 前。	５トレ 石積み４ 土中
第 30 図 図版 20	10	中国産白磁	皿	口	9.4	―	―	両面に透明釉。胎土は白色で堅緻。口縁部下に型成形によるシワあり。徳化窯系で 18c ～ 19c か。	９トレ 庭園基盤 Ⅱ層
第 30 図 図版 20	11	中国産白磁	杯	口～底	6.8	3.0	4.0	両面に透明釉。畳付は釉剥ぎ。胎土は白色で堅緻。両面に轆轤痕あり。景徳鎮窯系で 16c 後～ 17c 前。	１トレ Ⅲ層
第 30 図 図版 20	12	中国産白磁か	小杯	口～底	3.6	1.55	2.25	両面に透明釉。畳付は釉剥ぎ。胎土は灰白色で堅緻。外面に型成形によるシワあり。中国産か近代の本土産。	６トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	13	中国産白磁	瓶	胴	―	―	―	両面に透明釉。外面に草花文。胎土は灰白色で堅緻。内面に轆轤痕あり。景徳鎮窯系か。清代か。	２トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	14	中国産白磁	鉢	口	23.3	―	―	両面に青みをおびた失透釉。胎土は白灰色で堅緻。両面に轆轤痕・貫入あり。福建・広東系で 16c。	６トレ Ⅱ層
第 30 図 図版 20	15	中国産白磁	蓋	撮み ～袴	撮み径 0.75	庇径 2.8 袴径 1.8	1.45	上面に透明釉、下面は露胎。下面に横位の孔が１孔あり。上面に粘土シワあり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代。	４トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	16	中国産白磁	器種 不明	底	―	3.4	―	両面に透明釉。底部は露胎。下部に猿を型取ったと思われる装飾を貼り付け。胎土は白色で堅緻。両面に細かい貫入あり。徳化窯系で明代。	７トレ 溜池２ Ⅱ層
第 30 図 図版 20	17	中国産青花	碗	口～底	12.6	6.2	5.5	両面にやや白濁の透明釉。内面に細かい貫入多い。外面胴部に蓮唐草文と蓮弁文や、型成形によるシワあり。胎土は灰白色で堅緻。徳化窯系で 16c 末～ 17c か。	４トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	18	中国産青花	碗	口	20.0	―	―	両面に透明釉。口縁内面を廻る幾何文様、胴部に龍文。外面胴部は雲文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	６トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	19	中国産青花	碗	口	9.6	―	―	両面に透明釉。外面胴部に草花文か。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	４トレ Ⅱ層
第 30 図 図版 20	20	中国産青花	碗	口	12.2	―	―	両面に透明釉。内面口縁に薄く１条の圏線とその下に唐草文・２条の圏線。外面口縁に２条の圏線、胴部に蝶、その下に昆虫と思われる文様。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系。	１トレ Ⅲ層
第 30 図 図版 20	21	中国産青花	碗	口	11.0	―	―	両面にやや青みがかる透明釉。外面に不明文様。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	５トレ 石牆１ Ⅱ層
第 30 図 図版 20	22	中国産青花	碗	口	13.2	―	―	両面にやや青みがかる透明釉。外面に草花文。胎土は白色で堅緻。福建産で清代。	９トレ 溜池２・ 庭園基盤 Ⅰ層
第 30 図 図版 20	23	中国産青花	碗	口	14.0	―	―	両面にやや青みがかる透明釉。外面に草花文。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代。	12 トレ Ⅲ層
第 30 図 図版 20	24	中国産青花	碗	口	13.6	―	―	両面にやや青みがかる透明釉。内面に粗い貫入。外面胴部に草花文。胎土は淡黄色で細かい。徳化窯系で 18c。	５トレ Ⅲ層
第 30 図 図版 20	25	中国産青花	碗	口	14.2	―	―	両面にやや青みがかる透明釉。外面に型成形によるシワや、蓮弁文・草花文あり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で 18c。	12 トレ Ⅰ層

第３表　遺物観察一覧２

挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 30 図 図版 20	26	中国産青花	碗	口	11.4	―	―	両面に青みがかる透明釉。口縁外面に牡丹唐草文。口縁内面に∞状の文様。胎土は白色で堅緻。産地不明で清代。	４トレ Ⅱ層
第 30 図 図版 20	27	中国産青花	碗	胴	―	―	―	両面に透明釉。内面に龍文。外面は文様あるが不明。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	６トレ Ⅰ層
第 30 図 図版 20	28	中国産青花	碗	底	―	5.4	―	両面にやや青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎ。外面胴部に牡丹唐草文。内底に草花文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で 18c 後～19c。	４トレ Ⅰ層
第 31 図 図版 21	29	中国産青花	碗	底	―	6.6	―	両面に透明釉。畳付は釉剥ぎ。釉厚い。外面胴部に型成形によるシワや、蓮弁文・寿文あり。外面胴部下半にやや細かい貫入。胎土は灰白色で堅緻。徳化窯系で 18c。	５トレ Ⅲ層
第 31 図 図版 21	30	中国産青花	碗	底	―	9.0	―	両面にやや青みがかる透明釉。内底は蛇の目釉剥ぎ。高台と畳付は一部露胎。外面と内底に文様あるが不明。胎土は黄色みのある白色でやや細かい。福建・広東系で清代。	４トレ Ⅱ層
第 31 図 図版 21	31	中国産青花	碗	底	―	7.8	―	両面にやや青い透明釉。内底を蛇の目釉剥ぎ。高台の内外まばらに露胎。外面胴部に文様あるが不鮮明。胎土は淡黄色で細かい。福建・広東系で 17c ～ 18c か。	５トレ 石牆１ Ⅱ層
第 31 図 図版 21	32	中国産青花	碗	底	―	5.0	―	両面に透明釉。畳付を釉剥ぎし、籾痕が付着。外面胴部に蕉葉文、型成形によるシワあり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代か。	４トレ Ⅱ層
第 31 図 図版 21	33	中国産青花	碗	底	―	5.6	―	両面にやや青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎし、籾痕付着。内底は蛇の目釉剥ぎで、１条の圏線。外面高台際に圏線、胴部に不明の文様。胎土は灰白色でやや細かい。漳州窯系か。	４トレ Ⅱ層
第 31 図 図版 21	34	中国産青花	小碗	口	―	―	―	両面に透明釉。外面に羽状文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系か。清代か。	５トレ 石積み４ 土中
第 31 図 図版 21	35	中国産青花	小碗	口	10.2	―	―	両面にやや白濁の透明釉。貫入粗い。外面は区画内に花文。胎土は灰白色で細かい。福建・広東系で清代。	12 トレ Ⅲ層
第 31 図 図版 21	36	中国産青花	小碗	口	8.2	―	―	両面にやや青みがかる透明釉。内底に２条の圏線、外面は区画内に花文。胎土は白色で堅緻。徳化窯系か。18c 後～ 19c。	12 トレ 方形石組 1
第 31 図 図版 21	37	中国産青花	小碗	口	9.0	―	―	両面に、やや白濁で青みがかる透明釉。外面に丸文。胎土は白色で堅緻。福建・広東系か。清代。	５トレ 石積み４ 土中
第 31 図 図版 21	38	中国産青花	小碗	口	9.6	―	―	両面に透明釉。外面に文様あるが不鮮明。胎土は白色で堅緻。福建・広東系か。清代。	５トレ 石積み４ 土中
第 31 図 図版 21	39	中国産青花	小碗	底	―	4.8	―	両面にやや青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎ。内底に圏線・花文。外面胴部に草花文。外底に銘あり。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で 18c 後～ 19c 前か。	５トレ Ⅲ層
第 31 図 図版 21	40	中国産青花	小碗	底	―	3.9	―	両面にやや青みがかる透明釉。内底に花文。外面は区画内に花文。内底に型成形によるシワあり。胎土は白色で細かい。徳化窯系で 18c 後～ 19c。	12 トレ 円形石組 1
第 31 図 図版 21	41	中国産青花	皿	口～底	12.4	6.8	2.6	両面にやや青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎ。内底に十字花文。外面胴部に草花文か。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で 16c 前～ 16c 半。	６トレ Ⅱ層
第 31 図 図版 21	42	中国産青花	皿	口～底	14.2	6.8	3.8	両面にやや青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎ。内面に草花文。外底に銘あり。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で 17c ～ 18c 前。	４トレ Ⅰ層
第 31 図 図版 21	43	中国産青花	皿	口～底	―	―	1.5	両面に青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎ。内底に不明文様。外面胴部に型成形によるシワあり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で 19c。	９トレ 庭園基盤 Ⅱ層
第 31 図 図版 21	44	中国産青花	皿	底	―	3.8	―	両面に透明釉。畳付を釉剥ぎ。内底に蝶文と草花文。外底に「大明嘉靖年製」の銘あり。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で 16c 前～ 16c 半。	６トレ Ⅱ層
第 31 図 図版 21	45	中国産青花 か	皿	底	―	19.2	―	両面に透明釉。畳付を釉剥ぎ。内面中心に麒麟、その周辺を囲うように文様あり。外底に轆轤痕あり、胎土は白色で堅緻。中国産か本土産。時期不明。	９トレ 溜池２ Ⅰ層
第 32 図 図版 21	46	中国産青花	杯	底	―	3.5	―	両面にやや青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎ。内底に「福」の文字。外面胴部に筆書きの文様。胎土は灰白色で堅緻。中国産。年代不明。	４トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 21	47	中国産青花	小杯	口～底	5.5	2.6	3.6	両面にやや青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎし、籾痕付着。外面胴部に文様。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で 17c 前か。	４トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 21	48	中国産青花	小杯	口～底	4.9	2.2	3.2	両面に透明釉。畳付を釉剥ぎし、籾痕付着。外面胴部に蕉葉文。胎土は白色で堅緻。徳化窯系か。清代。	６トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 21	49	中国産青花	小杯	口	4.8	―	―	両面にやや青みがかる透明釉。内面口縁と内底に圏線。外面胴部に草花文。型成形によるシワあり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代。	６トレ Ⅱ層
第 32 図 図版 21	50	中国産青花	小杯	口～底	5.1	2.4	2.7	両面に青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎ。口唇部は茶色を呈す。外面に囲線と楼閣山水文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系か。清代か。	９トレ Ⅰ層

第３表　遺物観察一覧３

挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 32 図 図版 21	51	中国産青花	小杯	底	―	2.8	―	両面に透明釉。底部は碁笥底で釉剥ぎする。外面胴部に蓮弁状の文様。胎土は白色で堅緻。中国産か。清代。	4 トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 21	52	中国産青花	小杯	底	―	2.35	―	両面にやや青みがかる透明釉。内底に圏線と筆で一点突いたような文様。外面胴部に文様あるが不鮮明。内外面に型成形によるシワあり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代。	6 トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 21	53	中国産青花	小杯	底	―	2.35	―	両面にやや青みがかる透明釉。内底に筆で一点突いたような文様。外面胴部に文様あるが不鮮明。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	6 トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 22	54	中国産青花	鉢	口	26.2	―	―	両面に透明釉。口唇部を釉剥ぎ。内面に草花文、外面に菊花文か。胎土は白色で堅緻。福建・広東系で清代。	10 トレ 方形石組 2
第 32 図 図版 22	55	中国産青花 か	鉢	底	―	7.1	―	両面にやや青みがかる透明釉。内底に花文か、外面に不明文様。上面観は八角。中国産か。清代。	12 トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 22	56	中国産青花	瓶	口～底	1.5	1.7	5.3	外面、内面口縁のみにやや青みがかる透明釉。内面釉垂れあり。外底は露胎。外面胴部に文字と思われる文様。胎土は白色で堅緻。福建産か。清代。	2 トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 22	57	中国産青花	瓶	口	8.3	―	―	両面に透明釉。外面口縁に２条の圏線、頸部に蕉葉文、肩部に唐草文。内面に轆轤痕あり。胎土は白色で堅緻。No.58、No.59 と同一個体か。景徳鎮窯系で 18c。	8 トレ 溜池 2 Ⅱ層
第 32 図 図版 22	58	中国産青花	瓶	胴	―	―	―	両面に透明釉。外面に、石、植物の文様、胴裾に蓮弁文。内面に轆轤痕あり。胎土は白色で堅緻。No.57、No.59 と同一個体か。景徳鎮窯系で 18c。	7 トレ 溜池 2 Ⅱ層
第 32 図 図版 22	59	中国産青花	瓶	底	―	11.4	―	両面に透明釉。畳付を釉剥ぎ。外面胴裾に蓮弁文、高台に蓮と思われる文様。外底に銘。内面に轆轤痕あり。胎土は白色で堅緻。No.57、No.58 と同一個体か。景徳鎮窯系で 18c。	9 トレ 溜池 2 Ⅱ層
第 32 図 図版 22	60	中国産青花	瓶	底	―	7.5	―	両面にやや青みがかる白濁とした釉。畳付を釉剥ぎし、砂付着。外面胴部に草花文か。外面腰部に蓮弁文。胎土は灰白色で堅緻。景徳鎮窯系で 17c 前。	4 トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 22	61	中国産青花	壺	口	10.8	―	―	両面に透明釉。口唇部を釉剥ぎ。外面口縁部に花菱文、その下位に草花文。	12 トレ Ⅰ層
第 32 図 図版 22	62	中国産青花	蓮華	柄	―	―	―	両面に透明釉。内面に唐草文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系か。清代。	8 トレ 溜池 2 Ⅰ層
第 33 図 図版 22	63	中国産 褐釉陶器	壺	口	19.6	―	―	内外面に褐色を呈する釉。外面に轆轤痕あり。胎土は赤褐色でやや軟質、細かい石英粒を多く含む。清代。	5 トレ 石積み 4 土中
第 33 図 図版 22	64	中国産 褐釉陶器	壺	底	―	16.0	―	内外面に上部から垂れた褐色を呈する釉あり。内面胴部の轆轤痕が明瞭。胎土は赤褐色で細かく、細かい石英粒を多く含む。明代。	4 トレ 石畳 1 Ⅱ b 層
第 33 図 図版 22	65	中国産 褐釉陶器	壺	底	―	16.0	―	外面腰部まで自然釉かかる。内面轆轤痕が明瞭。胎土はにぶい赤褐色でやや軟質、白色砂粒や白色・赤色のスジを含む。明代。	8 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	66	中国産 褐釉陶器	壺	底	―	21.8	―	褐色を呈する釉を底面以外に施釉。内外面ともに轆轤痕が明瞭。胎土は黄灰色で細かく、粗い石英粒を少量含む。15c 後～ 16c 前か。	4 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	67	中国産 褐釉陶器	壺	底	―	16.5	―	褐色を呈する釉を底面以外に施釉。底面は橙色を呈する。外面胴部の轆轤痕が明瞭。胎土は黄灰色で細かく、粗い石英粒を少量含む。15c 前～ 15c 半か。	9 トレ 庭園基盤 Ⅱ層
第 33 図 図版 23	68	タイ産 褐釉陶器	壺	口	18.4	―	―	両面に褐色を呈する釉。胎土は黄灰色で細かく、赤色粒を含む。厚手丸縁の壺。メナムノイ産で 15c ～ 16c か。	8 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	69	タイ産 褐釉陶器	壺	口	5.2	―	―	両面に黒褐色を呈する釉。胎土は灰黄色でやや粗く、黒色粒を含む。轆轤成形で口縁断面がやや丸形の壺。タイ産。	11 トレ Ⅲ層
第 33 図 図版 23	70	タイ産 褐釉陶器	壺	口	2.7	―	―	外面に黒褐色を呈する釉。胎土は灰白色で細かく、黒色粒を含む。球状に近い胴部から口縁部にかけて縦耳を２個付す。両面に明瞭な轆轤痕。シーサッチャナライ産で 15c 後～ 16c。	6 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	71	タイ産 褐釉陶器か	壺	底	―	2.1	―	外面に褐色を呈する釉。底部は露胎。胎土は灰黄色でやや粗く、黒色粒を少量含む。轆轤成形。タイ産か。	4 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	72	中国産色絵	碗	口～底	12.7	6.7	5.65	両面に透明釉。外面に蓮弁文・草花文・丸文。胎土は灰白色で堅緻。外面と外底に型成形によるシワあり。徳化窯系で 18c。	12 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	73	中国産色絵	碗	底	―	7.0	―	両面に青白色の釉。畳付を釉剥ぎ。上絵付で見込みに桃文、外面に不鮮明な文様あり。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で 18c ～ 19c か。	4 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	74	中国産色絵	小碗	口～底	8.3	3.6	4.2	両面に透明釉。畳付は釉剥ぎし、籾痕が付着。外底一部露胎。外面に青の上絵付で草花文。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で 18c 後～ 19c 前。	6 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	75	中国産色絵	小碗	口	―	―	―	両面に透明釉。外面上絵青で「貴」の文字。一部上絵緑の絵付けで植物と思われる文様の痕が残るが、剥がれているため詳細不明。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代。	排土

第３表　遺物観察一覧４

挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 33 図 図版 23	76	中国産色絵	皿	口	13.8	－	－	両面に透明釉。両面口縁に染付で２条の圏線。外面染付で唐草文、草花文。草花文は輪郭を染付、中を上絵付の緑、黄で塗り潰す。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で 18c 前。	6 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	77	中国産色絵	皿	口	－	－	－	両面に透明釉。内面に朱色で不明文字。胎土は灰白色で堅緻。内面に型形成によるシワあり。漳州窯系で 16c 末～ 17c 前。	4 トレ Ⅰ層
第 33 図 図版 23	78	中国産色絵	皿	底	－	－	－	両面に透明釉。内面中心に吉祥文字、その周辺を雷文が囲う。外底に「大清嘉慶年製」の銘。胎土は白色で堅緻。外面に轆轤痕あり。景徳鎮窯系で 1796 ～ 1820 年。	10 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 23	79	中国産 青磁染付	小碗	口	10.0	－	－	外面は青磁釉、内面は透明釉。釉厚い。内面に八卦文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	12 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 23	80	中国産 施釉陶器	皿	口～底	7.0	4.0	1.25	両面に青色を呈する釉。外底は露胎で２条の圏線と不明瞭の文様。胎土は灰白色でやや堅緻。景徳鎮窯系か。16c か。	12 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 23	81	中国産 瑠璃釉	皿	口	－	－	－	外面は瑠璃釉、内面は口唇部まで青白色釉。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	6 トレ Ⅱ層
第 34 図 図版 23	82	中国産 褐釉磁器	碗	口	12.8	－	－	両面に褐釉。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	6 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 23	83	中国産 褐釉磁器	碗	底	－	6.7	－	両面に褐釉。高台内のみ透明釉。畳付は露胎。外底に染付で銘。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	6 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 23	84	中国産 褐釉染付	小碗	底	－	4.2	－	外面は褐釉、内面は透明釉。畳付を釉剥ぎ。内底染付の圏線とその内側に草花文か。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	4 トレ Ⅱ層
第 34 図 図版 23	85	中国産三彩	壺	底	－	6.4	－	外面に青色を呈する釉を外底まで施す。胎土は淡茶色でやや脆い。16c か。	6 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 23	86	中国産紫砂	急須	注口	－	－	－	胎土は紫色で緻密。外面を磨いている。清代。孔径 0.75 ㎝。	9 トレ 庭園基盤 Ⅱ層
第 34 図 図版 23	87	中国産 黒釉陶器	碗	口	12.5	－	－	両面にやや光沢のある黒色釉。胎土は灰白色で堅緻。白色粒子を混入。明代か。	9 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 23	88	中国産 黒釉陶器か	碗	底	－	4.2	－	両面にやや光沢のある黒釉。外底は露胎でやや釉垂れあり。胎土は灰黄色でやや粗い。高台は小ぶりで内底に段を複数持つ。中国産か。	9 トレ 庭園基盤 Ⅰ層
第 34 図 図版 24	89	本土産青磁	碗	口～底	10.8	4.6	7.05	全面に青磁釉。高台と外底は露胎。胎土は灰白色で一部橙色を呈し、堅緻。肥前産で近世。	4 トレ Ⅱ層
第 34 図 図版 24	90	本土産青磁	碗	底	－	－	－	両面に青磁釉。畳付を釉剥ぎ。胎土は白色で堅緻。外底の統制番号は「瀬 438」か。瀬戸産で近代。	4 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 24	91	本土産 青磁染付	碗	口	12.0	－	－	外面はやや緑色を呈する釉、内面は透明釉。内面に四方襷文。胎土は白色で堅緻。肥前産で 18c。	8 トレ 石牆 1 Ⅲ c 層
第 34 図 図版 24	92	本土産染付	碗	底	－	4.8	－	両面に青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎ。内底に梅文。外底に「大明」の銘あり。肥前産で 17c 後。	6 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 24	93	本土産染付	碗	底	－	4.6	－	外面に褐色を呈する釉で腰部以下露胎。内面にやや青みがかる透明釉で貫入多い。内底に染付で花文。腰が折れる器形。胎土は灰白色で細かい。本土産で近世。	6 トレ Ⅱ層
第 34 図 図版 24	94	本土産染付	碗	底	－	3.3	－	両面に透明釉。畳付は釉剥ぎ。貫入細かく多い。外面胴部に草花文。胎土は灰白色で堅緻。肥前産で 19c。	4 トレ Ⅱ層
第 34 図 図版 24	95	本土産染付	皿	底	－	7.8	－	両面に透明釉。外底は中央を残し釉剥ぎ。内底に環状松竹梅文、内面に草花文や花菱文、外面に〇×を施す。外底に「成化年製」の銘。胎土は白色で堅緻。肥前産で 18c 半。	8 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 24	96	本土産染付	皿	底	－	－	－	両面にやや青みがかる透明釉。畳付を釉剥ぎ。内底に唐草文、梅文。外底に「大明成化年製」の銘か。胎土は白色で堅緻。肥前産で近世。	4 トレ 石畳 1 Ⅱ b 層
第 34 図 図版 24	97	本土産染付	皿	底	－	9.3	－	両面にやや青みがかる透明釉。高台内は釉剥ぎ。内底に唐草文。胎土は灰白色で堅緻。肥前産で近世。	5 トレ Ⅲ層
第 34 図 図版 24	98	本土産染付	角皿	口～底	－	－	－	両面に透明釉。畳付を釉剥ぎ。内面口縁部に四方襷文、外面胴部に不明文様。胎土は白色で堅緻。肥前産で近世。	4 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 24	99	本土産染付	角皿	口	－	－	－	両面に透明釉。口唇部に市松文。胎土は灰白色で堅緻。肥前産で 17c か。	6 トレ Ⅰ層
第 34 図 図版 24	100	本土産染付	瓶	底	－	4.5	－	外面にやや青みのある透明釉。畳付を釉剥ぎ。外面胴部に文様あるが不明瞭。胎土は白色で細かい。肥前産で近世。	7 トレ 庭園基盤 Ⅰ層

第３表　遺物観察一覧５

挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 35 図 図版 24	101	本土産陶器	碗	口	11.2	―	―	外面は緑色を呈する釉、内面はやや茶色を呈する透明釉の掛け分け。胎土は灰白色で細かい。内野山産で 17c ～ 18c 前。	６トレ Ⅱ層
第 35 図 図版 24	102	本土産陶器	皿	口	17.4	―	―	両面に透明釉。胴部に五芒星あり。軍用食器。断面に煤がみられ、割れた後に被熱か。胎土は薄い橙色で細かい。本土産で近代。	４トレ Ⅰ層
第 35 図 図版 24	103	本土産陶器	皿	口～底	14.0	4.8	4.1	両面に白濁する釉。外面胴部下半以下は露胎。胎土はやや赤みがかる灰色でやや粗い。本土産で近世。	６トレ Ⅱ層
第 35 図 図版 24	104	本土産陶器	擂鉢	口	―	―	―	暗褐色を呈する釉を口縁部両面に施釉。胎土は橙色で一部灰色を呈し細かい。白色粒をやや多く含む。肥前産で 17c 前。	６トレ Ⅰ層
第 35 図 図版 24	105	本土産 褐釉陶器	植木鉢	口	32.4	―	―	両面に褐色を呈する釉。口唇部は露胎。内面胴部に横位の櫛目が明瞭。胎土はにぶい赤褐色で細かい。白色砂粒や赤色粒を含む。薩摩産で近世。	８トレ Ⅲｂ層
第 35 図 図版 24	106	本土産陶器	鉢	底	―	7.4	―	全面に透明釉。内底と畳付に重ね焼きの痕あり。貫入細かく多い。胎土は白色でやや細かい。肥前産か。近世か。	４トレ Ⅰ層
第 35 図 図版 24	107	本土産陶器 か	壺	底	―	10.8	―	外面に透明釉。外底は釉がまだらにかかる。内面轆轤痕が明瞭。胎土は灰色で石英粒を少し含む。本土産か。近世か。	４トレ Ⅱ層
第 35 図 図版 24	108	本土産陶器	擂鉢	口	27.3	―	―	無釉の擂鉢。両面に指ナデによる調整痕が明瞭。胎土は灰色で大小の白砂粒や白筋を多く含む。備前産で近世。	６トレ Ⅰ層
第 35 図 図版 25	109	本土産陶器	火鉢	口	40.8	―	―	黒褐色を呈する釉を両面に施釉。内面口縁部を釉剥ぎ。口唇部がやや青みがかる。外面口縁部に雷文。胎土は黄白色で細かい。上面観は八角形か。本土産で近代か。	４トレ Ⅰ層
第 35 図 図版 25	110	本土産陶器	杯	口～底	5.6	2.3	3.8	両面に貫入の多い透明釉。外面胴部下半以下は露胎。胎土は灰白色で細かい。本土産で近世。	５トレ 石牆１ Ⅲｂ層
第 35 図 図版 25	111	本土産陶器	袋物	底	―	4.8	―	両面に薄い褐色を呈する釉。外底は露胎で糸切痕あり。胎土は灰色で細かい。肥前産で近世。	８トレ 溜池２ Ⅰ層
第 35 図 図版 25	112	本土産陶器	タイル	―	―	―	1.9	表面から背面縁にかけて白色を呈する釉。表面に銅板転写による草花文。胎土は白色で軟質。瀬戸・美濃産で近代。	９トレ Ⅰ層
第 36 図 図版 25	113	本土産 褐釉陶器	壺	口	19.4	―	―	両面に褐色を呈する釉。口唇を釉剥ぎ。内面の調整痕が明瞭。胎土は赤褐色でやや粗く、白砂粒や石英をやや多く含む。薩摩産で近世。	４トレ Ⅰ層
第 36 図 図版 25	114	本土産 褐釉陶器か	火炉	口	―	―	―	両面に褐色を呈する釉。胴部に菱形のスタンプあり。胎土は橙色でやや細かい。本土産か。	９トレ 庭園基盤 Ⅱ層
第 36 図 図版 25	115	本土産色絵	香炉か	口	8.8	―	―	両面に貫入の多い透明釉。蓋受け部は釉剥ぎし煤付着。黒や、金と思われる線で施文。胎土は白色で細かい。京焼で 18c ～ 19c か。	５トレ Ⅰ層
第 36 図 図版 25	116	本土産 褐釉陶器	鉢	底	―	―	―	両面に褐色を呈する釉。外底は露胎。内底に貝目。胎土は赤褐色で細かく、石英や白砂粒を少量含む。薩摩産で近世。	６トレ Ⅱ層
第 36 図 図版 25	117	本土産磁器	碗	底	―	4.7	―	両面に透明釉。畳付を釉剥ぎ。外底に「岐 13」の統制番号。胎土は灰黄色で堅緻。美濃産で近代。	４トレ Ⅱ層
第 36 図 図版 25	118	本土産磁器	碗	口～底	11.6	4.4	5.3	両面に明緑灰を呈する釉と暗褐色を呈する釉を施釉。胴部外面に蓮弁。胎土は白色で堅緻。本土産で近代。	12 トレ Ⅱｂ層
第 36 図 図版 25	119	本土産磁器	碗	口～底	11.3	4.1	5.05	両面に透明釉。畳付を釉剥ぎ。外面口縁部に２条の圏線。外底に「岐 1065」の統制番号。胎土は白色で堅緻。美濃産で近代。	４トレ Ⅱ層
第 36 図 図版 25	120	本土産磁器	小碗	口～底	8.2	3.0	4.8	両面に透明釉。畳付を釉剥ぎ。外面胴部に山水文、腰部に波文。外底に「岐 410」の統制番号。胎土は白色で堅緻。美濃産で近代。	９トレ Ⅰ層
第 36 図 図版 25	121	本土産磁器	小杯	口～底	3.7	1.8	2.3	底面以外に透明釉。内底に眼鏡の文様。外面胴部に「今日も明日も欠かさずのんで強いからだ奈里ませう」の文字。胎土は白色で堅緻。本土産で近代。	４トレ Ⅱ層
第 36 図 図版 25	122	本土産磁器 か	蓋物の 身	口～底	11.0	10.2	4.1	両面に透明釉。畳付・口唇を釉剥ぎ。外側面に北宋の蘇軾の韻文である『赤壁賦』を記す。内面に轆轤痕あり。胎土は白色で堅緻。本土産で近代か。	２トレ Ⅰ層
第 36 図 図版 25	123	本土産磁器	小鉢	口～底	2.4	2.0	2.9	底面以外に透明釉。口唇部は呉須による着色。胎土は白色で堅緻。本土産で近代。	４トレ Ⅰ層
図版 25	124	本土産磁器	瓶	底	―	5.1	―	1960 年代の資料か。外底に「有田焼」の銘あり。胴部の図はゲンキ坊やか。胎土は白色で堅緻。	２トレ Ⅰ層
第 37 図 図版 26	125	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	14.7	7.0	7.0	両面に白化粧と透明釉施釉。内底は蛇の目釉剥ぎ。畳付白土塗布。外底は褐色を呈する釉。胎土は淡黄色で細かい。	８トレ 溜池２ Ⅰ層

第３表　遺物観察一覧６

挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 37 図 図版 26	126	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	14.4	7.4	6.8	両面に白化粧と薄緑色を呈する透明釉後、外面緑釉を掛け分け。内底蛇の目釉剥ぎ。畳付釉剥ぎ。見込み部分と高台内側のみ透明釉施釉。胎土はにぶい黄橙色で細かい。	４トレ Ⅱ層
第 37 図 図版 26	127	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	13.0	6.8	6.35	にぶい黄色を呈する灰釉を内外面胴下部まで施釉。内底と外面腰以下は露胎。高台、外底に煤付着。内底に重ね焼きの跡。胎土はにぶい黄橙色で緻密。	５トレ Ⅲ層
第 37 図 図版 26	128	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	12.8	6.2	6.1	オリーブ黄色を呈する灰釉を内外面腰部まで施釉。それ以下の部分露胎。内外面ともに轆轤痕が明瞭。畳付白砂付着。胎土は灰黄色で緻密。	５トレ Ⅲ層
第 37 図 図版 26	129	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	12.4	6.4	5.7	灰白～灰褐色を呈する釉を内外面腰部まで施釉。それ以下の部分露胎。胎土は明赤褐色で緻密。	５トレ 石積み４ 土中
第 37 図 図版 26	130	沖縄産 施釉陶器	碗	口	12.2	－	－	暗褐色を呈する釉を内外面ともに腰部まで施釉。内底および外面高台脇以下は露胎。胎土は淡黄色で細かい。	７トレ 庭園基盤 Ⅰ層
第 37 図 図版 26	131	沖縄産 施釉陶器	碗	口	12.2	－	－	両面に黒褐色を呈する釉厚く施釉し、オリーブ黄色を呈する釉２度掛け。にぶい黄色を呈する釉を口縁部にのみ施釉。胎土は灰白色で緻密。	５トレ Ⅲ層
第 37 図 図版 26	132	沖縄産 施釉陶器	碗	底	－	6.2	－	灰オリーブ色を呈する釉を内外面胴下部まで施釉。それ以下の部分は露胎。内底重ね焼きの跡。外面腰部に線刻で２条の圏線。胎土は灰白色で堅緻。	５トレ 石積み４ 土中
第 37 図 図版 26	133	沖縄産 施釉陶器	碗	底	－	7.2	－	両面透明釉掛かる。内底蛇の目釉剥ぎ。外面高台から外底にかけて露胎。畳付白土塗布。胎土は灰白色で緻密。	５トレ Ⅲ層
第 37 図 図版 26	134	沖縄産 施釉陶器	碗	底	－	6.9	－	灰釉を内面胴下部に施釉。それ以外の部分は露胎。畳付白土塗布。胎土は灰白色で堅緻。	５トレ 石積み４ 土中
第 37 図 図版 26	135	沖縄産 施釉陶器	碗	底	－	7.0	－	灰釉を内外面ともに腰部まで施釉。見込みに釉を丸く塗る。その他の部分は露胎。胎土は灰白色で緻密。	５トレ 石積み４ 土中
第 37 図 図版 26	136	沖縄産 施釉陶器	碗	底	－	6.2	－	内面に鉄釉で２条の圏線と文様描き、両面浅黄色を呈する透明の灰釉施釉。内底と外面腰以下露胎。内底、畳付に重ね焼きの跡。全体的に丁寧な造り。胎土は灰白色で堅緻。	５トレ Ⅲ層
第 37 図 図版 26	137	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底	8.8	4.0	4.65	両面に白化粧と透明釉。内底は蛇の目釉剥ぎ。畳付を釉剥ぎ。外底は白化粧のみ施す。胎土は淡黄色で細かい。	８トレ 溜池２ Ⅱ層
第 37 図 図版 26	138	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底	8.2	3.5	4.25	全面白化粧に透明釉。畳付釉剥ぎし、白土塗布。外面線刻と呉須で半菊花文描く。胎土は浅黄橙色で細かい。	12 トレ 方形石組 1
第 37 図 図版 26	139	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底	8.0	3.6	4.15	内面灰オリーブ色を呈する釉、黒褐色を呈する釉を内面上部から外面高台にかけて施釉。内底蛇の目釉剥ぎで、重ね焼きの跡残る。畳付白土塗布。胎土は灰黄色で細かい。	９トレ 溜池２・ 庭園基盤 Ⅱ層
第 37 図 図版 26	140	沖縄産 施釉陶器	小碗	口	8.3	－	－	両面白化粧に透明釉。内底蛇の目釉剥ぎか。全体に細かく貫入が入る。胎土は淡黄色で細かい。	12 トレ 方形石組１ 床直
第 37 図 図版 26	141	沖縄産 施釉陶器	小碗	底	－	3.65	－	全面に透明釉。畳付を釉剥ぎ後白土塗布。外面腰部に１条の圏線。外底には線刻と呉須で「黻」の略称。胎土は灰白色で堅緻。	４トレ Ⅱ層
第 37 図 図版 26	142	沖縄産 施釉陶器	皿	底	－	7.8	－	両面白化粧に透明釉。内底蛇の目釉剥ぎ後、緑釉で三巴文施す。重ね焼きの跡あり。畳付釉剥ぎし白土塗布。全体に細かい貫入が入る。胎土はにぶい黄橙色で細かい。	４トレ Ⅱ層
第 37 図 図版 26	143	沖縄産 施釉陶器	鉢	底	－	10.6	－	内面は白化粧に透明釉。外面と外底は褐色を呈する釉掛かる。内底は蛇の目釉剥ぎ。胎土は淡黄色で細かい。	排土
第 37 図 図版 26	144	沖縄産 施釉陶器	小鉢	底	－	4.6	－	両面灰オリーブ色を呈する灰釉施釉。高台から外底にかけて露胎。外面腰付近に２条の圏線。全体的に丁寧な造り。胎土は灰白色で堅緻。	５トレ 石積み４ 土中
第 37 図 図版 26	145	沖縄産 施釉陶器	鉢か	口	8.6	－	－	両面に鉄釉。白土貼り付け雲龍文装飾か。装飾部はオリーブ色を呈する釉。外面のみ透明釉掛かる。胎土は褐灰色で緻密。	４トレ Ⅰ層
第 38 図 図版 27	146	沖縄産 施釉陶器	鉢か	底	－	14.4	－	外面脚半ばまで黒色を呈する釉が厚く掛かる。内面露胎し轆轤痕が明瞭。内底白砂付着。外底に円柱状の脚が付く。胎土は灰色で緻密。	４トレ Ⅱ層
第 38 図 図版 27	147	沖縄産 施釉陶器	按瓶	底	－	11.0	－	暗オリーブ色を呈する釉を内面全面に、外面厚く腰部まで施釉。外底にも同様の釉が掛かる。内面轆轤痕が明瞭。内底、畳付に重ね焼きの跡。胎土は灰黄色で細かい。	４トレ Ⅱ層
第 38 図 図版 27	148	沖縄産 施釉陶器	急須	口～底	5.8	6.8	8.4	外面底部側面まで黒褐色を呈する釉厚く掛かる。口縁部釉剥ぎ。内面露胎し轆轤痕が明瞭。注口部は胴に３点孔開ける。胴部円柱状の把手貼り付け。胎土は浅黄色で細かい。	５･12トレ Ⅰ層
第 38 図 図版 27	149	沖縄産 施釉陶器	急須	口～底	5.7	6.6	8.25	外面白化粧後、外底除く両面に薄緑色を呈する透明釉施釉。口唇部釉剥ぎ。注口部は胴に２点孔開ける。外底重ね焼きの跡と、円錐状の脚３点付く。胎土は灰白色で緻密。	４トレ Ⅱ層

第３表　遺物観察一覧７

挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径／ 長軸(cm)	底径／ 短軸(cm)	器高／ 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 38 図 図版 27	150	沖縄産 施釉陶器	急須	底	－	8.8	－	内面黒褐色を呈する釉が掛かり轆轤痕が明瞭。外底露胎し煤付着。円錐状の脚が付く。胎土はにぶい赤褐色で緻密。	５トレ 石積み４ 土中
第 38 図 図版 27	151	沖縄産 施釉陶器	急須	底	－	7.6	－	外面底部側面まで黒褐色を呈する釉厚く掛かる。底部は露胎し煤付着。円錐状の脚３点付く。内面は露胎し轆轤痕が明瞭。胎土は浅黄色で細かい。	12 トレ 円形石組 1
第 38 図 図版 27	152	沖縄産 施釉陶器	急須	底	－	7.2	－	外面腰部まで褐色を呈する釉が掛かる。その他の部分は露胎。全体的に薄い作り。外底煤付着し円錐状の脚が付く。胎土は浅黄色で細かい。	５トレ 石牆１ カイタイ
第 38 図 図版 27	153	沖縄産 施釉陶器	鍋	口～底	13.4	8.4	8.7	黒褐色を呈する釉を内面胴部以下、外面鍔部分から胴半ばにかけて施釉。口縁部鍔縁。底部は熱によって変色し、外底煤付着。胎土は灰色で緻密。	４トレ Ⅱ層
第 38 図 図版 27	154	沖縄産 施釉陶器	鍋	口	17.4	－	－	外面鉄釉、内面褐色を呈する釉を施釉。内外面ともに轆轤痕が明瞭。口縁部鍔縁。胎土は黄灰色で細かい。	５トレ 石積み４ 土中
第 38 図 図版 27	155	沖縄産 施釉陶器	壺	口～底	12.5	12.0	19.8	外面高台脇までと外底に暗褐色を呈する釉施釉。圏線２条施し、耳が４つ付く。口縁部釉剥ぎ。内面オリーブ黄色を呈する釉掛かり、轆轤痕が明瞭。胎土は淡黄色で細かい。	12 トレ Ⅰ層
第 38 図 図版 27	156	沖縄産 施釉陶器	壺	口	5.8	－	－	両面に黒色を呈する釉施釉。口唇部を釉剥ぎ。内面轆轤痕が明瞭。胎土は灰黄色で細かい。	８トレ 溜池２ Ⅰ層
第 38 図 図版 27	157	沖縄産 施釉陶器	香炉	口～底	15.3	6.6	9.1	両面赤褐色を呈する釉施釉後、内口唇部から外面腰部にかけ鉄釉厚く掛かる。内口唇部に鉄付着。獣脚状の脚が付き、足先に白砂付着。胎土は灰白色で堅緻。	５トレ 石積み４ 土中
第 39 図 図版 28	158	沖縄産 施釉陶器	火入	口～底	10.8	7.3	7.8	口唇部内側から外面胴下部にかけ黄褐色を呈する釉施釉。内面と外面腰以下は露胎。内面轆轤痕が明瞭。外面胴部に線刻で３条の圏線。胎土は淡黄色でやや軟質。	４トレ Ⅰ層
第 39 図 図版 28	159	沖縄産 施釉陶器	火入	口	10.8	－	－	口唇部内側から外面２cm程の部分にかけ白化粧に緑釉厚く施釉し、線刻で２条の圏線。外面胴部は暗オリーブ色を呈する釉施釉。内面露胎。胎土はにぶい黄橙色で細かい。	12 トレ ｻﾌﾞﾄﾚ３ Ⅱｂ層
第 39 図 図版 28	160	沖縄産 施釉陶器	蓋	庇	－	庇径 19.0	－	内外面ともに庇端部のみ黒褐色を呈する釉施釉。外面轆轤痕が明瞭。内面重ね焼きした際の沖縄産施釉陶器が一部付着か。胎土は黄灰色で細かい。	５トレ 石積み４ 土中
第 39 図 図版 28	161	沖縄産 施釉陶器	蓋	撮み	撮み径 6.5	－	－	外面一部に暗褐色を呈する釉掛かる。撮み部分は高台状で橙色を呈する。胎土は黄灰色で緻密。	５トレ 石積み４ 土中
第 39 図 図版 28	162	沖縄産 施釉陶器	蓋	撮み ～袴	撮み径 1.8	庇径 8.1 袴径 5.9	4.0	外面線刻で圏線や格子模様、丸文施す。全面に白化粧後、外面のみ白釉施釉し呉須と鉄釉で絵付け。撮み付近に孔。急須の蓋か。庇に煤付着。胎土はにぶい黄橙色で細かい。	４トレ Ⅰ層
第 39 図 図版 28	163	沖縄産 施釉陶器	蓋	庇	－	庇径 26.2	－	内外面ともに撮み付近から庇にかけて黒色を呈する釉施釉。内面轆轤痕が明瞭。胎土は褐灰色で緻密。	５トレ 石積み４ 土中
第 39 図 図版 28	164	沖縄産 施釉陶器	器種 不明	底	－	5.4	－	前面は白釉と底部付近に鉄釉が掛かる。背面は無釉。全体に線刻で鱗のような文様を施す。胎土はにぶい橙色で緻密。	９トレ 庭園基盤 Ⅱ層
第 39 図 図版 28	165	沖縄産 施釉陶器	灯明具	底	－	4.6	－	黒褐色を呈する釉が内面と、厚く外面に掛かる。底部露胎し轆轤痕が明瞭。高足で灯芯を支える突起は欠損。胎土はにぶい黄橙色で細かい。	９トレ 庭園基盤 Ⅱ層
第 39 図 図版 28	166	沖縄産 施釉陶器	水滴	口～底	孔径 0.85	－	2.6	外面底部除く全面に黒色を呈する釉厚く掛かる。注口欠損。底部に付着物あり。上面に凸状の花の文様か。胎土は灰白色で堅緻。	４トレ Ⅰ層
第 39 図 図版 28	167	沖縄産 施釉陶器	餌入	口～底	3.9	2.1	2.2	両面に鉄釉施釉。外底は碁笥底で露胎。内湾した形状で耳部分欠損。胎土は灰黄色で緻密。	７トレ Ⅰ層
第 39 図 図版 28	168	沖縄産 施釉陶器	尿瓶	口～底	－	12.2	15.1	外面上面から胴半ばにかけ黒褐色を呈する釉施釉。内面と高台脇から外底にかけて暗褐色呈する釉施釉。両面轆轤痕が明瞭。受尿口と胴部の繋ぎ目粗雑。胎土は灰白色で緻密。受尿口径 6.9 cm	７トレ 庭園基盤 Ⅲ層
第 39 図 図版 28	169	沖縄産 施釉陶器	獣形	脚	－	－	厚さ 6.75	シーサーの右後ろ脚部分か。全体にオリーブ黄色を呈する釉施釉。装飾部や内側部分などに黒褐色を呈する釉掛かる。脚裏露胎。爪先部分一部欠損。胎土は灰黄色で緻密。	12 トレ Ⅰ層
第 40 図 図版 29	170	沖縄産 無釉陶器	灯明皿	口～底	10.8	5.6	2.1	内外口縁部に煤付着。胎土は明赤褐色で細かい。	８トレ Ⅱ層
第 40 図 図版 29	171	沖縄産 無釉陶器	灯明皿	口～底	9.4	4.0	2.7	口縁部に煤付着。内外面轆轤痕が明瞭。胎土は暗赤褐色で細かい。	５トレ Ⅲ層
第 40 図 図版 29	172	沖縄産 無釉陶器	鉢	口	24.4	－	－	外面に櫛描きの波状文。内面轆轤痕が明瞭。胎土は赤褐色で細かい。	12 トレ Ⅰ層
第 40 図 図版 29	173	初期沖縄産 無釉陶器	鉢	口	15.8	－	－	両面に泥釉。口唇部を釉剥ぎ、内面胴部は露胎。胎土は灰赤色を呈し細かく、白色のスジを少量含む。	８トレ Ⅰ層

第３表　遺物観察一覧８

挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 40 図 図版 29	174	初期沖縄産 無釉陶器	擂鉢	底	―	10.0	―	内外面の一部に自然釉。櫛目はやや深い。外面下部に溶着防止のサンゴ目跡が付着。外面胎土はにぶい赤褐色で細かく、白色粒・細かい石英粒を多く含む。	４トレ Ⅰ層
第 40 図 図版 29	175	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	底	―	10.4	―	櫛目は浅くやや間隔が空く。胎土は赤褐色で細かく、赤色粒が散見される。	８トレ 石牆１ Ⅲｃ層
第 40 図 図版 29	176	初期沖縄産 無釉陶器	擂鉢	底	―	10.4	―	外面に泥釉で光沢あり。内面に深い櫛目。胎土は灰褐色で細かく、白色のスジを多く含む。	12 トレ Ⅰ層
第 40 図 図版 29	177	初期沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口	―	―	―	外面口唇以下、泥釉を施釉しやや光沢あり。内面に浅い櫛目。胎土は暗赤褐色で細かく、胎土は少量の白色粒・赤色スジ・白色スジを含む。	９トレ Ⅰ層
第 40 図 図版 29	178	沖縄産 無釉陶器	植木鉢	底	―	22.6	―	内面轆轤痕が明瞭。内底中央に 9.0 ㎝の孔あり。胎土は明赤褐色で細かい。	８トレ 溜池２ Ⅰ層
第 40 図 図版 29	179	初期沖縄産 無釉陶器	蓋	庇～袴	―	庇 13.8 袴 10.0	―	上面～庇にかけて泥釉。下面は露胎。胎土は暗赤褐色で細かく、赤色スジ・白色スジを密に、粗い石英粒を少量含む。	４トレ Ⅱ層
第 41 図 図版 30	180	沖縄産 無釉陶器	甕	底	―	23.0	―	内面に石灰が付着。胎土は明赤褐色で細かく、僅かに極小の白砂を含む。便所として利用されたか。	８トレ Ⅰ層
第 41 図 図版 30	181	沖縄産 無釉陶器	瓶	底	―	11.0	―	両面に泥釉。外面光沢あり。胎土は赤褐色を呈し細かい。外面にぶくが散見される。	12 トレ Ⅲ層
第 41 図 図版 30	182	沖縄産 無釉陶器	甕	口	34.7	―	―	内外面轆轤痕が明瞭。口縁部直下に波状沈線を巡らす。胎土は明赤褐色で細かい。	４トレ Ⅰ層
第 41 図 図版 30	183	沖縄産 無釉陶器	甕	口	51.0	―	―	内外面轆轤痕が明瞭。胎土は明赤褐色で細かい。	12 トレ 円形石組２ ３層
第 41 図 図版 30	184	沖縄産 無釉陶器	甕	口	70.2	―	―	口縁部に縄目貼付けし、胴部に貼花文。胎土は赤褐色で細かい。	６トレⅠ 層
第 41 図 図版 30	185	沖縄産 無釉陶器	甕	底	―	20.6	―	外面底部に一部自然釉あり。内外面底部に丁寧な指ナデ痕。胎土は赤褐色で細かい。	５トレ 石積み４ 土中
第 42 図 図版 31	186	初期沖縄産 無釉陶器	壺	口	10.8	―	―	両面に泥釉。外面光沢あり。胎土は赤褐色を呈し細かい。	５トレ Ⅲ層
第 42 図 図版 31	187	初期沖縄産 無釉陶器	壺	胴	―	―	―	轆轤成形。外面には泥釉が掛かっている。胎土は暗赤褐色で細かく、白色粒と白いスジを含む。「十九」の文字が刻まれている。	２トレ Ⅰ層
第 42 図 図版 31	188	初期沖縄産 無釉陶器	壺	底	―	16.4	―	外面に自然釉がわずかに付着。胎土は灰赤褐色で細かく、白いスジを密に含む。	12 トレ Ⅲ層
第 42 図 図版 31	189	沖縄産 無釉陶器	壺	口	24.4	―	―	大型の壺。内面轆轤痕が明瞭。胎土は暗赤褐色で細かい。	12 トレ Ⅲ層
第 42 図 図版 31	190	沖縄産 無釉陶器	壺	口～底	13.8	20.0	43.65	口縁部内面から外面にかけて筆のようなもので施釉。貼付けた耳は２つ残存。胎土は赤褐色で細かい。	４トレ Ⅱ層
第 43 図 図版 32	191	陶質土器	鍋	口	16.0	―	―	口頸部が「く」の字に折れ、外面全体的に煤付着。内外面轆轤痕が明瞭。胎土は外面橙色、内面にぶい黄橙色でやや軟質。赤色粒と僅かに雲母、黒色粒を含む。	12 トレ 円形石組２ ４・５層
第 43 図 図版 32	192	陶質土器	鍋	口	17.8	―	―	口頸部が「く」の字に折れ、口縁に把手をつける。把手部に煤付着。胎土は橙色を呈し軟質。赤色粒と雲母を多く含む。	12 トレ 方形石組 １
第 43 図 図版 32	193	陶質土器	火炉	口	13.2	―	―	外面に白土による圏線を施すが、残りが悪く不明瞭。口唇部に煤付着。耳部分上から下にかけて孔を穿つ。胎土は橙色を呈し軟質。雲母と僅かに赤・白色粒を含む。	12 トレ 円形石組２ ３層
第 43 図 図版 32	194	陶質土器	急須	注口	―	―	―	外面指ナデ痕が残る。注口下部に煤付着。胎土は橙色に灰色が挟まれる様に変化し、やや硬質。極僅かに雲母と白色粒を含む。孔径 1.3 ㎝。	５トレ 石積み４ 土中
第 43 図 図版 32	195	陶質土器	蓋	撮み ～庇	撮み径 5.1	庇径 14.0	4.0	撮み高台状で袴は無い。外面全体的に煤付着。内外面轆轤痕が明瞭。胎土は橙色に灰黄色が挟まれるように変化し、やや軟質。赤色粒と雲母を僅かに含む。	12 トレ Ⅰ層
第 43 図 図版 32	196	陶質土器	ﾌﾗｲﾊﾟﾝ 状製品	把手	―	―	―	両面に指頭圧痕あり。孔径 0.8 ㎝。裏面の孔付近に煤付着。胎土は淡橙色を呈し軟質、赤色粒を僅かに含む。	８トレ Ⅰ層
第 43 図 図版 32	197	瓦質土器	蓋	庇～袴	―	庇径 10.6 袴径 8.2	1.8	外面光沢がある。内面轆轤痕が明瞭。中央部分に孔が開く。胎土は緻密で、外面黒褐色、その他の部分は灰白色を呈する。孔径 2.0 ㎝。	５トレ 石積み４ 土中

第３表　遺物観察一覧９

挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 43 図 図版 32	198	瓦質土器	擂鉢	口	―	―	―	内面刷毛による調整痕明瞭。胎土は灰色で細かく、粗い黒色粒を僅かに含む。	8 トレ Ⅱ層
第 43 図 図版 32	199	瓦質土器	壺	口	39.0	―	―	外面胴部に牡丹唐草文に類似した文様施す。胎土は細かく、雲母と白色粒を僅かに含む。表面にぶい橙色でサンドイッチ状ににぶい黄橙色を呈す。	6 トレ Ⅱ層
第 43 図 図版 32	200	瓦質土器	焜炉	口	―	―	―	全面に籾痕が多く見られる。口唇部に煤付着。胎土は軟質で雲母、赤色粒を含みサンドイッチ状に灰色を呈す。	8 トレ Ⅱ層
第 43 図 図版 32	201	本土産 硬質土器	焙烙	口	―	―	―	本土産の近世硬質土器。胎土は土師質で、白砂粒、雲母を含む。内外面に轆轤痕あり。外面に煤が付着。	12 トレ 円形石組 1
第 43 図 図版 32	202	本土産 硬質土器	焙烙	底	―	―	―	本土産の近世硬質土器。胎土は土師質で、灰色の素地をにぶい黄橙色でサンドイッチ状に挟み込む。赤色土粒、雲母を含む。内外面に轆轤痕あり。	4 トレ Ⅱ層
第 43 図 図版 32	203	本土産 硬質土器	袋物	底	―	13.7	―	本土産の近世硬質土器。胎土は土師質で、白砂粒、赤色粒、黒色鉱物、雲母を含む。内外面に轆轤痕あり。	6 トレ Ⅰ層
第 43 図 図版 32	204	宮古式土器	鉢	口	―	―	―	宮古式土器。胎土は陶器質で細かく、白砂粒や赤色粒を含む。内面に指頭押圧痕あり。	12 トレ Ⅰ層
第 43 図 図版 32	205	宮古式土器	鉢	口	―	―	―	宮古式土器。胎土はやや陶器質で細かく、白砂粒や赤色粒を含む。	8 トレ 溜池 2 Ⅱ層
第 44 図 図版 33	206	煙管	―	雁首	2.5	―	1.3	濃い緑色を呈する釉を全面に施釉。小口は釉剥ぎ。内面は露胎。火皿高は低い。材質は沖縄産施釉陶器。火皿外径 1.4 ㎝・内径 1.1 ㎝、小口外径 1.2 ㎝・内径 0.8 ㎝。重量 4.3g。	排土
第 44 図 図版 33	207	煙管	―	完形	12.4	―	3.1	羅宇部分の断面は楕円形状。吸口に向けて細くなる。火皿・吸口の平面形は円状。火皿手前の胴上部は火種を落とす際の打ち付けの影響か僅かに凹む。火皿外径 1.1 ㎝・内径 0.5 ㎝、口付外径 0.7 ㎝・内径 0.3 ㎝。重量 12.8g。	2 トレ Ⅰ層
第 44 図 図版 33	208	煙管	―	雁首	9.45	―	3.0	火皿外面の小口側に径２㎜の孔あり。脂反しに文様あるが不鮮明。材質は真鍮。火皿外径 1.4 ㎝･内径 1.1 ㎝、口付外径 1.0 ㎝･内径 0.8 ㎝。重量 12.4g。	6 トレ Ⅱ層
第 44 図 図版 33	209	金属製品	簪	―	7.25	―	0.45	髪差。カブは六角形を呈しやや傾く。頚部断面形は六角形、竿部断面形は四角形。頚部・ムディより竿部は一回り太く、先端は四角錘状。重量 9.9g。	5 トレ Ⅰ層
第 44 図 図版 33	210	金属製品	簪	―	17.05	―	0.4	側差。カブは耳かき状に形成。頚部断面形は円状、竿断面形は六角形状。頚部と竿の境は太くなり、先端はやや尖る。重量 9.7g。	12 トレ Ⅰ層
第 44 図 図版 33	211	金属製品	鍵	―	4.4	―	0.45	青銅製の鍵。南京錠のものか。鍵頭はクローバー状にかたどられている。2.8 ㎝の軸が伸びている。先端部 1.1 ㎝のみ筒状になっている。重量 4.9g。	12 トレ Ⅰ層
第 44 図 図版 33	212	金属製品	香炉	底 (脚)	―	―	厚さ 2.4	鼎形香炉の脚部。獣脚状を呈している。全体的にやや錆が付着しており、文様・装飾は見られない。付け根部分には胴部が一部残っている。重量 105.8g。	6 トレ Ⅰ層
第 44 図 図版 33	213	金属製品	香炉	口	33.6	―	―	上面観は円形を呈していたか。口縁は直口する。胴部には雷文地饕餮（とうてつ）文が施されており祭事用であることが窺える。重量 530 ｇ。	6 トレ Ⅰ層
第 44 図 図版 33	214	金属製品	飾り 金具	―	1.25	1.05	0.1	花を模ったと思われる形状で、中央に２㎜の留め釘用と思われる孔あり。重量 0.4g。	6 トレ Ⅰ層
第 44 図 図版 33	215	金属製品	飾り 金具	―	最大径 2.7	―	高さ 0.75 厚さ 0.1	鋲の笠部か。笠の内側に軸を固定するためと思われる溶かした金属が流し込まれており､ほぼ中央に軸部の孔が開いている。重量 7.7g。	5 トレ 石牆 1 Ⅰ層
第 44 図 図版 33	216	金属製品	飾り 金具	―	6.0	4.25	0.1	木瓜型の飾り金具。完形。上下左右に４か所２～2.5 ㎜の孔あり。全体的に錆化が進んでおり、文様構成は判然としないが、一部に唐草文と魚々子が確認できる。琉球製。重量 10.2 ｇ。	4 トレ Ⅰ層
第 44 図 図版 34	217	金属製品	飾り 金具	―	4.8	3.1	0.1	片側は魚尾状の入八双、もう片側は平坦状の飾り金具。２～３㎜の留め釘用の孔が３つあり。唐草文と思われる文様と魚々子が僅かに確認できるが、錆化のため判然としない。琉球製。重量 6.7g。	5 トレ 石牆 1 カイタイ
第 44 図 図版 33	218	金属製品	縁金具	―	5.1	3.3	0.1	欠損しており全体像は窺えないが、形状やサイズ感から箪笥等の縁金具かと思われる。文様はなく、留め釘用と思われる２㎜の孔が４つあけられている。重量 5.3g。	5 トレ 石牆 1 カイタイ
第 45 図 図版 33	219	金属製品	縁金具	―	4.85	4.8	0.1	床飾りや櫃などの調度品に取り付けられる縁金具か。板状製品を花咲形に縁取る。３㎜の鋲を打つと思われる孔３つあり。文様は見られない。重量 5.3g。	5 トレ 石牆 1 カイタイ
第 45 図 図版 34	220	金属製品	八双 金具	―	7.05	3.15	0.1	出八双の飾り金具。２㎜の留め釘用の孔が２つあり。錆や摩耗で判別し難いが、唐草文と魚々子が確認できる。過去の類例から鍍金が施されていたか。琉球製。重量 13.0g。	5 トレ 石牆 1 カイタイ
第 45 図 図版 34	221	金属製品	角釘	―	15.5	1.7	―	ほぼ完形の鉄釘。頭部平面形・軸部断面は正方形で、軸部から先端にかけて先細る。重量 66.5g。	5 トレ Ⅰ層

第３表　遺物観察一覧 10

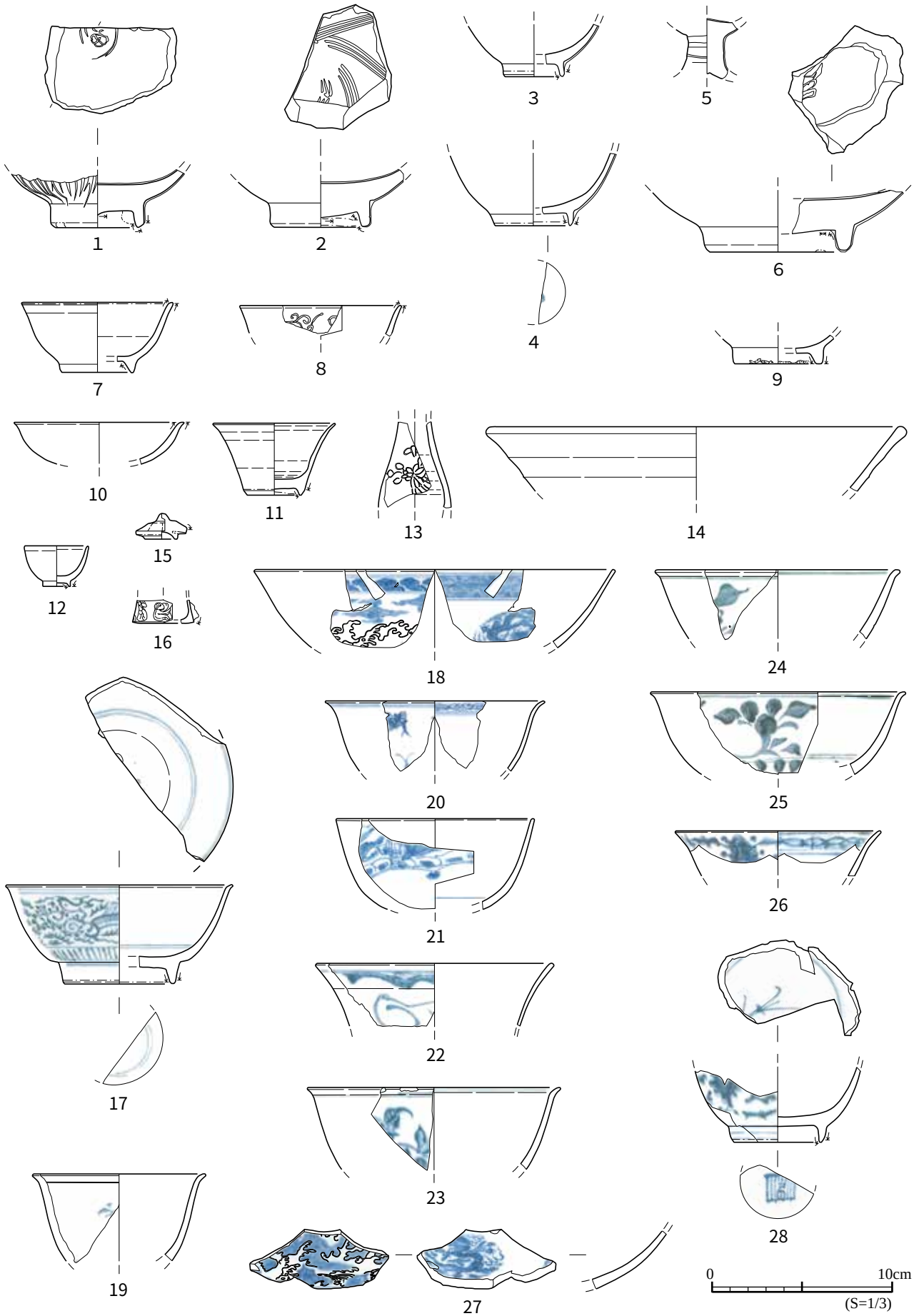
挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 45 図 図版 34	222	金属製品	角釘	―	12.6	1.25	―	完形の鉄釘。頭部平面形・軸部断面は長方形。頭部は軸部に比べやや広がるが、造り出しか叩いた際に潰れたものかは不明。重量 43.1g。	5 トレ Ⅰ層
第 45 図 図版 34	223	金属製品	容器	完形	2.15	2.65	6.3	喘息の薬の吸入器具のカートリッジ。アルミ製と思われる。重量 8.0g。	5 トレ 石牆 1 カイタイ
第 45 図 図版 34	224	金属製品	スプーン	―	16.6	4.0	0.15	持ち手背面に「CHROME」と刻まれている。持ち手側先端には花が描かれている。重量 20.2g。	5 トレ 石牆 1 カイタイ
第 45 図 図版 34	225	金属製品	認識票	―	4.55	1.8	0.13	日本軍の認識票。紐を通す長方形の孔が２つ窺える。漢数字で「垣四四〇一」「六五二三」「一〇」「二」と刻印されていることが確認できる。重量 9.8g。	不明
第 45 図 図版 35	226	円盤状製品	―	―	4.0	3.65	0.9	中国産青磁の袋物の胴部を利用。両面を剥離加工。龍泉窯系で 15c 前～ 15c 半。重量 20.4g。	9 トレ 庭園基盤 Ⅱ層
第 45 図 図版 35	227	円盤状製品	―	―	1.6	1.6	0.5	中国産色絵の碗か皿の胴部を利用。両面を剥離加工。徳化窯系で清代。重量 1.8g。	5 トレ Ⅲ層
第 45 図 図版 35	228	円盤状製品	―	―	1.8	1.75	0.2	中国産色絵の小碗か杯の胴部を利用。両面を剥離加工。景徳鎮窯系で清代。重量 1.2g。	5 トレ 石積み 4 土中
第 46 図 図版 35	229	円盤状製品	―	―	2.05	1.9	0.3	中国産青花碗の口縁部を利用。両面を剥離加工。徳化窯系で 18c。重量 1.9g。	8 トレ Ⅰ層
第 46 図 図版 35	230	円盤状製品	―	―	2.8	2.7	0.4	中国産青花皿の胴部を利用。両面を剥離加工。重量 4.3g。	8 トレ Ⅰ層
第 46 図 図版 35	231	円盤状製品	―	―	3.4	3.3	1.1	沖縄産無釉陶器の擂鉢胴部を利用。両面を剥離加工。重量 15.5g。	8 トレ 石牆 1 Ⅰ層
第 46 図 図版 35	232	円盤状製品	―	―	4.8	4.7	0.7	沖縄産施釉陶器の底部を利用。両面を剥離加工。重量 32.6g。	8 トレ Ⅰ層
第 46 図 図版 35	233	円盤状製品	―	―	2.55	2.35	0.4	陶質土器の胴部を利用。両面を剥離加工か。重量 2.5g。	8 トレ 溜池 2 Ⅰ層
第 46 図 図版 35	234	円盤状製品	―	―	3.8	3.75	1.1	明朝系瓦を利用。赤色。両面を剥離加工。重量 19.7g。	8 トレ Ⅲ a 層
第 46 図 図版 35	235	円盤状製品	―	―	8.3	8.2	1.8	明朝系瓦を利用。褐色。両面を剥離加工か。重量 146.3g。	8 トレ 石牆 1 Ⅰ層
第 46 図 図版 35	236	円盤状製品	―	―	4.4	4.3	1.0	初期沖縄産無釉陶器の胴部を利用。両面を剥離加工。重量 26.4g。	8 トレ Ⅰ層
第 46 図 図版 35	237	円盤状製品	―	―	3.95	3.65	0.9	細粒砂岩（ニービ）を利用。両面を剥離加工か。重量 16.8g。	不明
第 46 図 図版 35	238	円盤状製品	―	―	2.60	2.45	0.30	薄緑色のガラス製品を利用。両面を剥離加工か。重量 3.7g。	4 トレ Ⅱ層
第 46 図 図版 35	239	骨製品	人形	手	3.6	2.6	2.6	人形の左手部分か。全体的に磨かれ光沢があり、指の皺や手相も表現されている。人差し指付け根部分に孔穿つ。腕と接続部に穴が開き、指先端部には溝を施す。重量 5.2g。	5 トレ Ⅰ層
第 46 図 図版 35	240	土製品	土人形	―	3.1	2.9	1.5	菅原道真をかたどった天神人形。頭頂から底面にかけて側面にバリ残る。底面に径約 2.5 ㎜の串を刺したと考えられる孔３つあり。重量 8.1g。	6 トレ Ⅱ層
第 46 図 図版 35	241	ガラス製品	おはじき	―	2.0	1.85	0.35	白ガラスに朱色がマーブル状に混じる。やや歪な円形。溶かしたガラスを帯状に広げて折りたたむように成形か。片面に手のひらのような柄が模られている。重量 1.7g。	12 トレ Ⅰ層
図版 35	242	ガラス製品	清涼飲料瓶	―	2.6	5.5	22.2	「ファンタ」の瓶。1958 年～ 1972 年頃の物か。ロゴの下にも白色で文字が見えるが不明瞭。なで肩で下半部は蛇腹状を呈している。250ml 用。	12 トレ Ⅰ層
図版 35	243	ガラス製品	酒瓶	―	2.6	5.9	20.3	茶色透明で全体的にやや銀化している。肩部に「オリオンビール」「ORION（ロゴ）BEER」のエンボス。いかり肩で、底部は僅かに窄まる。口にはビニール製の封が残る。	12 トレ Ⅰ層
第 46 図 図版 35	244	ガラス玉	―	―	最大径 0.46	―	0.33	黄色。側面観はやや横長楕円形。横位に一部欠けが見られる。孔径 0.98 ㎜。重量 0.1g。	5 トレ Ⅰ層
第 46 図 図版 35	245	ガラス玉	―	―	最大径 0.5	―	0.35	青色半透明。側面観は横長楕円形。横位に巻き付け成形時の筋が入る。風化により一部に白色の皮膜が覆う。孔径 1.22 ㎜。重量 0.1g。	4 トレ Ⅰ層

第３表　遺物観察一覧 11

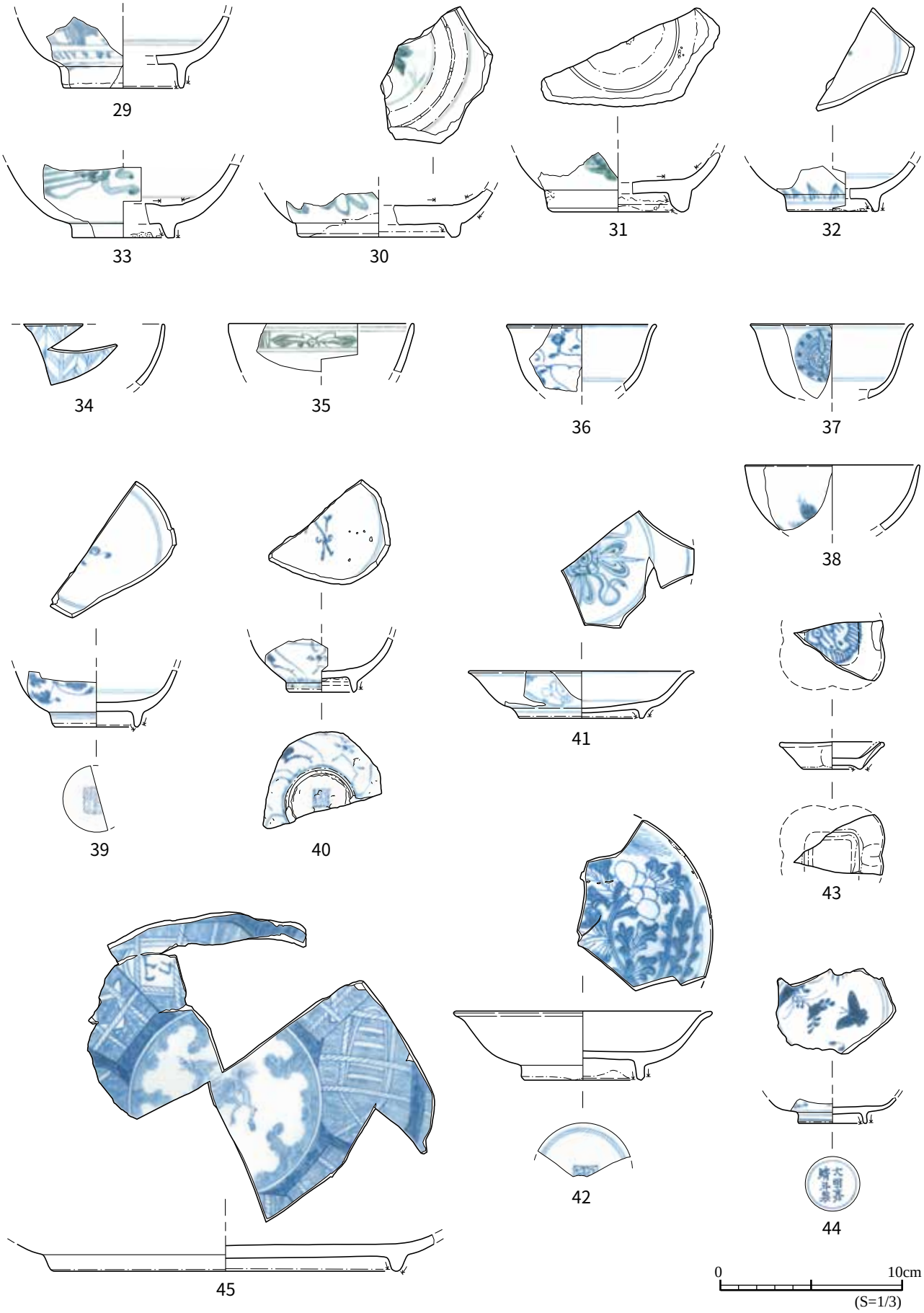
挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 46 図 図版 35	246	ガラス玉	―	―	最大径 0.4	―	0.35	青緑色。側面観はやや横長楕円形。孔の内側に白化が見られる。孔径 1.13 ㎜。重量 0.1g。	４トレ Ⅰ層
第 47 図 図版 36	247	石製品	硯	―	―	―	1.1	黒色粘板岩製。両面共に縁部は削れて無くなっている。硯背側に「兵衛」の文字。横断面の裏面形態は浅く湾曲して窪んでいる。重量 40.7g。	５トレ Ⅰ層
第 47 図 図版 36	248	石製品	蓋物 の身	口	9.2	―	―	蓋受け有り。外面同部に網状の文様。蝋石か。既報告の石製皿（沖縄県立埋蔵文化財センター 2012）に類似する石材。重量 5.4g。	９トレ Ⅰ層
第 47 図 図版 36	249	石製品	角皿	口	―	―	―	同様の遺物を石製容器として報告（沖縄県立埋蔵文化財センター 2011）。口唇部に花唐草文。外面、内面に梅花唐草文。重量 21.0g。	４トレ Ⅰ層
第 47 図 図版 36	250	明朝系瓦	丸瓦	玉縁～ 端	29.9	―	1.9	赤色。玉縁部に自然釉。玉縁部 4.0 ㎝。	８トレ 溜池２ Ⅰ層
第 47 図 図版 36	251	明朝系瓦	丸瓦	玉縁～ 端	29.8	16.2	1.8	赤色。凸面は工具により面取られ、筒部外周に漆喰が付着。玉縁部は横方向の撫でにより凹線が見られる。凹面筒部端は指撫で。玉縁裏は工具により面取られている。玉縁部 4.1 ㎝。	６トレ Ⅰ層
第 48 図 図版 36	252	明朝系瓦	丸瓦	玉縁	―	―	1.9	赤色。ヘラ記号あり。胴部と段部の境に帯状に漆喰が付着。玉縁部 4.1 ㎝。	12 トレ Ⅰ層
第 48 図 図版 36	253	明朝系瓦	丸瓦	玉縁	―	―	1.8	赤色。ヘラ記号あり。胴部と割れ目に漆喰付着。玉縁部 5.5 ㎝。	12 トレ 円形石組 ２
第 48 図 図版 36	254	明朝系瓦	丸瓦	玉縁	―	14.1	1.55	筒部にスタンプあり。玉縁部に僅かに自然釉あり。玉縁部 4.4 ㎝。	８トレ 溜池２ Ⅰ層
第 48 図 図版 37	255	明朝系瓦	軒丸瓦	瓦当	瓦当径 15.8	―	2.3	赤色。瓦当に横位の木目。瓦当裏に半円状の指ナデ痕。筒部側面に漆喰付着。	６トレ Ⅰ層
第 49 図 図版 37	256	明朝系瓦	軒平瓦	瓦当～ 狭端	瓦当長軸 10.9	弦幅 23.7	2.3	赤色。瓦当の上縁や、瓦当と凹面の接合に丁寧な指ナデ痕。花弁左に横位の木目。	６トレ Ⅰ層
第 49 図 図版 37	257	明朝系瓦	平瓦	広端～ 狭端	23.5	―	2.1	赤色。凸面狭端部にやや粗いナデ調整痕。凹面中央から狭端部にかけて漆喰付着、広端部に浅い桶紐綴り圧痕が７つ残存。	４トレ Ⅰ層
第 49 図 図版 38	258	近代大和瓦	万十 軒平瓦	瓦当	―	―	2.1	灰色。滑らかでやや光沢のある器面。巴部分の直径は 8.1 ㎝。巴部には漆喰が付着している。	７トレ Ⅰ層
第 49 図 図版 38	259	近代大和瓦	桟瓦	端～端 (曲面)	22.5	―	1.9	灰色で燻し銀を呈する。胎土に濃い灰色粒を少し含む。曲面部分に帯状に漆喰が付着。	７トレ 庭園基盤 Ⅰ層
第 50 図 図版 38	260	近代大和瓦	桟瓦	端～ 側面	―	―	1.85	灰色。８条１組の櫛描き沈線が４組ひかれている。端部は滑らかで光沢があるが側面部はザラザラしており白粒の混入が見える。凹面は漆喰が付着しており、端部は細長く面取られている。	７トレ Ⅰ層
第 50 図 図版 38	261	近代大和瓦	平瓦	端～ 側面	―	―	1.75	灰色で燻し銀を呈する。胎土に濃い灰色粒をわずかに含む。端部に不明瞭だが「〇石 濵田」のスタンプ。	４トレ Ⅰ層
第 50 図 図版 38	262	近代大和瓦	平瓦	端	―	―	1.7	やや褐色で燻し銀を呈する。凹面に櫛目。胎土に赤色粒と灰色のスジを多く含む。	９トレ 庭園基盤 Ⅱ層
第 50 図 図版 38	263	近代大和瓦	平瓦	端	―	―	1.9	灰色。燻し銀を呈する。胎土に白色粒、黒色粒を僅かに含む。凹面には櫛描き沈線が引かれており、端部の角は面取られている。	７トレ 庭園基盤 Ⅰ層
第 50 図 図版 38	264	近代大和瓦	役瓦	―	―	―	2.0	灰色。燻し銀を呈する。胎土に白色粒、灰色粒、赤色粒を含む。裏面に指撫で痕あり。表面には文様が見られるが、残存が僅かなため判然としない。端部には漆喰が付着している。	７トレ 溜池２ Ⅱ層
図版 38	265	近代大和瓦	軒平瓦	瓦当	―	―	―	灰色。燻し銀を呈する。胎土に赤色粒、黒色粒、石英を少し含む。形状から軒平瓦とした。「明石 瓦良」と思われるスタンプあり。	７トレ Ⅰ層
図版 39	266	近現代瓦	引掛け 瓦	上端	―	―	2.0	赤色。桟瓦状の曲面あり。上端部と右側面に漆喰付着。	４トレ Ⅰ層
図版 39	267	近現代瓦	引掛け 瓦	下端	―	―	1.8	赤色。外面に瓦を引掛けたと考えられる突起１つ、下部には粘土シワあり。内面に指ナデ痕、下部には横位に漆喰付着。下端部にはめ込むためと思われる突起あり。	４トレ Ⅰ層
図版 39	268	近現代瓦	引掛け 瓦	下端	―	―	2.2	赤色。外面に瓦を引掛けたと考えられる突起２つ、下部には粘土シワあり。内面に指ナデ痕、縦位と横位に漆喰付着。下端部にはめ込むためと思われる突起あり。	４・６トレ Ⅰ層
第 50 図 図版 39	269	塼	―	―	25.0	24.4	3.4	赤色。正方形の平面敷きタイプ。表面は丁寧に仕上げられ、裏面は凹凸が多い。	４トレ Ⅰ層

第３表　遺物観察一覧 12

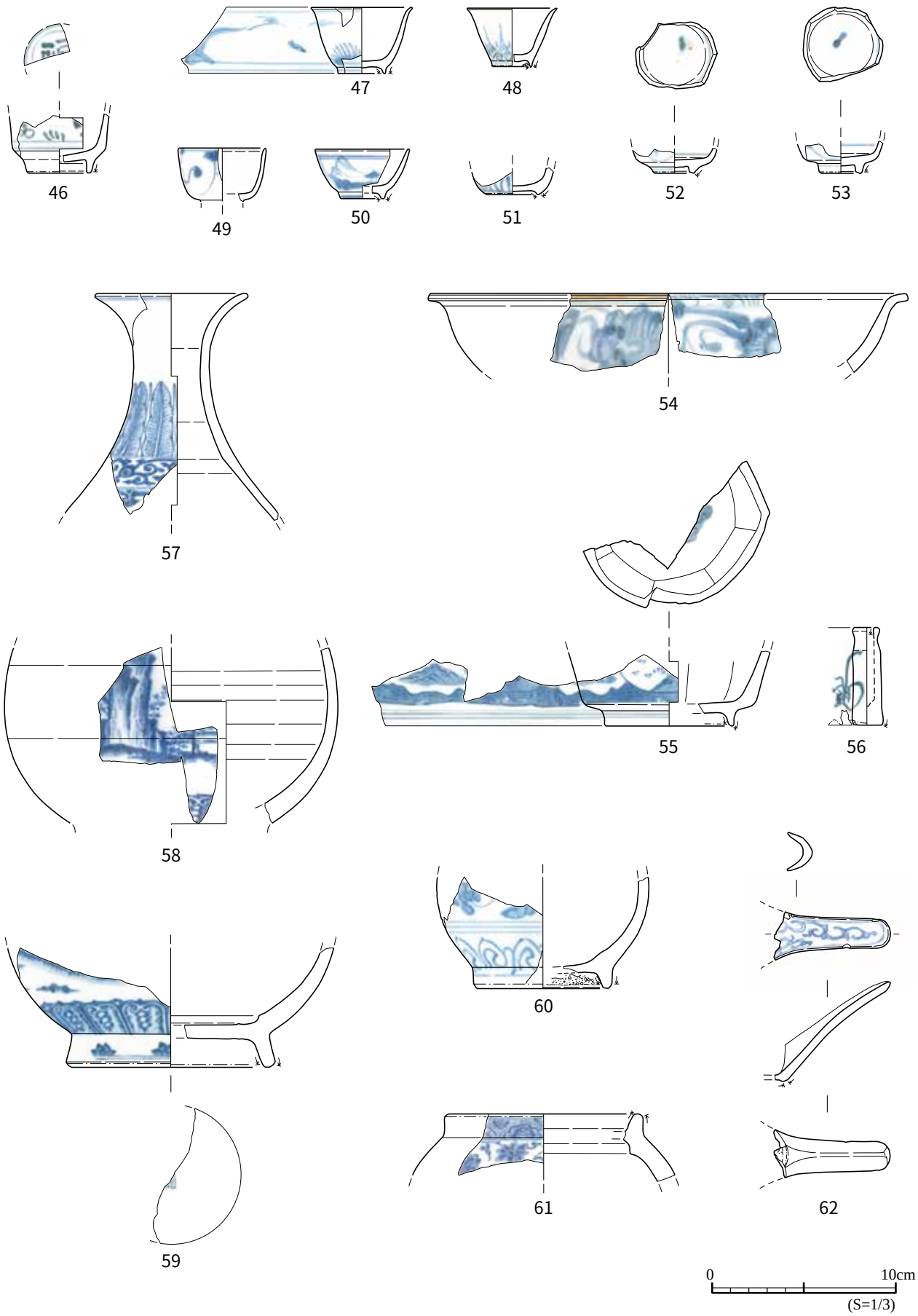
挿図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第 51 図 図版 40	270	銭貨	―	―	外径 2.50	孔径 0.59	0.14	唐國通宝（南唐・959 年）。錆化と摩耗により文字はかなり不明瞭だが、書体は篆書。重量 3.7g。	6 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	271	銭貨	―	―	外径 1.94	孔径 0.58	0.07	乾隆通宝（清、1736 年）。全体的に摩耗し、銭文は判読し難い。重量 1.0g。	5 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	272	銭貨	―	―	外径 1.82	孔径 0.51	0.05	嘉慶通宝（清、1796 年）。全体的に摩耗し、銭文は判読し難い。重量 1.1g。	5 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	273	銭貨	―	―	外径 2.42	孔径 0.53	0.09	寛永通宝。古寛永（Ⅰ期、日本、初鋳年 1636 年）。残存状態は良好。重量 3.1g。	12 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	274	銭貨	―	―	外径 2.36	孔径 0.54	0.09	寛永通宝。古寛永（Ⅰ期、日本、初鋳年 1636 年）。摩耗しており、銭文はやや不明瞭。重量 2.7g。	5 トレ Ⅱ層
第 51 図 図版 40	275	銭貨	―	―	外径 2.47	孔径 0.61	0.09	寛永通宝。新寛永（Ⅲ期、日本、初鋳年 1697 年）。「永」と「寛」の間に摩耗と考えられる１㎜の穴あり。重量 3.3g。	12 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	276	銭貨	―	―	外径 2.43	孔径 0.57	0.11	寛永通宝。新寛永（Ⅲ期、日本、初鋳年 1697 年）。重量 3.4g。	12 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	277	銭貨	―	―	外径 2.35	孔径 0.47	0.12	世高通宝（琉球、初鋳年 1461 年）。「世」の部分が湾曲している。重量 3.3g。	6 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	278	銭貨	―	―	外径 1.17	孔径 0.72	0.05	鳩目銭。バリが残っている。重量 0.2g。	12 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	279	銭貨	―	―	外径 2.05	孔径 0.62	0.06	無文銭。重量 1.7g。	8 トレ 溜池２ Ⅱ層
第 51 図 図版 40	280	銭貨	―	―	外径 1.94	孔径 0.66	0.01	無文銭。重量 1.2g。	12 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	281	銭貨	―	―	外径 2.15	孔径 ―	0.3	雁首銭。錆化しており、中央の孔も錆で埋まっている。重量 3.4g。	5 トレ Ⅰ層
第 51 図 図版 40	282	銭貨	―	―	外径 2.27	孔径 ―	0.09	一銭銅貨。「大正十年」の銘あり。重量 3.7g。	8 トレ 溜池２ Ⅱ層
第 51 図 図版 40	283	銭貨	―	―	外径 1.93	孔径 ―	0.16	１セント。1953 年製。ペンダントに加工していたと思われる 2.3 ㎜の孔が開けられている。赤いインクのような汚れが付着。重量 3.1g。	4 トレ Ⅱ層
第 51 図 図版 40	284	銭貨	―	―	外径 1.91	孔径 ―	0.15	１セント。1964 年製。錆は見られるものの、文字は読み取れる。重量 3.1g。	5 トレ Ⅰ層



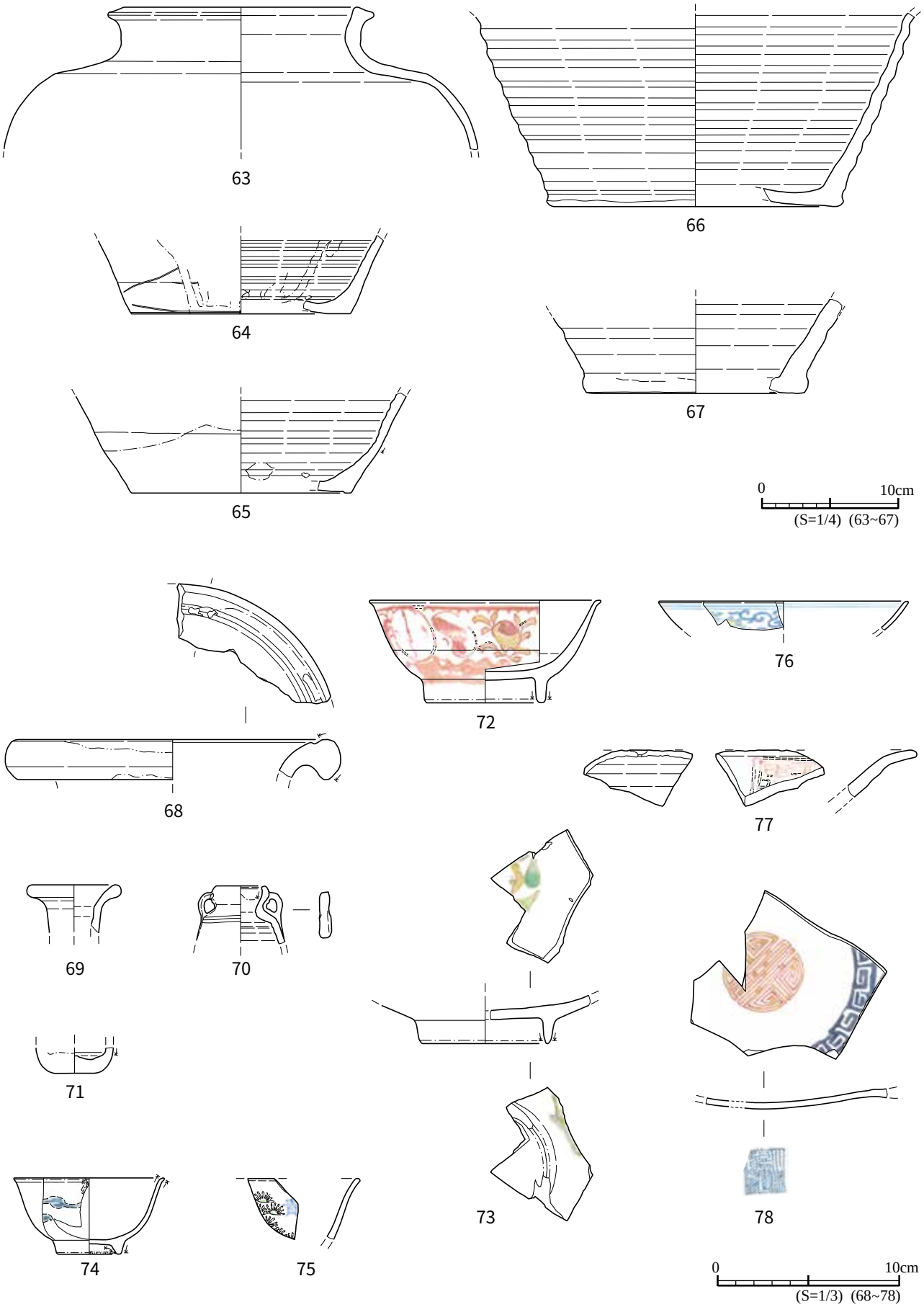
第 30 図　中国産青磁、中国産白磁、中国産青花１



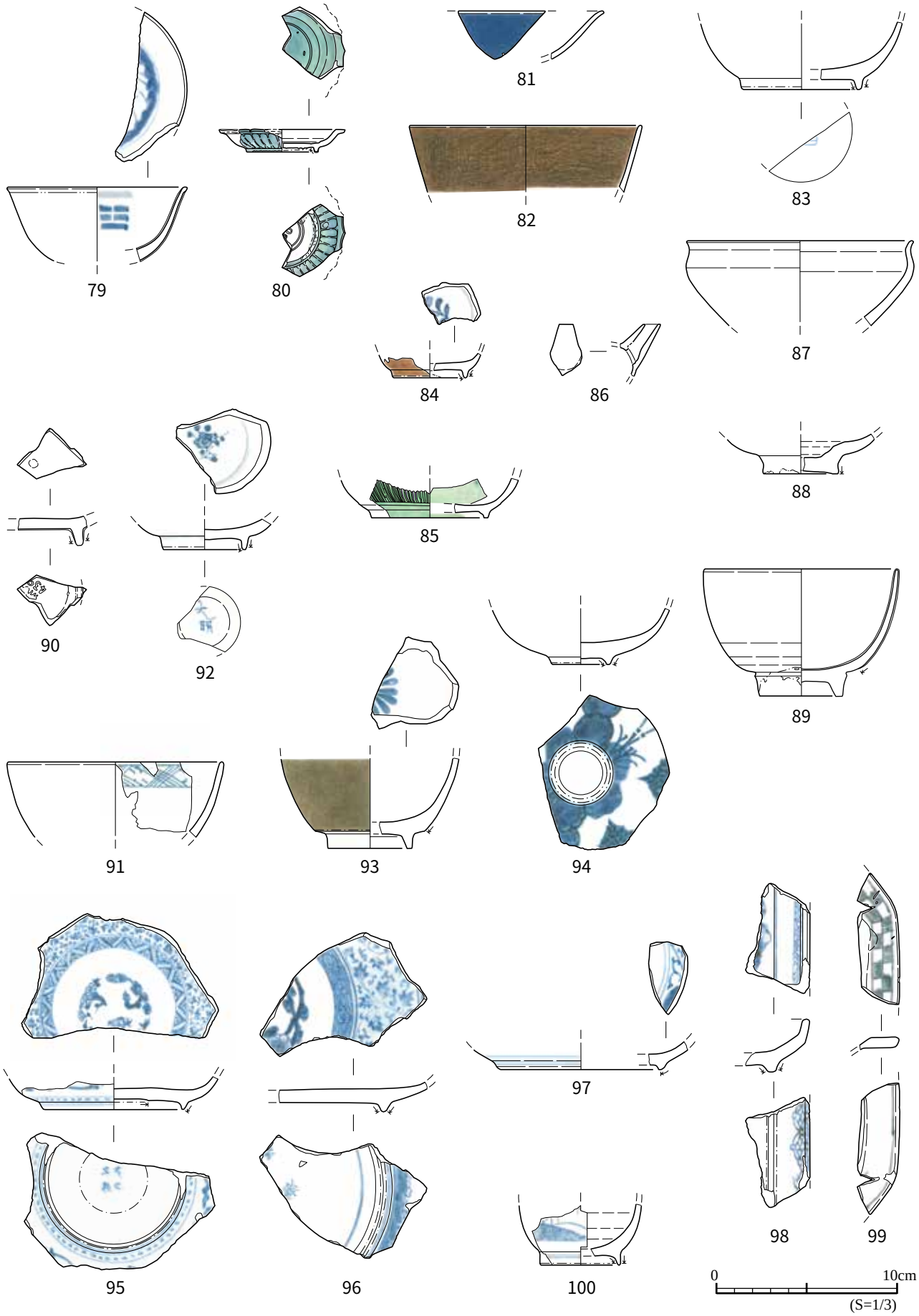
第 31 図　中国産青花２



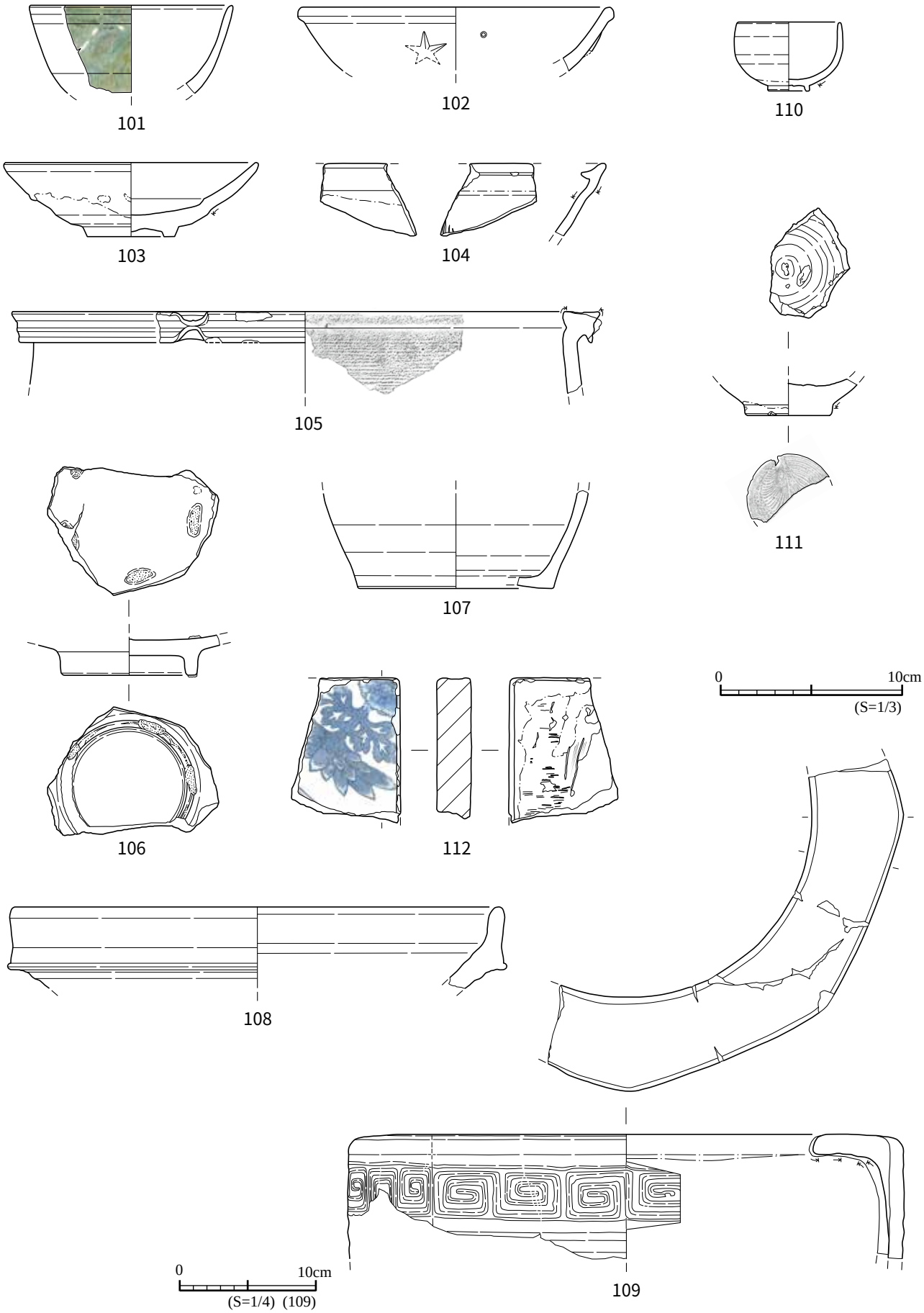
第 32 図　中国産青花３



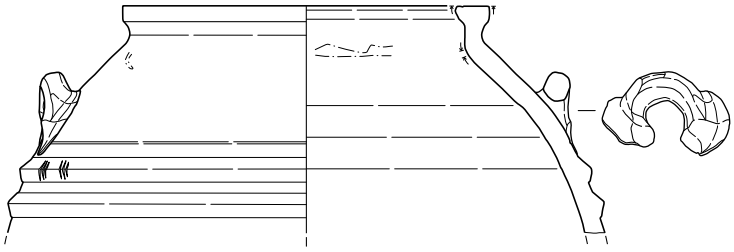
第 33 図　中国・タイ産褐釉陶器、その他の輸入陶磁器１



第 34 図　その他の輸入陶磁器２、本土産陶磁器１

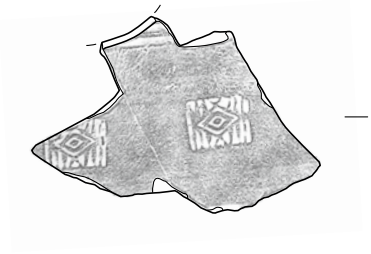


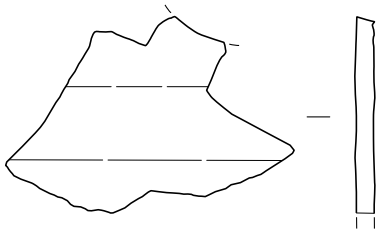
第 35 図　本土産陶磁器２



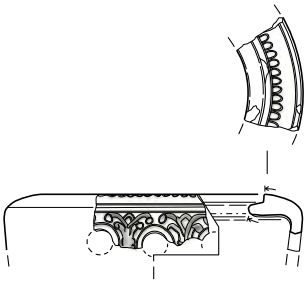
113

0　10cm
(S=1/4)　(113)

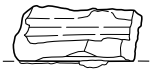




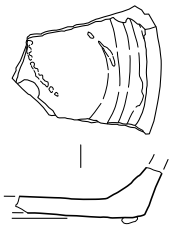
114

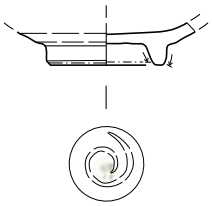


115

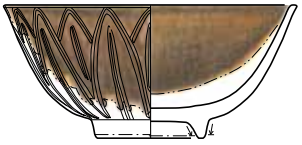


116

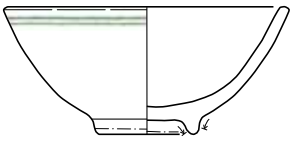




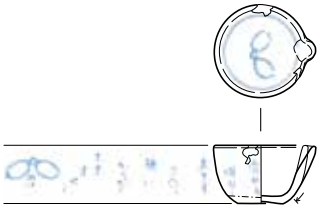
117



118



119



121

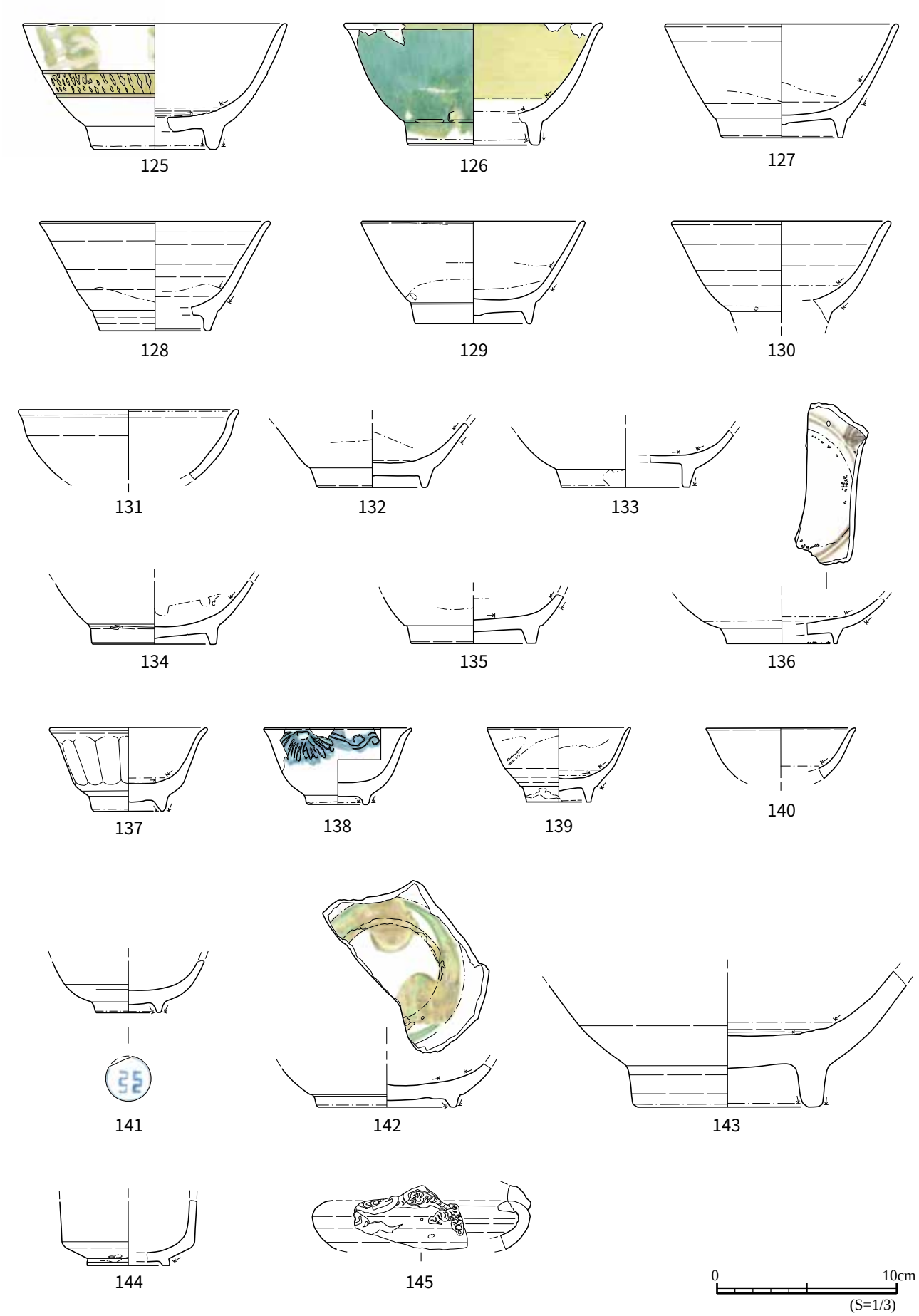
123

120

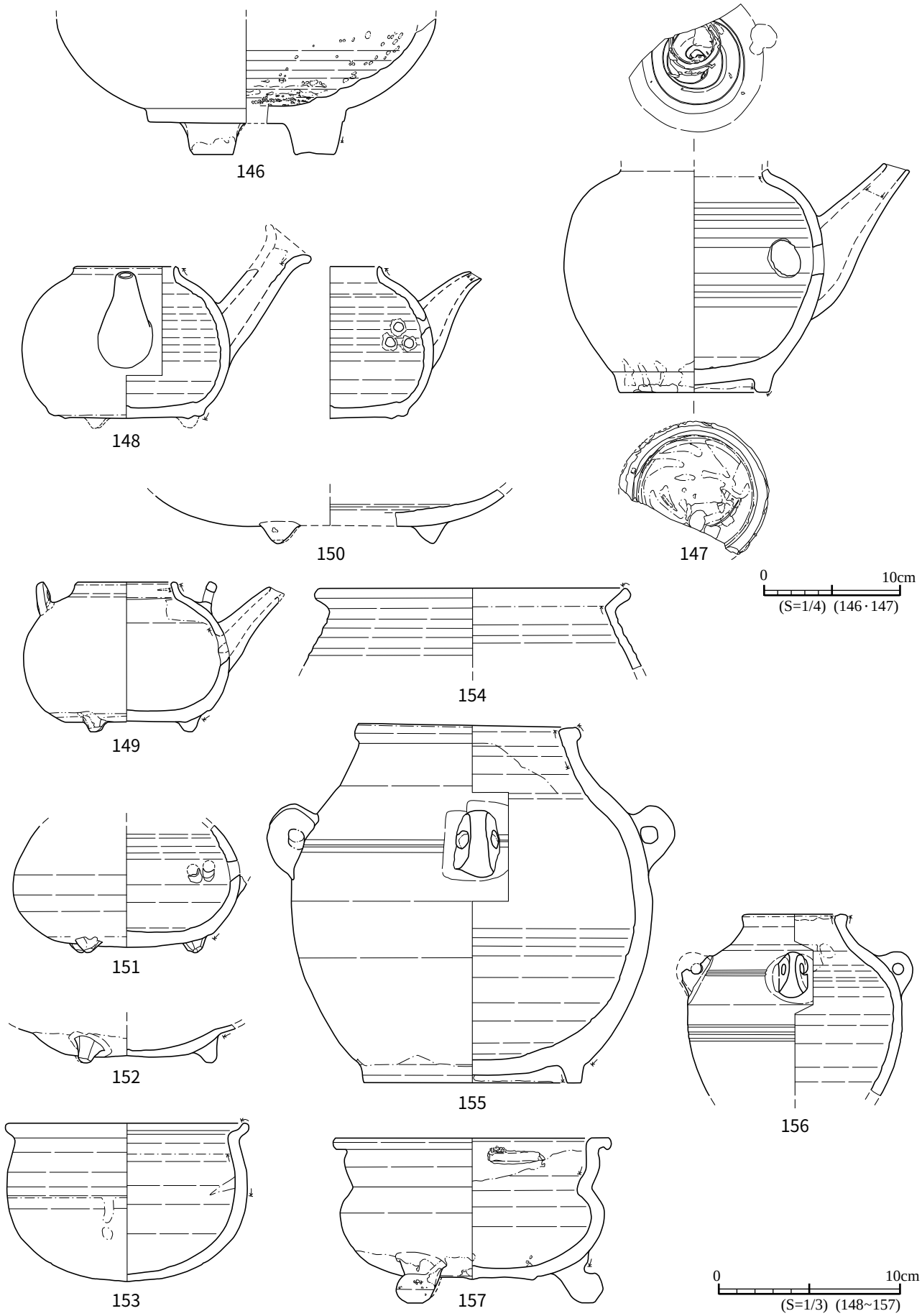
122

0　10cm
(S=1/3)

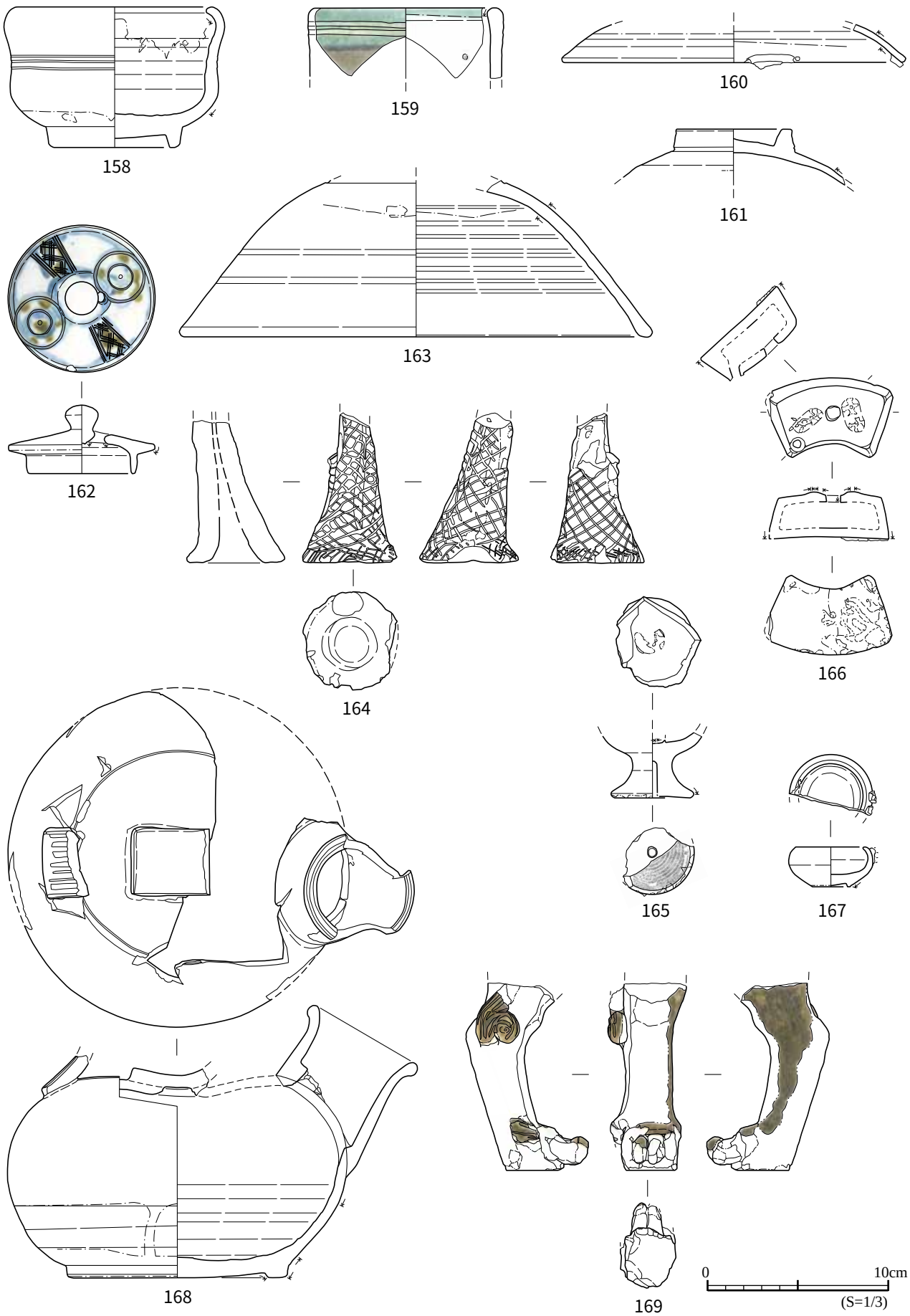
第 36 図　本土産陶磁器３



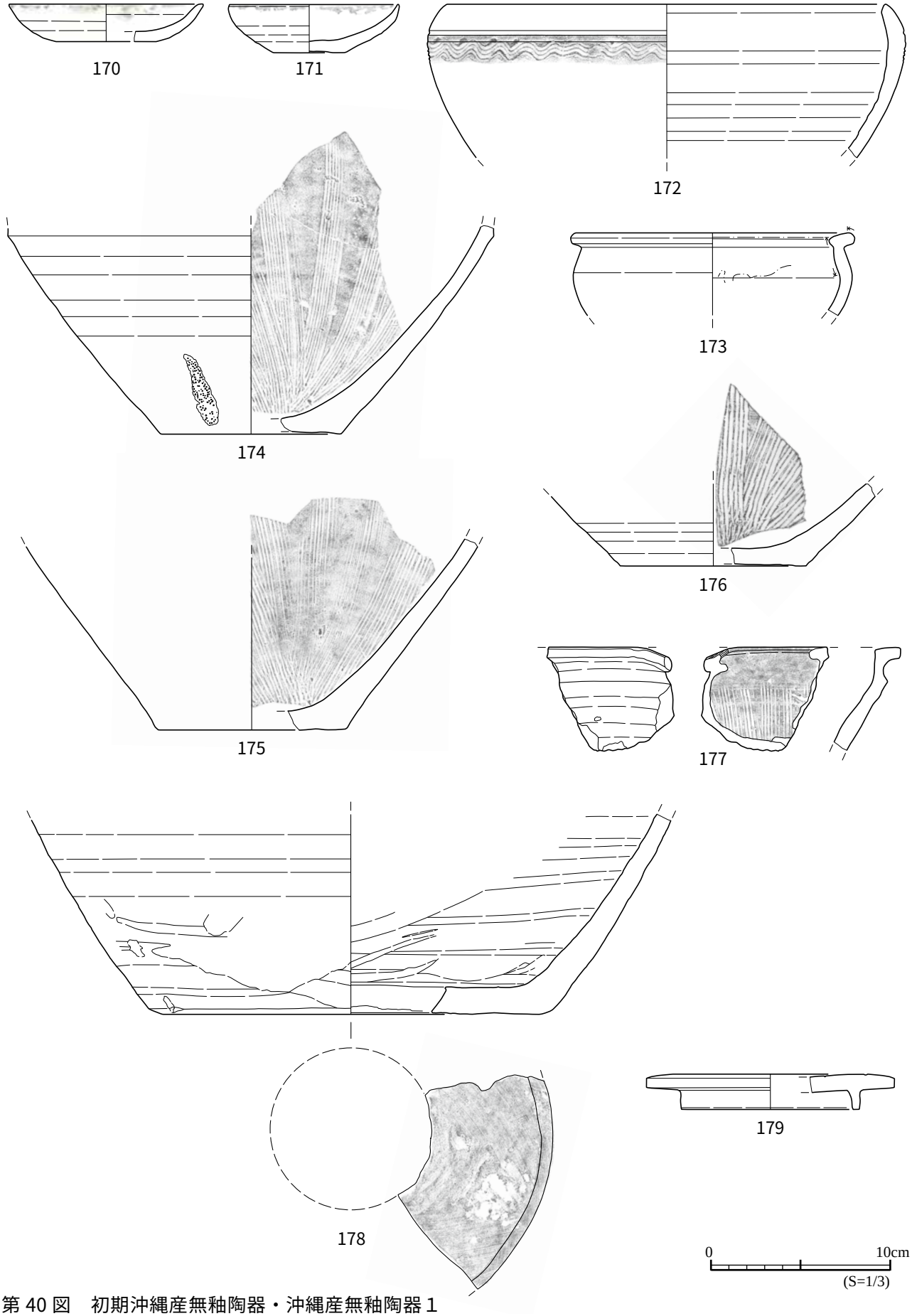
第 37 図　沖縄産施釉陶器１



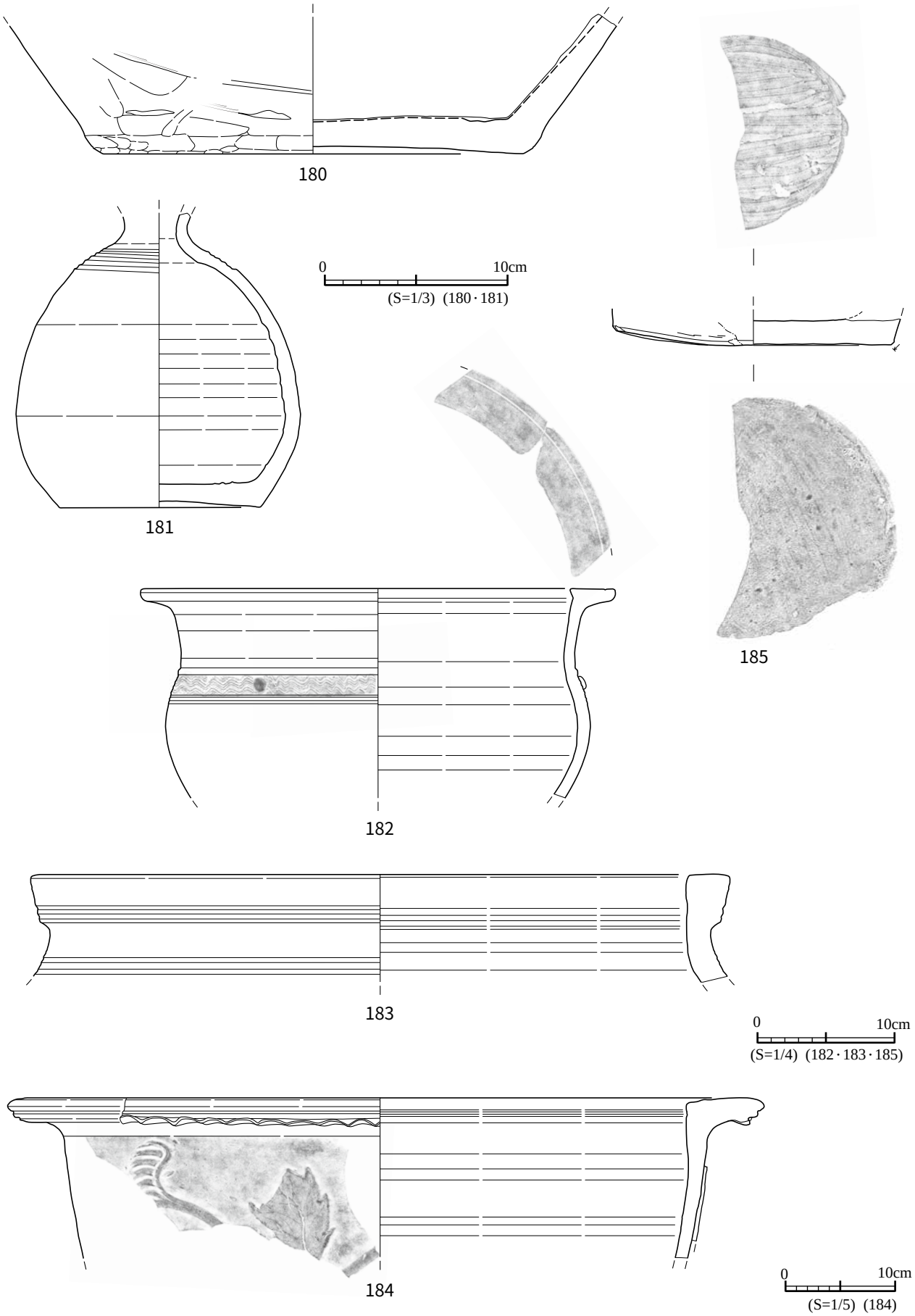
第 38 図　沖縄産施釉陶器２



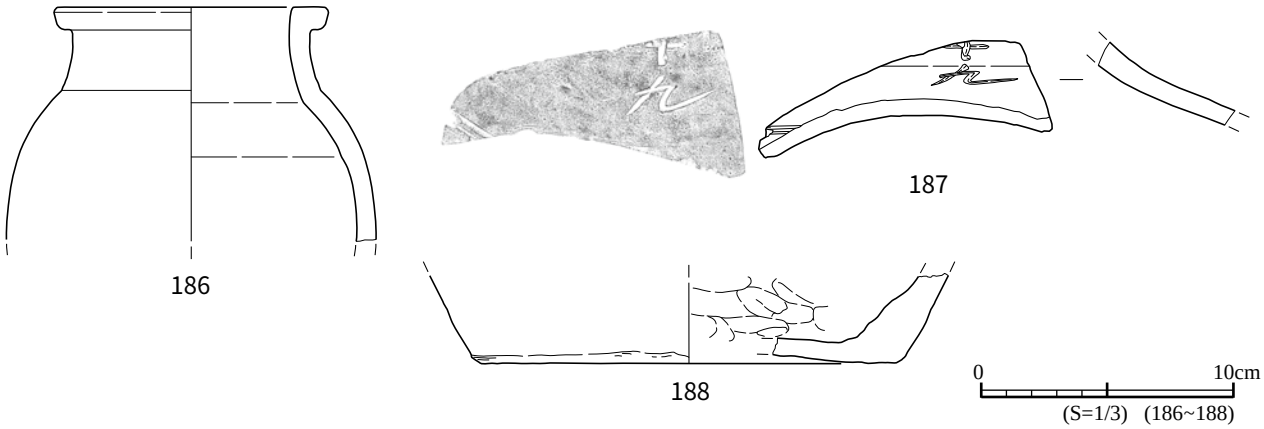
第 39 図　沖縄産施釉陶器３

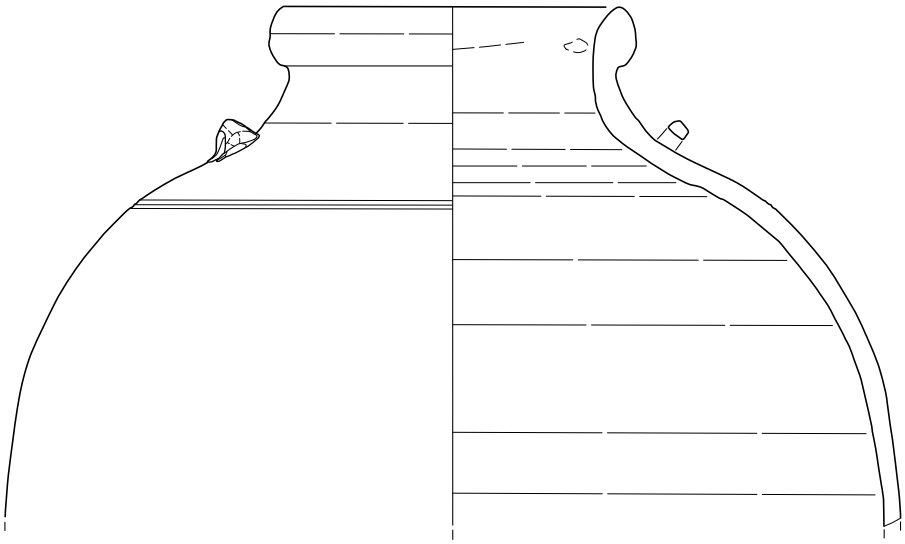


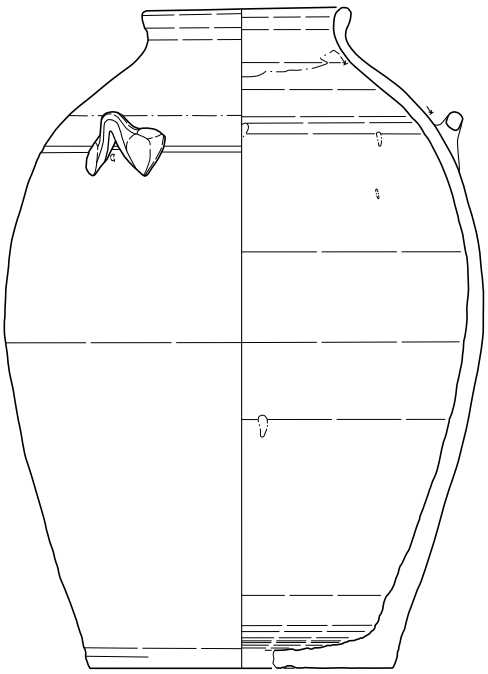
第 40 図　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器１



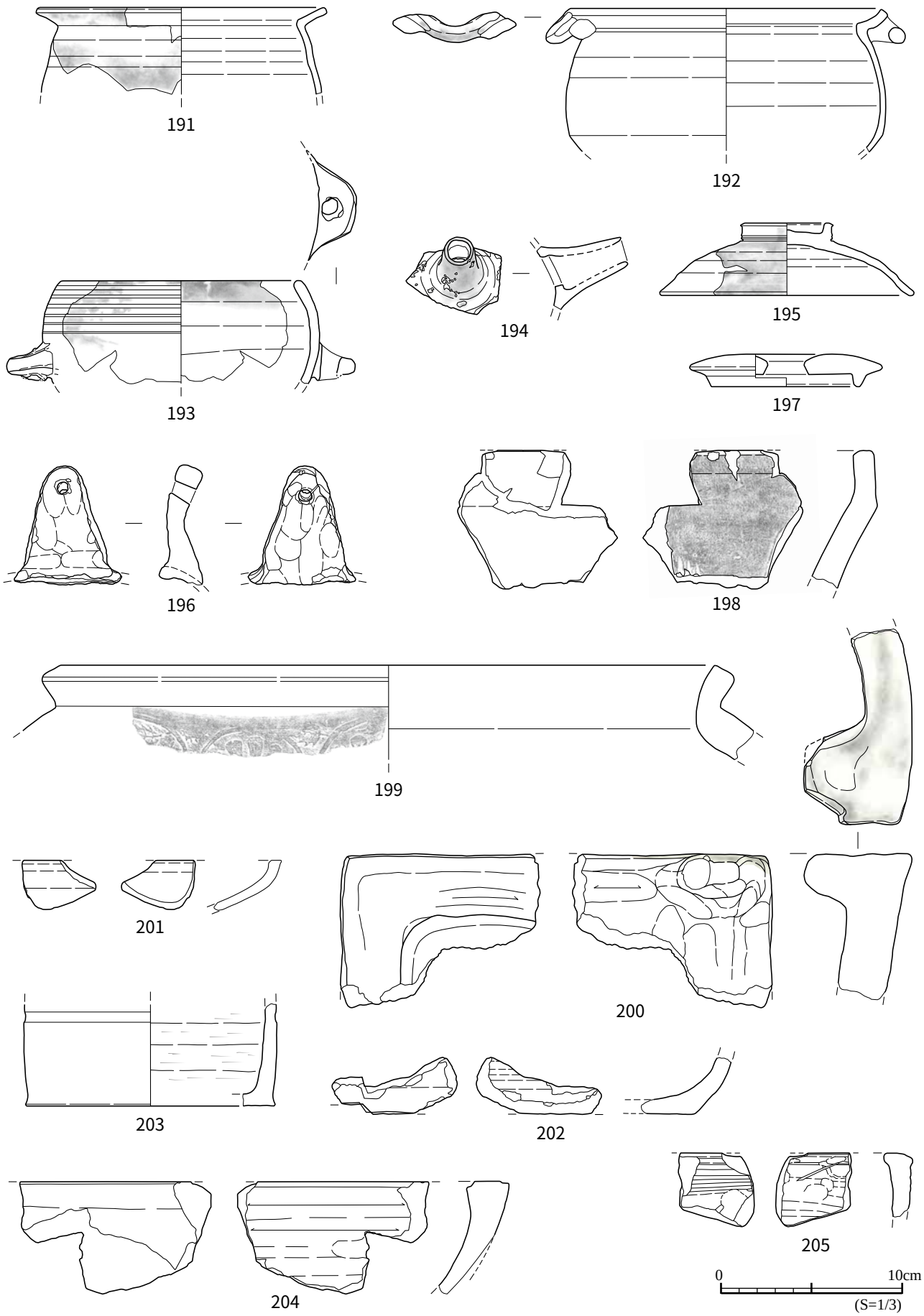
第 41 図　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器２



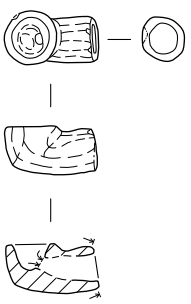


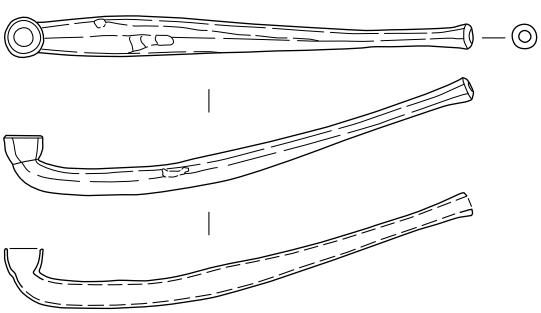


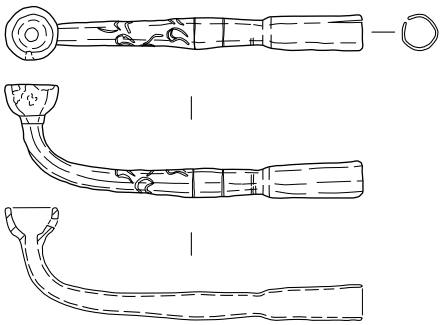
第 42 図　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器３

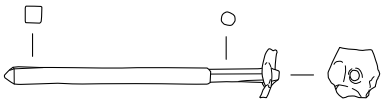


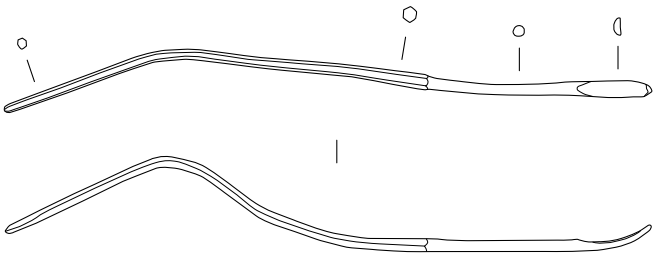
第 43 図　陶質土器、瓦質土器、土器

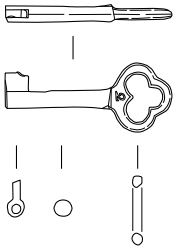


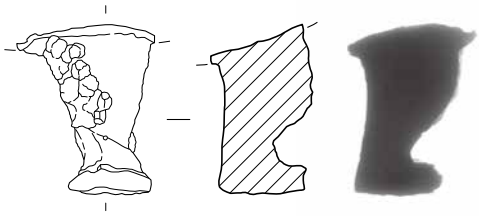


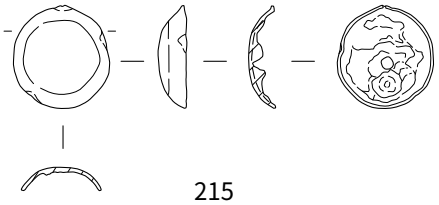


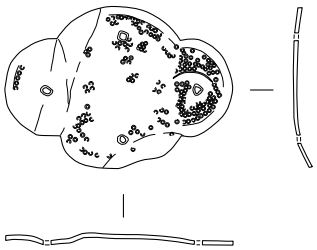


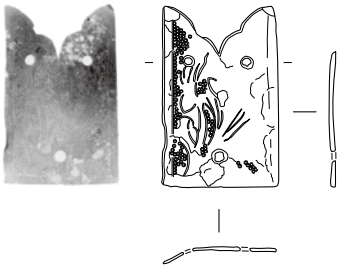


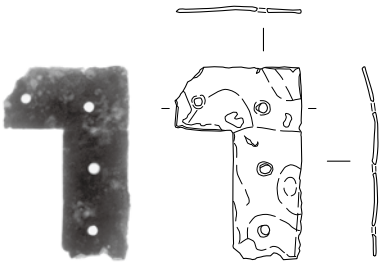




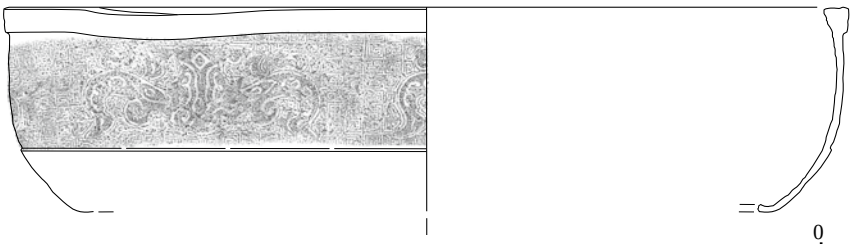






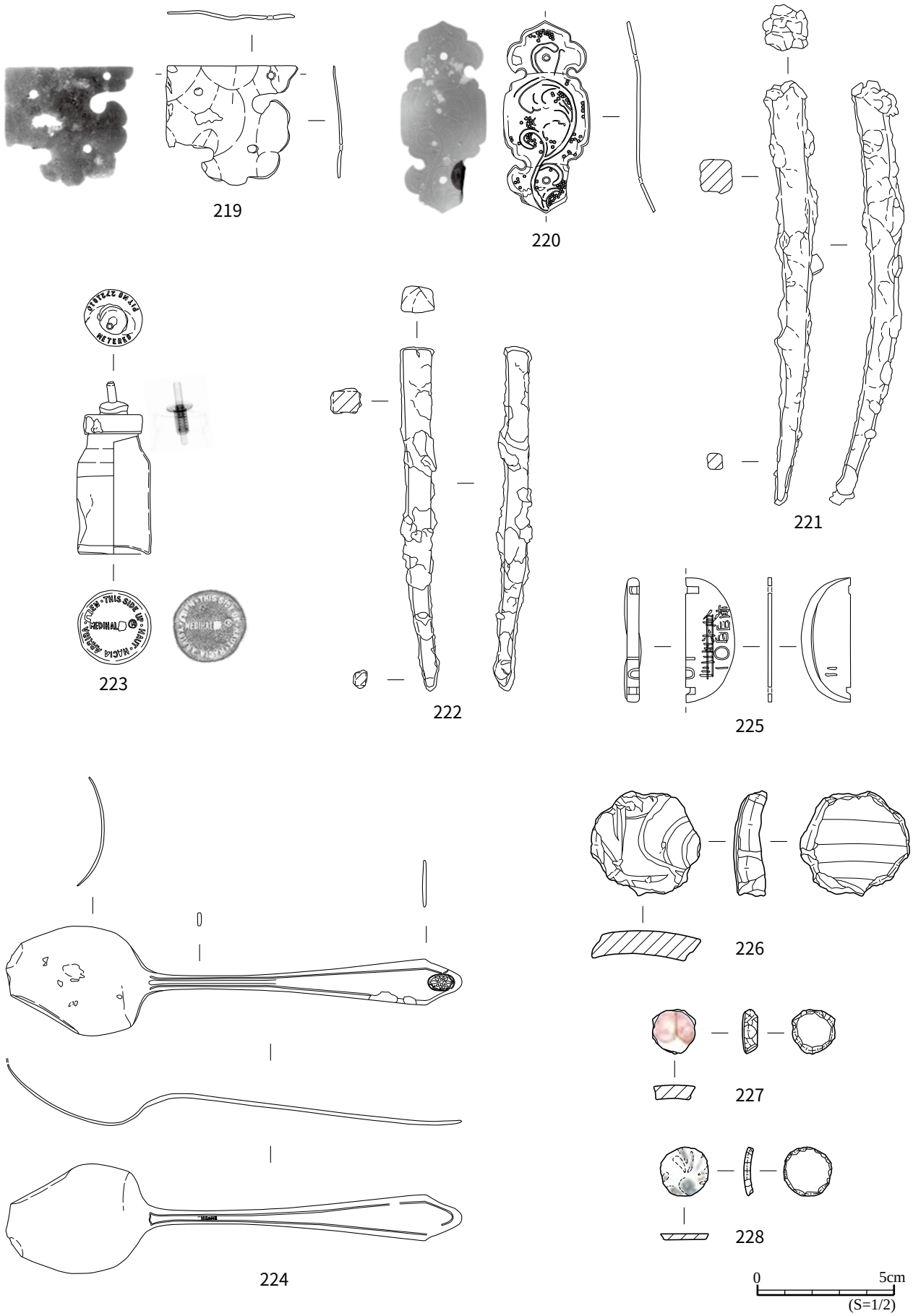


0　5cm
(S=1/2)　(206~212,214~218)

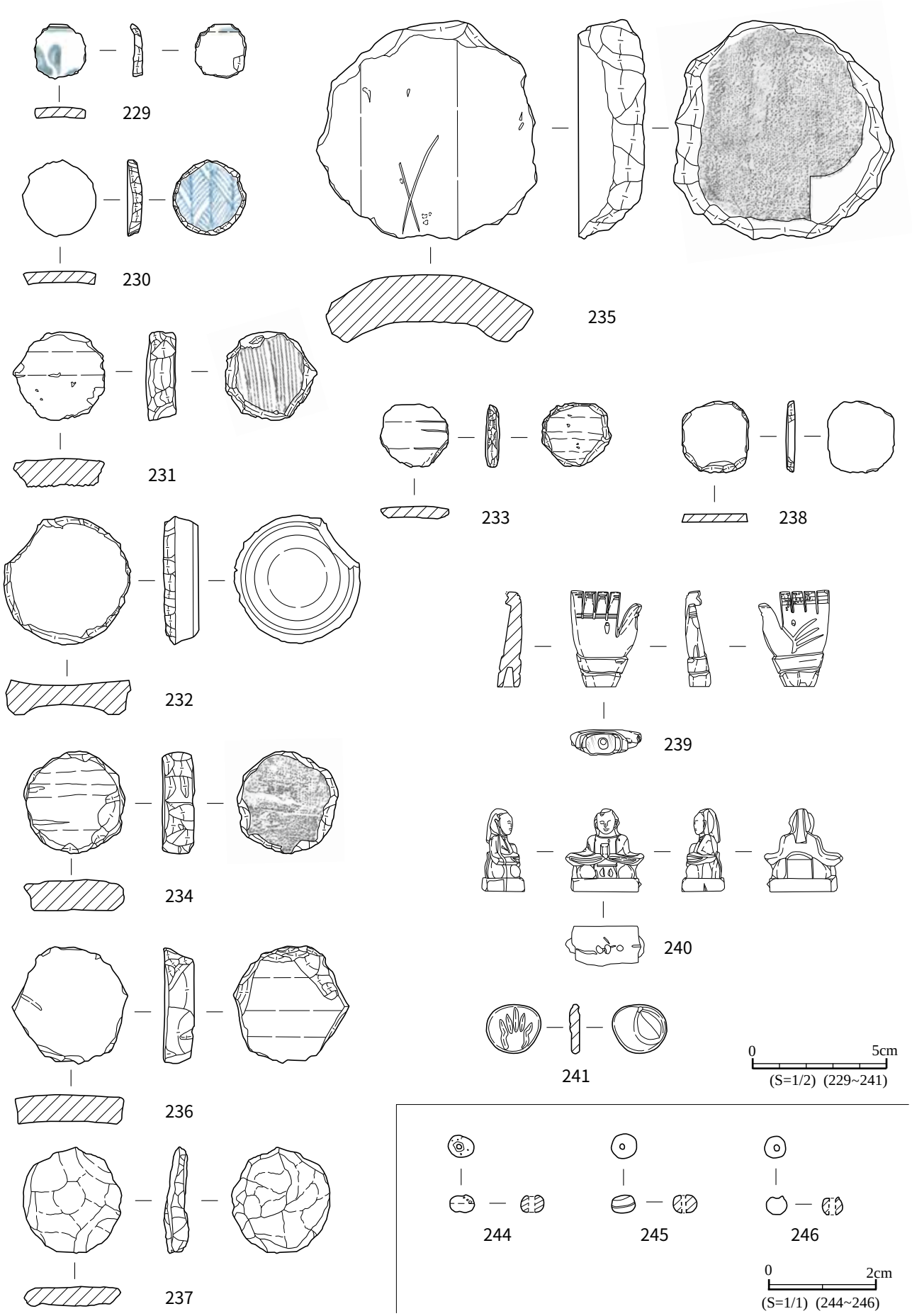


0　10cm
(S=1/3)　(213)

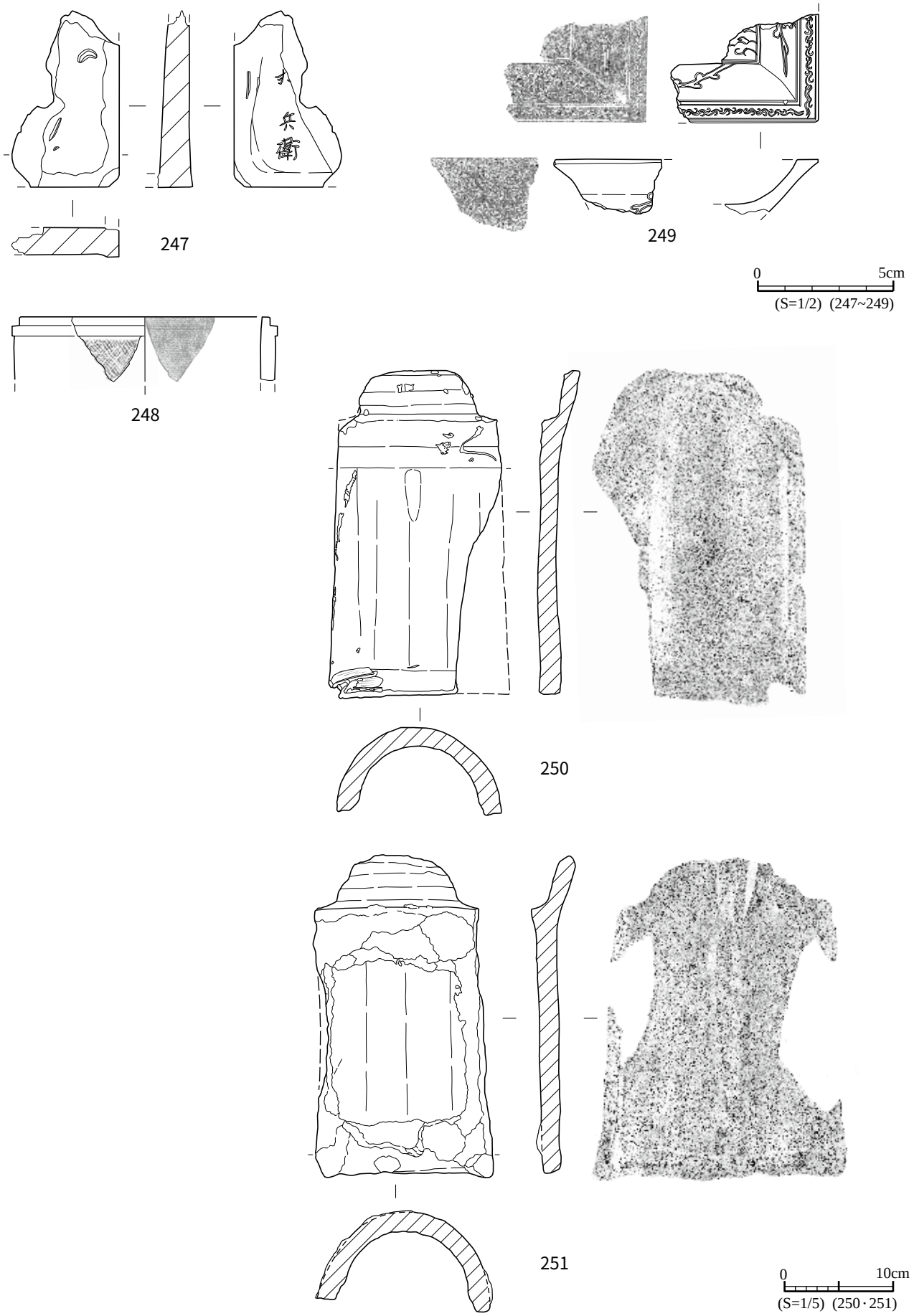
第 44 図　煙管、金属製品１



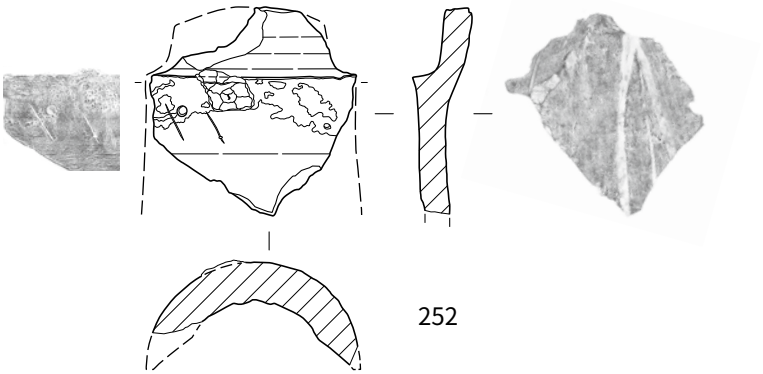
第 45 図　金属製品２、円盤状製品１



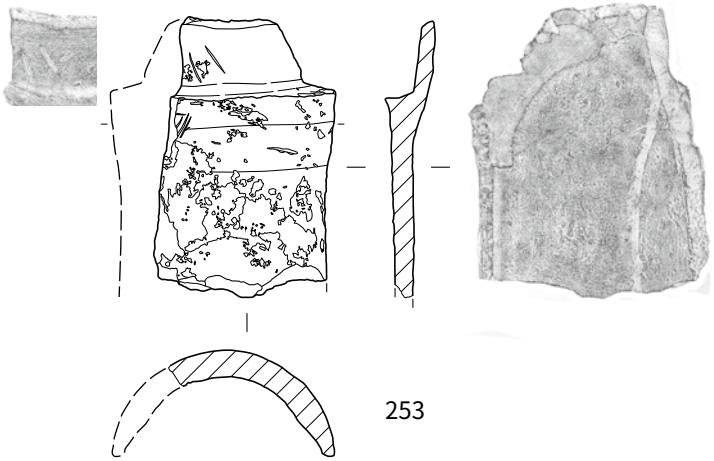
第 46 図　円盤状製品２、骨製品、土製品、ガラス製品、ガラス玉



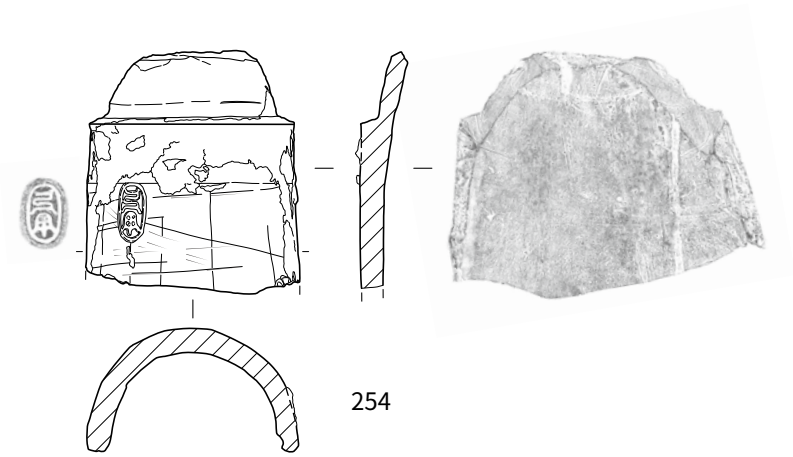
第 47 図　石製品、瓦１



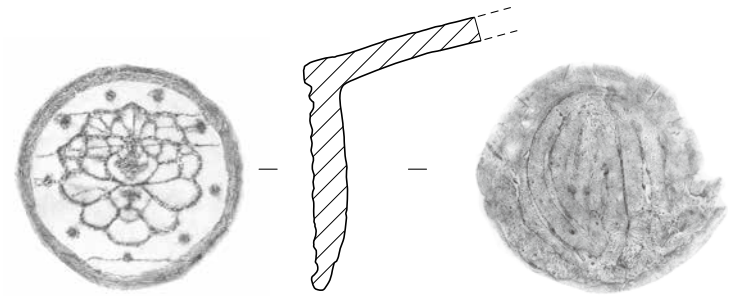
252



253



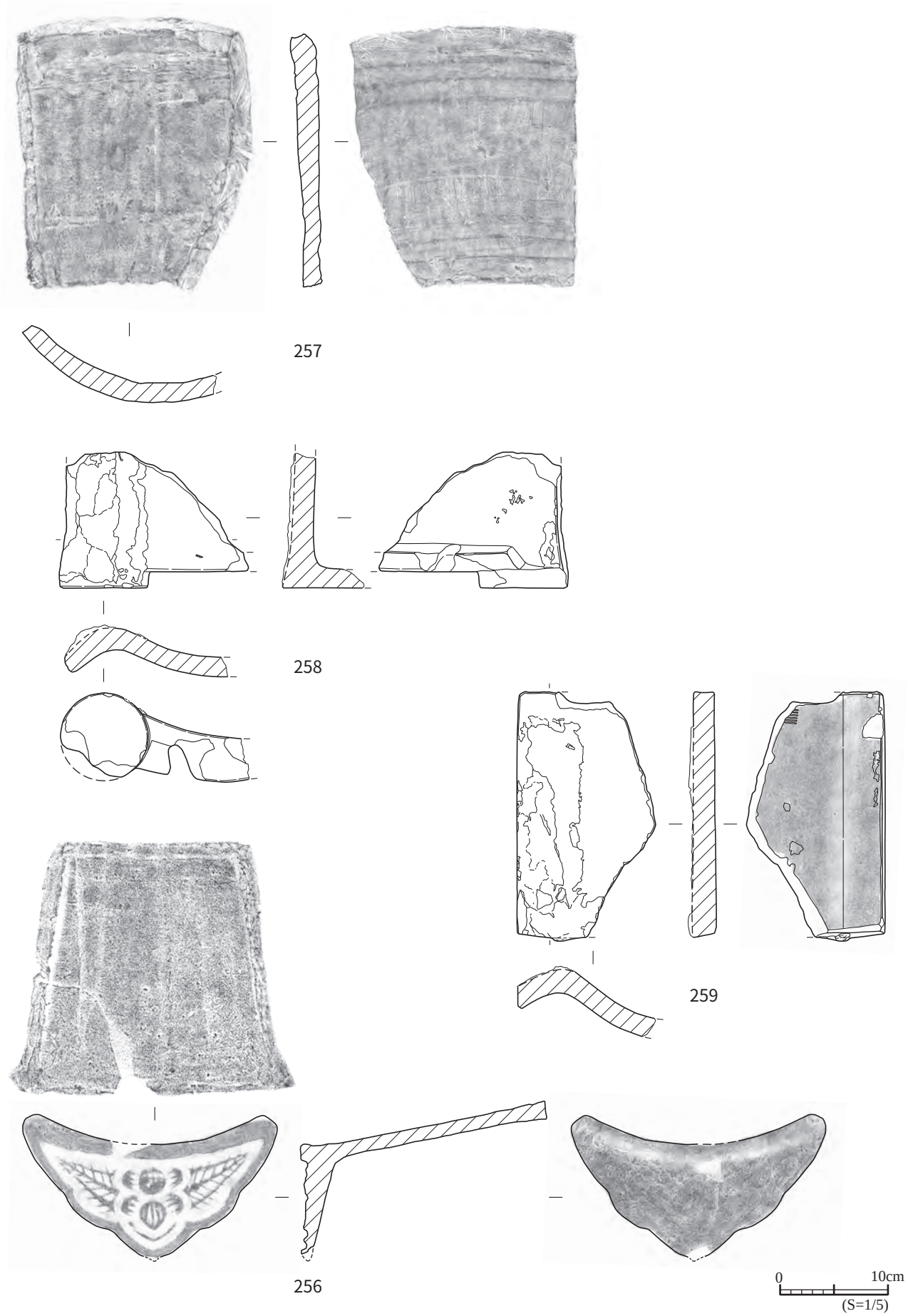
254



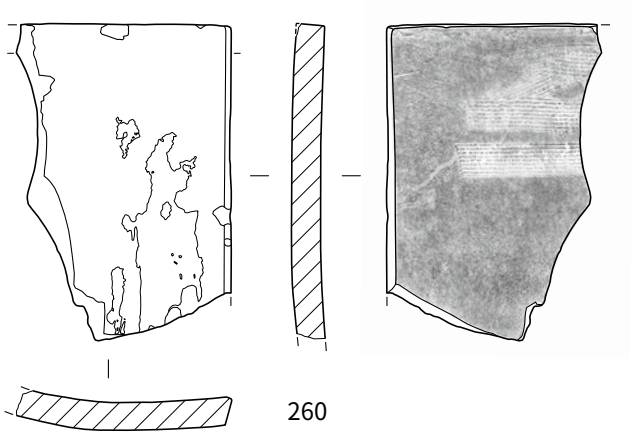
255

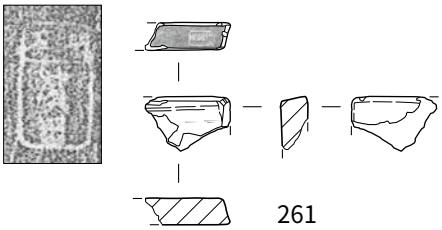
0　10cm
(S=1/5)

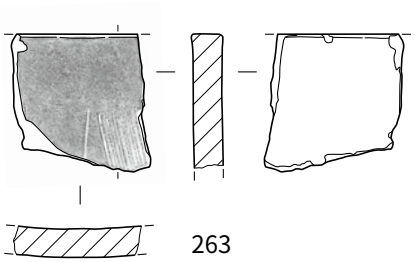
第 48 図　瓦２

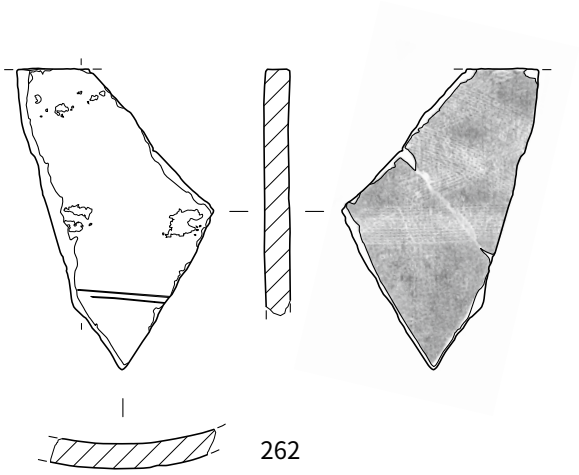


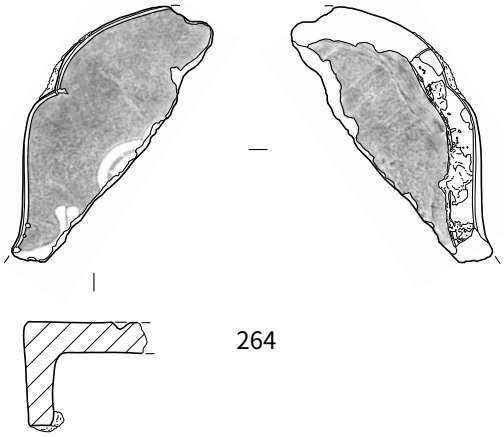
第 49 図　瓦３

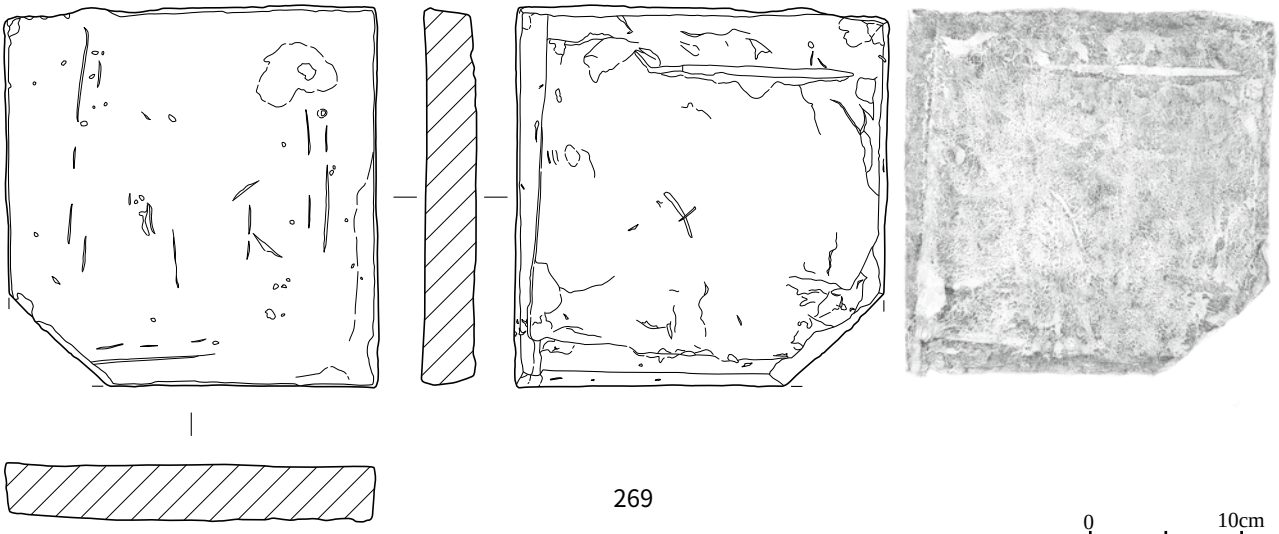






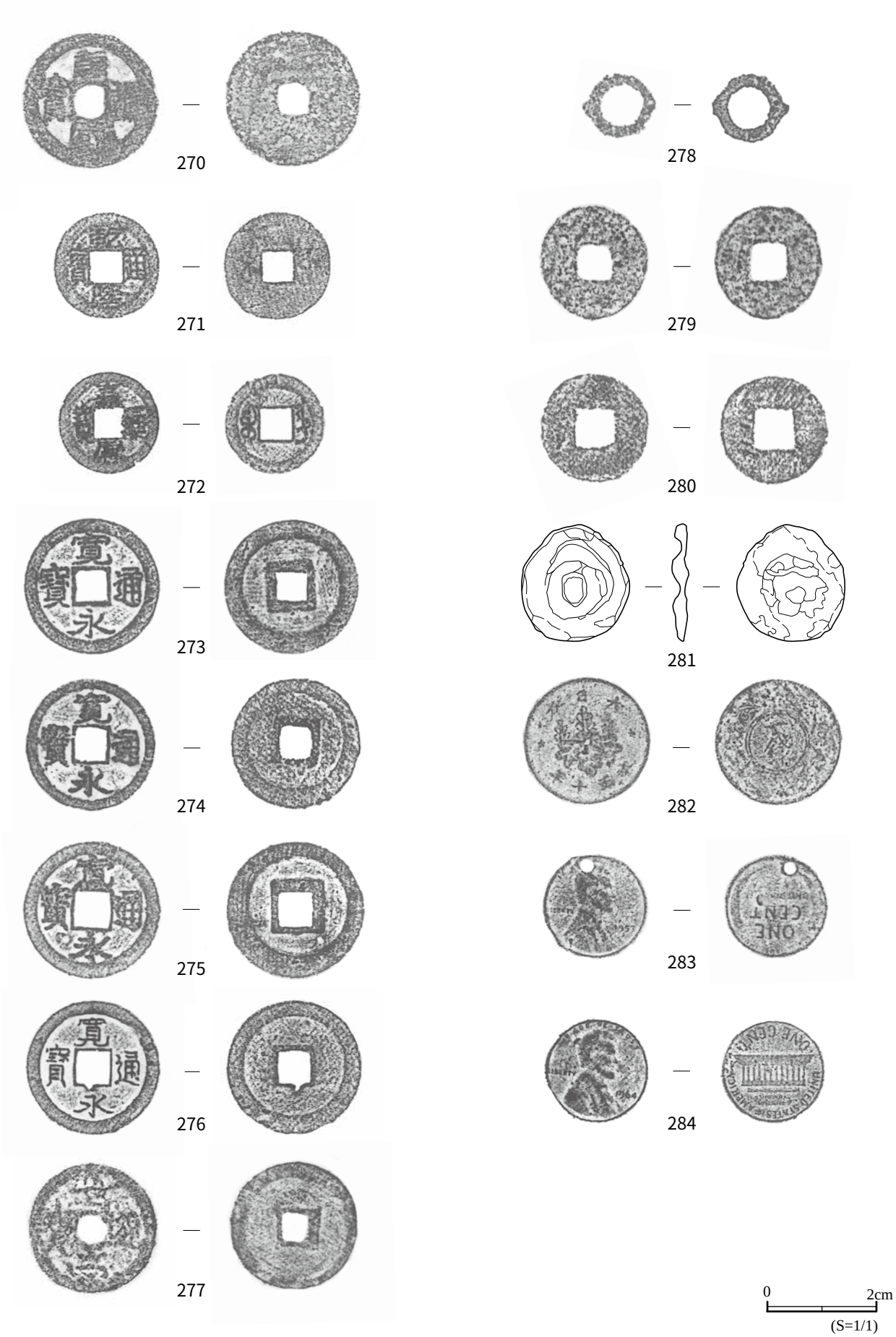






0　10cm
(S=1/5)

第 50 図　瓦４、塼


270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
0
2cm
(S=1/1)

第 51 図　銭貨

図版 20　中国産青磁、中国産白磁、中国産青花１

29
30
32
31
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
45
43
44
46
47
48
49
50
51
52
53

図版 21　中国産青花２

図版 22　中国産青花３、中国産褐釉陶器１

図版 23　中国産褐釉陶器２、タイ産褐釉陶器、その他の輸入陶磁器

図版 24　本土産陶磁器１

図版 25　本土産陶磁器２

図版 26　沖縄産施釉陶器１

図版 27　沖縄産施釉陶器２

図版 28　沖縄産施釉陶器３

図版 29　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器１

図版 30　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器２

図版 31　初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器３

図版 32　陶質土器、瓦質土器、土器

図版 33　煙管、金属製品１

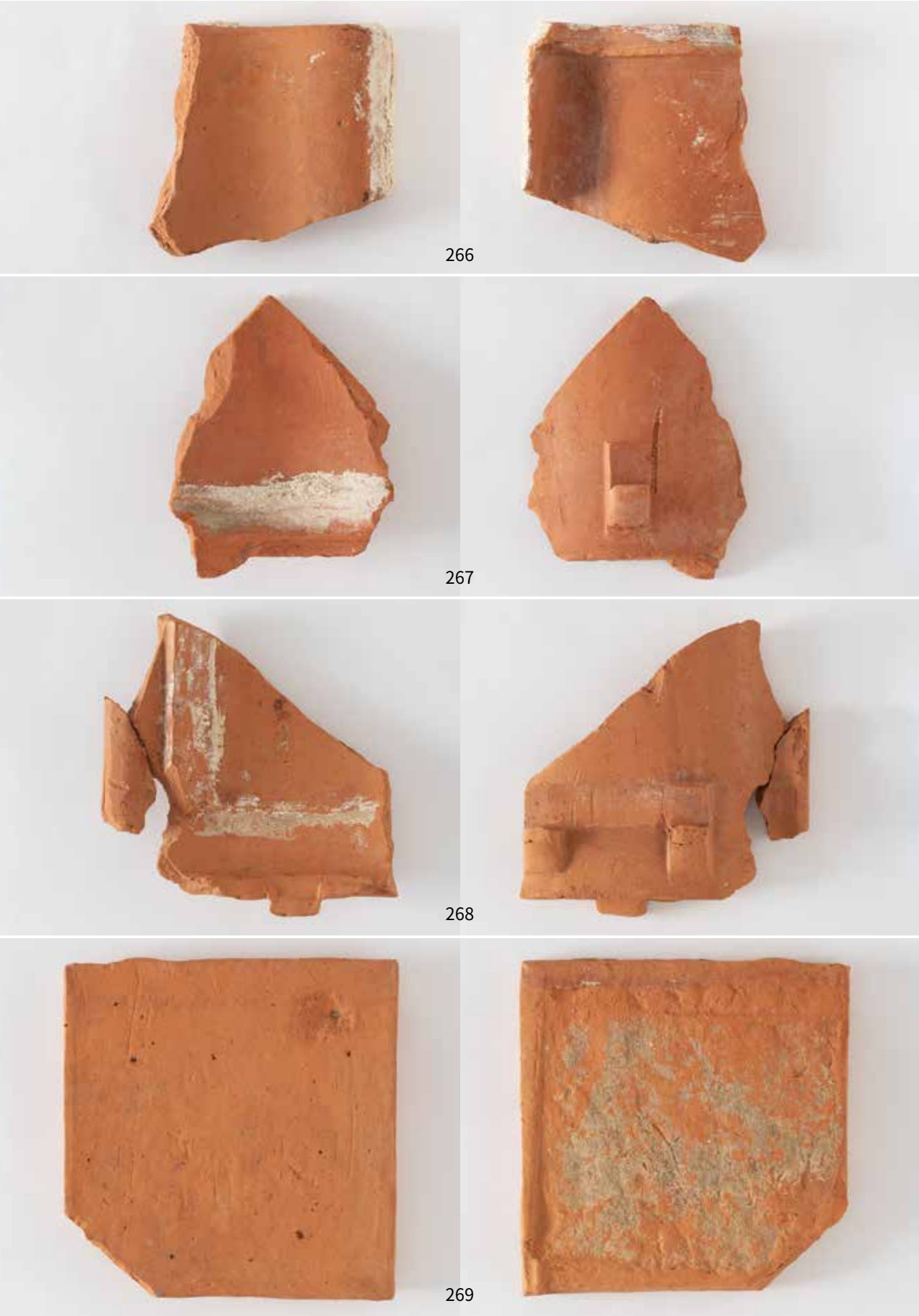
図版 34　金属製品２

図版 35　円盤状製品、骨製品、土製品、ガラス製品、ガラス玉

図版 36　石製品、瓦１

図版 37　瓦２

図版 38　瓦３



図版 39　瓦４、塼

図版 40　銭貨

第４章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平成29（2017）および令和元（2019）年度の発掘調査にて採取した土壌サンプルについて、令和２（2020）年度に自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

本報告では、溜池２および円形石組１、方形石組１の土壌を対象に、古植生や遺構の使用状況に関する情報を得ることを目的として、花粉分析・寄生虫卵分析、微細物分析を実施した。

第１節　試料

分析試料は、溜池内堆積土（試料番号１）と、円形石組１（試料番号２）、方形石組１（試料番号３）の計３点である。この全点を対象に花粉分析・寄生虫卵分析、微細物分析を実施した。

第２節　分析方法

花粉分析・寄生虫卵分析

試料 10cc を正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別（しべつ）、重液（臭化亜鉛, 比重 2.2）による有機物の分離の順に物理･化学的処理を施し、花粉・胞子および寄生虫卵を分離・濃集する。処理後の残渣を定容し一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての花粉・胞子と寄生虫卵について同定・計数する。同定に際しては、当社保有の現生標本の他、花粉化石は島倉（1973）、中村（1980）、藤木･小澤（2007）、三好ほか（2011）等を、寄生虫卵は佐伯ほか（1998）、斉藤・田中（2007）等を参考にする。

結果は、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として、寄生虫卵については１cc あたりに含まれる寄生虫卵の個数として表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。また、100 個体未満は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸める。さらに花粉化石群集の分布図も表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が 100 個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

微細物分析

試料 500g を常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5 ㎜の篩（ふるい）に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約 20 回）。残土を粒径 0.5 ㎜の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を、それぞれ粒径４～ 0.5 ㎜の篩に通し、粒径別に常温乾燥させる。水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体や動物遺存体の他、主に径２㎜以上の炭化材などの遺物を抽出する。

種実の同定は、現生標本や中山ほか（2010）、鈴木ほか（2018）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材は重量と最大径、炭化材主体、砂礫主体、植物片は重量を一覧表に併記する。動物遺存体の同定は、現生標本や図鑑類を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。分析後は、抽出物と残渣を容器に入れて保管する。

第３節　結果

花粉分析・寄生虫卵分析

結果を第４表、第 52 図に示す。花粉化石の検出状況は、試料により大きく異る。溜池２（試料番号１）は花粉化石の保存状態は悪いものの、かろうじて定量解析が行える程度の産出が認められ

た。木本花粉ではマツ属が多産し、次いでミカン科が多く産出する。ミカン科は表面の状態が悪いためミカン科で同定したが、形状的にはミカン属に近い。その他ではコナラ属アカガシ亜属なども認められる。草本花粉ではカヤツリグサ科が多く、イネ科、クワ科、アカザ科、アブラナ科、キク亜科、タンポポ亜科などを伴う。シダ類胞子は、イノモトソウ属などが多く認められた。なお花粉・胞子数は、堆積物１cc あたり 800 個程度である。

円形石組１（試料番号２）、方形石組１（試料番号３）の試料はいずれも花粉化石の産出状況、保存状態が悪い。認められる花粉は、木本花粉ではマツ属、アカガシ亜属、ニレ属―ケヤキ属、イボタノキ属など、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、キク亜科、タンポポ亜科などである。シダ類胞子は、イノモトソウ属などが確認された。なお、花粉・胞子数は、円形石組１で 100 個 /cc、方形石組１で 300 個 /cc 程度である。

寄生虫卵は、円形石組１から回虫卵が確認されたが、堆積物１cc あたり 100 個未満である。溜池２、方形石組１からは、寄生虫卵は１個体も検出されなかった。

微細物分析

結果を第５表に示す。３試料 1.5kg を洗い出した結果、被子植物２分類群（木本のアカメガシワ属、草本で栽培種のイネ）４個の種実の他、シャジクソウ科の卵胞子１個、不明炭化物 11 個、炭化材 3.6g（最大 16.5 ㎜）、炭化材主体 1.4g、植物片 0.06g、動物遺存体（ニシキウズガイ科、オニノツノガイ科？、ヒラマキミズマイマイ、ヒラマキガイモドキ、リュウキュウヤマタニシ、オナジマイマイ科、ベッコウマイマイ科？、マイマイ類、腹足綱（大型）、腹足綱、タイ科 / ベラ科？、硬骨魚綱、哺乳綱）2.8g 砂礫主体 190.2g が検出された。以下、試料別状況を記す。

溜池２（試料番号１）からは、常緑または落葉小高木のアカメガシワ属の種子３個、沈水植物のシャジクソウ科の卵胞子１個、炭化材 0.3g（最大 6.2 ㎜）、炭化材主体 0.4g、植物片 0.06g、池沼や水田などの水草や石の上に棲息するヒラマキミズマイマイの殻８個、水中の植物に付着するヒラマキガイモドキの殻 13 個、陸産貝類のリュウキュウヤマタニシの殻２個、ベッコウマイマイ科？の殻 17 個、マイマイ類の殻 10 個、腹足綱の殻 17 個、タイ科 / ベラ科？の歯１個、砂礫主体 10.1g が検出された。

円形石組１（試料番号２）からは、不明炭化物６個（うち２個花序？）、炭化材 0.6g（最大 8.9 ㎜）、炭化材主体 0.5g、陸産貝類のオナジマイマイ科の殻１個、ベッコウマイマイ科？の殻 21 個、マイマイ類の殻３個、腹足綱（大型）の殻３個、腹足綱の殻 25 個、硬骨魚綱の鰭棘等５個、硬骨魚綱の部位不明４個、哺乳綱の部位不明３個（うち１個骨端未化骨）、種類不明の歯１個、骨９個、砂礫主体 111.8g が検出された。ベッコウマイマイ科？には透明～半透明を呈す、現生種可能性がある個体が含まれる。

方形石組１（試料番号３）からは、栽培種のイネの炭化籾１個、不明炭化物５個、炭化材 2.7g（最大 16.5 ㎜）、炭化材主体 0.6g、海産性のニシキウズガイ科の殻１個、オニノツノガイ科？の殻１個、陸産貝類のベッコウマイマイ科？の殻４個、腹足綱の殻９個、砂礫主体 63.4g が検出された。

第４節　考察

溜池２

溜池２についてみると、花粉分析ではかろうじて定量解析が行える程度の産出が認められた。木本類ではマツ属が多産し、次いでミカン科が多く産出する。多産するマツ属のうち、亜属まで同定できたものは全てマツ属複維管束亜属であった。日本に生育する複維管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツの３種類がある。このうち、アカマツとクロマツは、沖縄には自生していない。一方、リュウキュウマツは沖縄特産で、広く生育している。これらのことから、今回の試料もリュウキュウマツの可能性が高い。また、ミカン科は保存状態が悪かったが、形態的にはミカン属に近い個体が確認されている。ミカン属には沖縄で自生・栽培されているヒラミレモン（シークヮーサー）が含まれる。よって、マツ属やミカン科は植栽されたリュウキュウマツ、シークヮー

サーなどに由来する可能性がある。その他で認められたコナラ属アカガシ亜属などは、周辺の二次林などに由来する可能性がある。草本類ではヤツリグサ科をはじめ、イネ科、クワ科、アカザ科、アブラナ科、キク亜科、タンポポ亜科など、開けた明るい場所に生育する種を含む分類群が多く認められる。よって、これらは池周辺の草地などを反映していると推測される。

微細物分析の結果からは、常緑または落葉小高木のアカメガシワ属が確認されており、植栽樹の可能性を含めて、中城御殿周辺の二次林等の林縁に生育していたと考えられる。沈水植物のシャジクソウ科は、やや水深がある水域に生育することから、池内に生育していたと考えられる。池沼や水田などの水草や石の上に棲息するヒラマキミズマイマイ、水中の植物に付着するヒラマキガイモドキなど、淡水域に棲息する巻貝類が検出された。これらも池内の環境を反映していると考えられる。

円形石組１・方形石組１

花粉分析の結果、円形石組１、方形石組１のいずれの試料も、花粉化石の産出状況、保存状態が悪い。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村 ,1967; 徳永・山内 ,1971; 三宅・中越 ,1998 など）。検出された花粉の多くは、比較的分解に強い種類やある程度の分解の影響を受けても同定可能な種類である。また、花粉よりも分解に対する抵抗性が高いシダ類胞子も多く認められる。これらのことから、堆積時に取り込まれた花粉やシダ類胞子は、その後の経年変化により分解・消失したと考えられる。

わずかに認められた種類から、木本類のマツ属、アカガシ亜属、ニレ属―ケヤキ属、イボタノキ属などは植栽や周辺の二次林などに、草本類のイネ科、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、キク亜科、タンポポ亜科などは遺構周辺の草地などに由来すると思われる。

寄生虫卵は、円形石組１から回虫卵が確認されたが、堆積物１cc あたり 100 個未満である。当社でこれまで全国各地で実施した花粉分析結果では、遺構内や堆積層から微量の（１cc あたり数個～数十個）の寄生虫卵が検出されることはそれほど珍しくない。このような場合、ある程度の人口密度のある集落の汚染の範囲内と考えられる（金原ほか ,1995 など）。ただし、寄生虫卵の分解に対する抵抗性も花粉化石と同程度とされている（黒崎ほか ,1993）。花粉化石の産状を考慮すると、寄生虫卵も分解の影響を受けている可能性がある。いずれにせよ、積極的にトイレ遺構を支持する結果とは言えない。

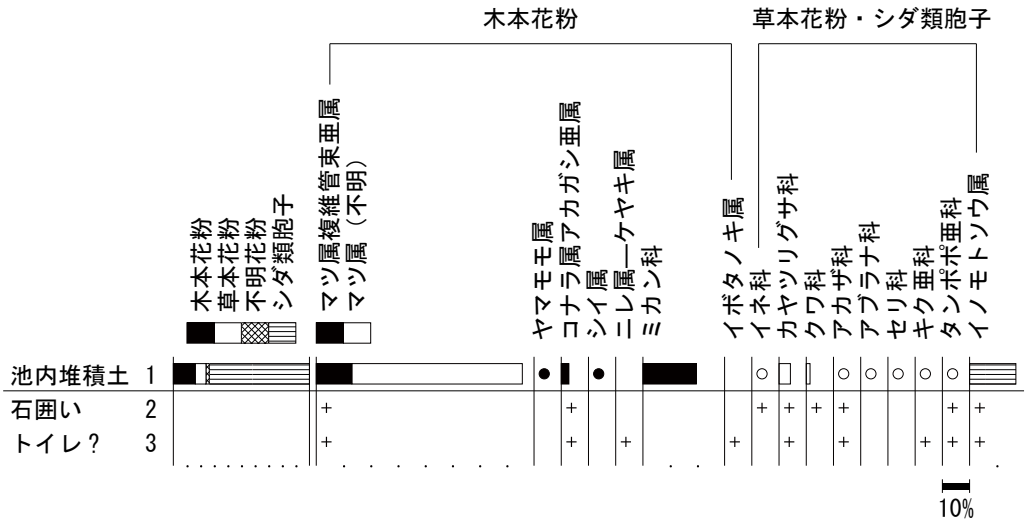
一方、微細物分析の結果を見ると、円形石組１からは、現生種が含まれている可能性がある陸産貝類、魚類、哺乳類の骨が確認されたことから、廃棄に伴う可能性が指摘される。また、方形石組１からは、栽培種のイネの炭化籾、海産性のニシキウズガイ科、オニノツノガイ科の可能性がある巻貝類の破片が確認され、これらも廃棄に伴う可能性がある。

なお、イネは中城御殿近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆され、火を受けたとみなされる。

第４表　花粉分析・寄生虫卵分析結果

種　類	溜池２	円形石組１	方形石組１
試料番号	1	2	3
木本花粉			
マツ属複維管束亜属	14	3	5
マツ属 (不明)	67	7	21
ヤマモモ属	1	-	-
コナラ属アカガシ亜属	3	2	1
シイ属	1	-	-
ニレ属―ケヤキ属	-	-	1
ミカン科	21	-	-
イボタノキ属	-	-	1
草本花粉			
イネ科	2	1	-
カヤツリグサ科	27	2	3
クワ科	9	3	-
アカザ科	5	1	2
アブラナ科	3	-	-
セリ科	1	-	-
キク亜科	2	-	5
タンポポ亜科	3	5	9
不明花粉			
不明花粉	16	1	4
シダ類胞子			
イノモトソウ属	110	19	54
他のシダ類胞子	378	15	66
合　計			
木本花粉	107	12	29
草本花粉	52	12	19
不明花粉	16	1	4
シダ類胞子	488	34	120
合計 (不明を除く)	647	58	168
寄生虫卵 (個 /cc)			
回虫卵	0	<100	0
寄生虫卵総数 (個 /cc)	0	<100	0
花粉・胞子数 (個 /cc)	800	100	300

1) 寄生虫卵、花粉・胞子数については、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸めている。
2)<100：100 個未満。

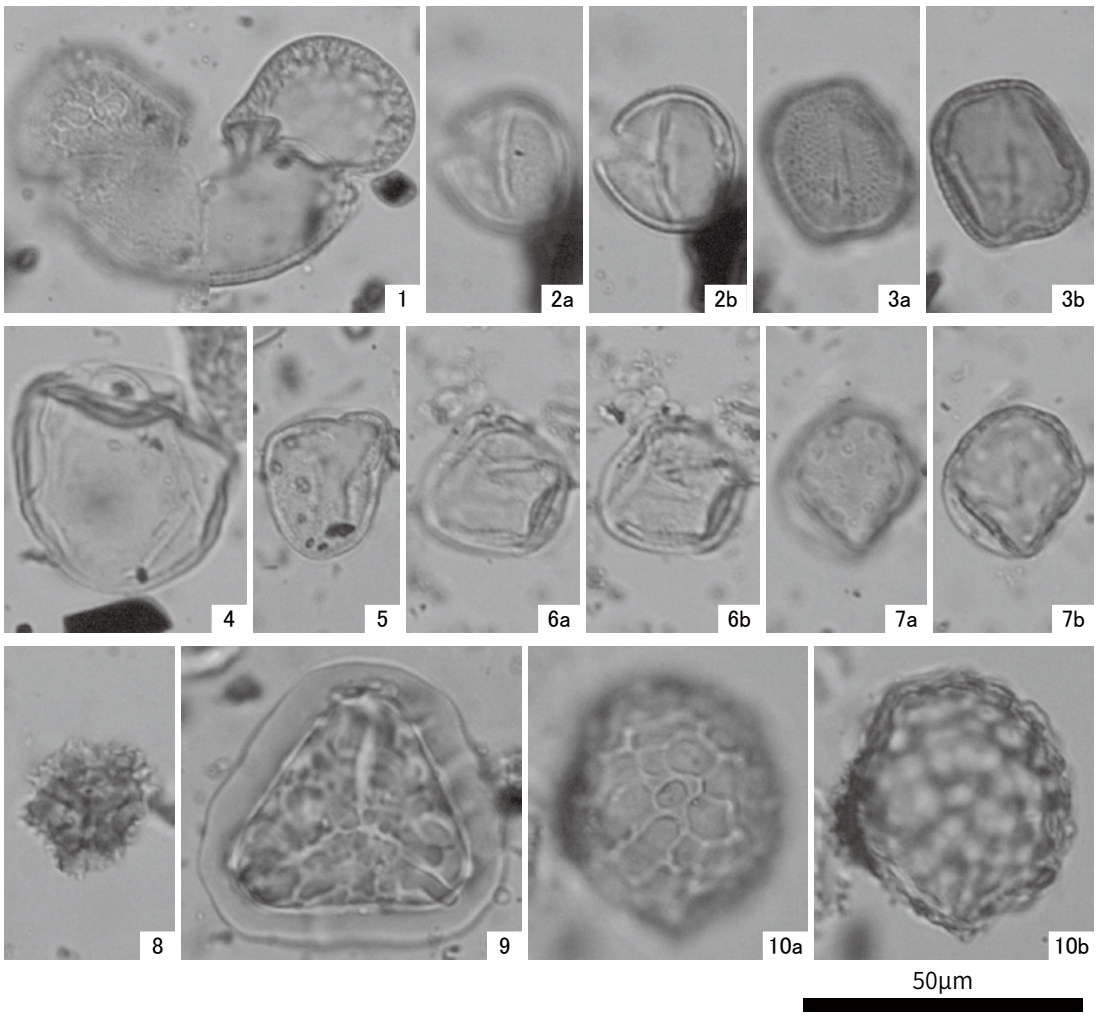


木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。丸印は１％未満、+ は木本花粉 100 個未満の試料において検出された種類を示す。

第 52 図　花粉化石群集

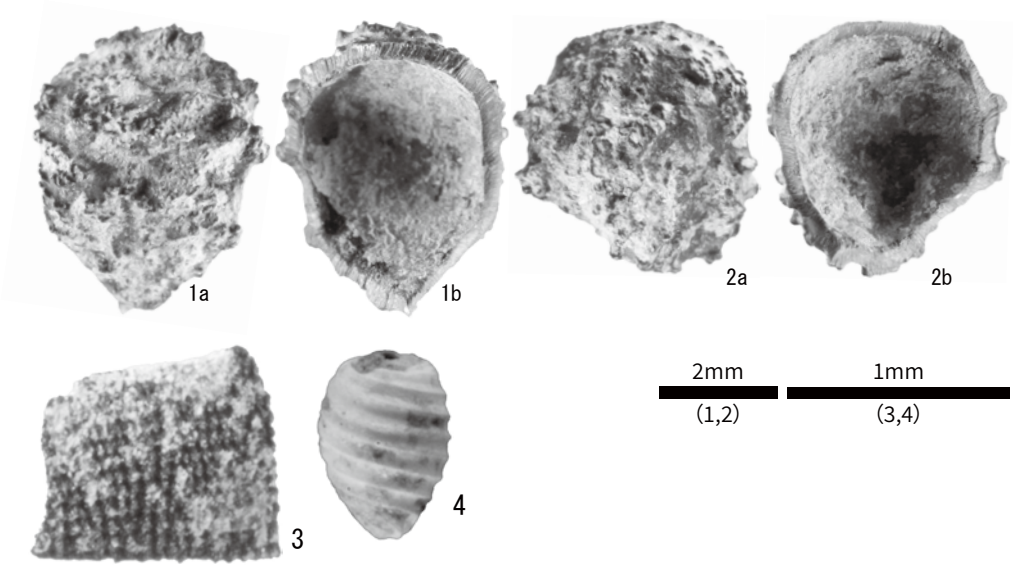
第５表　微細物分析結果

分類群・部位・状態 / 粒径			溜池２ 1	円形石組１ 2	方形石組１ 3	備考
種実						
アカメガシワ属	種子	破片	3	-	-	アカメガシワより粗い瘤状突起 , 断面柵状組織湾曲
イネ	炭化籾	破片	-	-	1	
車軸藻類						
シャジクソウ科	卵胞子	完形	1	-	-	
不明炭化物			-	4	5	
不明	花序？	完形	-	2	-	
炭化材			6.16	8.91	16.54	最大径 (㎜)
	>4 ㎜		0.09	0.28	2.09	乾重 (g)
	4-2 ㎜		0.24	0.34	0.61	乾重 (g)
炭化材主体	2-1 ㎜		0.18	0.28	0.41	乾重 (g)
	1-0.5 ㎜		0.20	0.16	0.16	乾重 (g)
植物片			0.06	-	-	乾重 (g)
動物遺存体						
腹足綱			0.22	1.05	0.07	乾重 (g)
ニシキウズガイ科	殻	破片	-	-	1	海産性
オニノツノガイ科？	殻	破片	-	-	1	海産性
ヒラマキミズマイマイ	殻	破片	8	-	-	池沼や水田などの水草や石の上に棲息
ヒラマキガイモドキ	殻	破片	13	-	-	水中の植物に付着
リュウキュウヤマタニシ	殻	破片	2	-	-	陸産貝類
オナジマイマイ科	殻	破片	-	1	-	陸産貝類
ベッコウマイマイ科？	殻	破片	17	21	4	陸産貝類 , 石囲い : 透明～半透明の個体を含む (現生種？)
マイマイ類	殻	完形	-	3	-	陸産貝類
		破片	10	-	-	
腹足綱 (大型)	殻	破片	-	3	-	
腹足綱	殻	破片	17	25	9	
硬骨魚綱			0.03	1.39	-	乾重 (g), 最大 25.69 ㎜
タイ科 / ベラ科？	歯	破片	1	-	-	
硬骨魚綱	鰭棘等	破片	-	5	-	
	不明	破片	-	4	-	
哺乳綱	不明	破片	-	3	-	1 個 : 骨端未化骨
不明	不明	破片	-	9	-	
	歯	破片	-	1	-	0.004g
砂礫主体	>8 ㎜		2.12	28.05	8.93	乾重 (g)
	8-4 ㎜		1.83	29.48	18.98	乾重 (g)
	4-2 ㎜		4.55	34.86	20.11	乾重 (g), 貝殻片 , 骨片含む
	2-1 ㎜		3.46	8.83	7.73	乾重 (g), 貝殻片 , 骨片含む
	1-0.5 ㎜		3.09	10.60	7.59	乾重 (g), 貝殻片 , 骨片含む
分析量			500	500	500	乾重 (g)



1.マツ属（溜池2）　2.コナラ属アカガシ亜属（円形石組1）　3.ミカン科（溜池2）　4.イネ科（溜池2）　5.カヤツリグサ科（溜池2）
6.クワ科（溜池2）　7.アカザ科（溜池2）　8.キク亜科（溜池2）　9.イノモトソウ属（溜池2）　10.回虫卵（円形石組1）

図版 41　花粉化石・寄生虫卵



1.アカメガシワ属 種子（溜池2）　2.アカメガシワ属 種子（溜池2）　3.イネ 籾（方形石組1）　4.シャジクソウ科 卵胞子（溜池2）

図版 42　大型植物遺体

第５章　総括

以上、平成 27（2015）～ 29（2017）及び、令和元（2019）年度に実施した中城御殿跡発掘調査の報告を行った。ここでは、これまで行った報告を地区ごとに整理し、総括としたい。

前の空間

今回の調査では、正門の石牆西側端にあたる、トレンチ１にて調査を行った。道路拡張による石牆の移設工事を行うために、事前の遺構確認調査として実施した。以前の調査より確認されていた４号石垣（図版 43 －１）の約 20cm 下から、段上に 30cm 大の石が敷かれた層を検出した。近世以降の陶磁器類が主体となって出土しており、中城御殿を造営するために造成した箇所と考えられる。同様の状況は、平成 23（2011）年度に行った調査のトレンチ５北側、トレンチ７でも見られ（図版 43 －２、３）、正門西側の一帯を構成していたと考えられる。

上之御殿

中城御殿の北側には新御殿や北之御殿が位置する御内原の空間が広がっており、その西側には、石牆をはさみ上之御殿が存在したエリアが広がる。御内原よりも２mほど高くテラス状に整地された空間には、拝所が２か所と池を有する庭園、上之御殿と称される建物が１棟存在した。その規模や間取りは不明であるが、米軍の航空写真により、屋根の一部が木々に覆われた状態で確認できる（第 53 図）。上之御殿の機能について、明確な資料は現在のところ確認されていないが、大正９（1920）年に尚泰子息の尚時が妻静子とともに上之御殿に移り住むという記録があることから、王族の生活が営めるだけの施設が存在したことがわかる。

上之御殿の様相を示す遺構として、現在でも地表面に露出して残存しているものがいくつかあり、上之御殿入口の壁面となる石牆や庭園の一部、大岩の拝所跡など、当時の雰囲気を感じさせるような遺構を見ることができる。また、平成 22（2010）年度に行った調査では、御内原と上之御殿を繋ぐ入口となる門や階段跡などが確認されている。

今回の調査では、航空写真では木々に覆われているため確認できなかった上之御殿建物とその周辺状況を探るため、建物や拝所周辺、そして西と南北に調査区を設定し、遺構の確認調査を行った。上之御殿の平場が広がっていたと見られる付近のトレンチ内からは、コンクリート基礎や、遺構から外されたと見られる面石、岩盤等が検出されることが多く、遺構の残存状況があまり良くない。当地は周辺地域の中でも高所に位置しており、砲撃の標的にされやすかったことと、戦後の開発時に大きく改変されたことが考えられる。以下に確認された各遺構の状況についてまとめる。

西側石牆周辺

上之御殿西側では、上之御殿内を東西に区画すると考えられる石牆が確認されている。
石牆はトレンチ２・４・５で確認され、上之御殿の空間を南端から北端まで区画する。石の積み方はほぼ均一に 20 ～ 30cm 大の石灰岩が使われているが、トレンチ２南側の根石付近のみ 60 ～ 70cm の大きな石が積まれている。南側は他に比べて天端付近の地表が高い標高にあり、石積みも高くなるため、崩落を防ぐために根石部分で他より大きな石を使用し支えたと考えられる。

石牆の一部では岩盤を加工して利用している部分も見られた。トレンチ２南端の石牆１・２接続部では、自然の岩盤に石積みの形状や積み方を合わせている様子が見られる（図版 44 －１）。また、トレンチ４の北側から検出された部分では岩盤が地面に対して垂直に削られ、壁面のように加工される（図版 43 －４）。岩盤の壁は石牆より 30cm ほど奥まった所に位置してお

り、その接続部の間には、上部に面をもつ平たい面石が配置される。一見石牆の天端の一部が残っているようにも見えるが、側面が石牆と並行せず、他の残存部と上面の角度も揃わないため、石牆とは別個の遺構と考えられる。面石は３つ残存しているのが確認され、南側から北へと下るように配置される（図版 43 －４）。岩盤の南隣には石畳が配置され、石畳の向かう先には石積み３・４が配置される。これらの状況から、上之御殿上段のテラスから、下段の石牆根石付近の地表へと降りるための階段が存在していた可能性が考えられる。根拠が薄弱で、飛躍した仮定となるが、石畳は階段入口の門部分となり、そこを通り西へ向かい、石積み３・４上に作られた踊場で進路を北に変え、そこから石牆に沿って下段へと降りる状況を想定できる。トレンチ５で確認された、石積みの孕んでいる部分は、調査時に崩落する可能性があったため、孕んでいる部分のみ解体した。解体中に戦後のものと見られる薬瓶やスプーン、ボールチェーンなどの現代遺物が確認されたため、戦時中に破壊された石牆を何らかの目的で積み直したものの、土圧に耐え切れず、孕んだものと考えられる。また、孕みながらも崩落はしていなかったため、積み直してから短い期間の内に埋められたと考えられる。

石牆が埋められた時期については、石牆上部に堆積しているⅠ層内からコンクリート基礎やレンガに混じって、1960 年代頃のものと見られるジュースやビールなどのガラス瓶類が多く確認されていることから、琉球政府立博物館の建物が建設された時期に造成されたものと見られる。この造成土は非常に厚く堆積しており、石牆から西に約８m、石牆根石付近の上之御殿当時の地表面から高さ約３mの範囲に広がる。そこからさらに西側へなだらかに落ちていく。博物館建設当時に、上之御殿エリアのテラス部分の敷地を広げるために大規模な造成を行ったことが想定される。

北側石牆周辺

北側石牆周辺としたトレンチ６は、上之御殿内を南北に走る石牆１の北端に接続する地点から、上之御殿入口の石牆までの東西区間に設定したトレンチで、拝所の北側の広場に位置する。隣道との境界線となる石牆の検出が期待されたが、掘削を行ったところ、表土と造成層が主体で、明確に石牆と言える遺構は検出できなかった。

調査区内に堆積していた表土は南側の浅い所で約 60cm、北側の深い所で約１mと、南から北にかけて緩く傾斜しながらⅠ層が堆積している状況が見られた。

トレンチ６の西側では、石牆１に接続する岩盤が、壁面のように成形された面が続いていることが確認され、その面が緩やかにカーブを描きながら西から北へと向きを変えている様子が確認できた（図版 44 －２）。

以上の状況から、北側の石牆が戦後の造成などにより破壊されていなければ、岩盤の面の方向と、上之御殿入口北の石積み北端を結んだライン上、トレンチ６より北側に位置することが予想される。また、上之御殿入口北の石積みの天端標高が約 101.4m であるのに対し、トレンチ６北側のⅠ層は標高約 101.4 ～ 100.4 mまで堆積しており、これらの状況から、北側石牆の天端は破壊されており、残存部があるならば標高 100 m以下にて検出されると想定される。

拝所周辺

上之御殿内の拝所とされる地点は、古写真のように大岩を覆うように石灰岩の階段で構成されており、上之御殿内の様相を写す資料として、現在のところ、唯一写真資料が残っている箇所である。

調査を行ったトレンチ 10 からは、階段の根石と考えられる石積み６が検出された。岩盤の突出した部分から石積み６までの距離は約 120cm で、階段を作る幅としてはやや狭い印象を受ける。また、石積み６の加工面は荒く、古写真に見られるような丁寧な表面の加工がなさ

れていないため、本来は、石積み６の外周に、階段を構成する石積みが存在していた可能性が考えられる。

石積み６東側の下層に開けられた穴については、以前の調査時の聞き取り調査により、戦況が悪化してきた 1945（昭和 20）年３～４月頃、御殿に収められた宝物を分散して避難させるため、敷地内の数か所に穴を掘るなどして隠したことが情報として得られており、この穴もそのうちのひとつにあたる可能性がある。穴の内部には現代の造成層が堆積しており、御殿当時に収めたと考えられる遺物はみられなかった。

庭園周辺

中城御殿当時は、古写真に残るような他の庭園部分同様、芝山を主体とした庭が構成されていたと考えられる。庭園周辺の調査開始当初、溜池は地表面に露出していた溜池１のみだと想定していたが、掘削を進めると溜池１より約 50cm 低い標高から溜池２を検出した。溜池２内の堆積は、池の底と考えられる泥質の土の直上に、瓦礫の層が厚く堆積しており、戦後の造成によって埋められたとみられる。博物館当時の平面図と溜池の平面図を重ねると、建物の屋根が溜池２の一部にかかっているため、首里市役所などが建てられた時期には、溜池２は埋められていたと考えられる。

溜池１と溜池２の接続部には溝が作られ、溜池１に溜まった水が許容量を超えると溜池２に流れ込むような構造になっていたが（図版 15 －５）、雨などにより実際に溜池１から溢れるまで水が溜まる状況になると、反対の東側の端から水があふれ出ていたため、実際に溝が接続部として機能していたかについては不明である。

溜池の南側の１mほど標高の上がった地点に庭園基盤部が位置する。基盤部の岩盤は水平に掘削された部分と、自然面のまま残されている部分が明瞭に分かれており、意図的に高低差が作られていた（図版 44 －３）。庭園基盤部から地表面までの土の堆積は約 10 ～ 20cm と薄くなっており、溜池の上部に見える景色は、所々に岩盤が露頭する、なだらかな小山が形成された状態だったと考えられる。航空写真に見られるように、上之御殿は木々に覆われた状態だったため、庭園部も植栽された状況だったと考えられる。溜池２最下層の、池底の泥と考えられる土のサンプルで花粉分析を行った結果、池内に生息していたと考えられる沈水植物や淡水域に生息する貝類などの、池の状況を示す花粉に加えて、マツ属やミカン科の花粉が多く検出されている。これら分析の状況から、池周辺には樹木が植栽されていた痕跡がみられる。また、庭園基盤部分の前面に多く見られるピット群の性格については、小規模な樹木を、土をかさ増しして植栽するためにあけられた可能性が考えられる。また、池付近の岩盤にも水平に削られている面があり、鉢植えなどの植物を配置していた状況も考えられる。

上之御殿建物周辺

今回調査を行ったトレンチ 12 では、航空写真および屋根伏図から、建物の北側付近と推測される地点の調査を行った。上之御殿エリアの中でも最も造成による攪乱が激しく、遺構の保存状況が悪い状況で、戦後以降のものと考えられるコンクリートの基礎などが、地表面から１mほどの深さに広がっていた。現代の平面図と合わせると、上之御殿はコンクリート製建物によりほぼすべてが覆われており、この時期の造成によって遺構が破壊されたものと見られる。

破壊を免れた遺構の中に中城御殿当時のものと考えられる石列及び石組がある。

トレンチ 12 北側から検出した石畳１は、中城御殿当時露出しており、当時の標高を示すものと考えられる。また、石畳１に隣接する石列２は、石畳から庭園まで、途中で途切れながらも一直線に延びているため、上之御殿南北約 22 m間の地表標高を推測できる。石畳のある北側で標高約 100.80m、庭園付近の南側で約 101.00m前後に位置する。２点間の距離と高低差から、その傾斜角は約 0.5 度となる。東西については、確実に地表面だったと考えられる溜池１・２の

縁部分で見てみると、溜池１の東側地点では約101.20m、溜池２の西側部分では約100.00mとなり、２点間の約15mの高低差は約20cmとなる。傾斜角は約0.7度と、東側が若干高くなるが、東西南北を見ても、上之御殿の地表は水平に近い平面で構成されていたと考えられる。

方形石組１は、上部が破壊されているものの、四方を壁となる面石で囲み、底を石畳状の敷石で埋める構造になっている。底の標高は約100.24mとなっている。方形石組１の標高は、想定される上之御殿の地表面よりも約50cm以上は低いと考えられ、同標高にモルタルで塗り固められた部分が接続することから、地下に水を留めておく機能があったと考えられる。トイレ跡などの可能性があるため、寄生虫卵分析を行ったが、結果として寄生虫卵は検出されなかったため、現時点でその機能を断定することは難しい。

以上、平成27（2015）～29（2017）、令和元（2019）年度に実施した中城御殿跡発掘調査報告を行った。これまで述べてきたように、建物付近に関しては戦争による破壊や、その後の造成により、遺構はほぼ消滅しているといっていい状況にあった。前の空間や御内原のように建物が群立している状況ではないこともあり、遺構や遺物から上之御殿の様相を探るのは難しいと考えられる。一方、建物以外の敷地境界付近、特に西側石牆付近の遺構は良好な状態で保存されており、上之御殿の当時の状況をある程度把握できたと考えられる。

最後に、調査及びに資料整理作業に際しては多くの方々に力を貸していただき、また指導・助言を賜った。記して感謝申し上げたい。

1. 平成 5 年度調査時検出 4 号石垣（西より）

2. 平成 23 年度調査時検出石敷（北から）

3. 平成 23 年度調査時検出石敷（西から）

4. 石牆 1 岩盤接続部（西から、トレンチ 4 北側）

5. 石牆 1 岩盤接続部（上空東から、トレンチ 4 北側）

図版 43　遺構検出状況 1

１.石牆１・２岩盤接続部（トレンチ２、北西から、写真左：石牆１、右：石牆２）

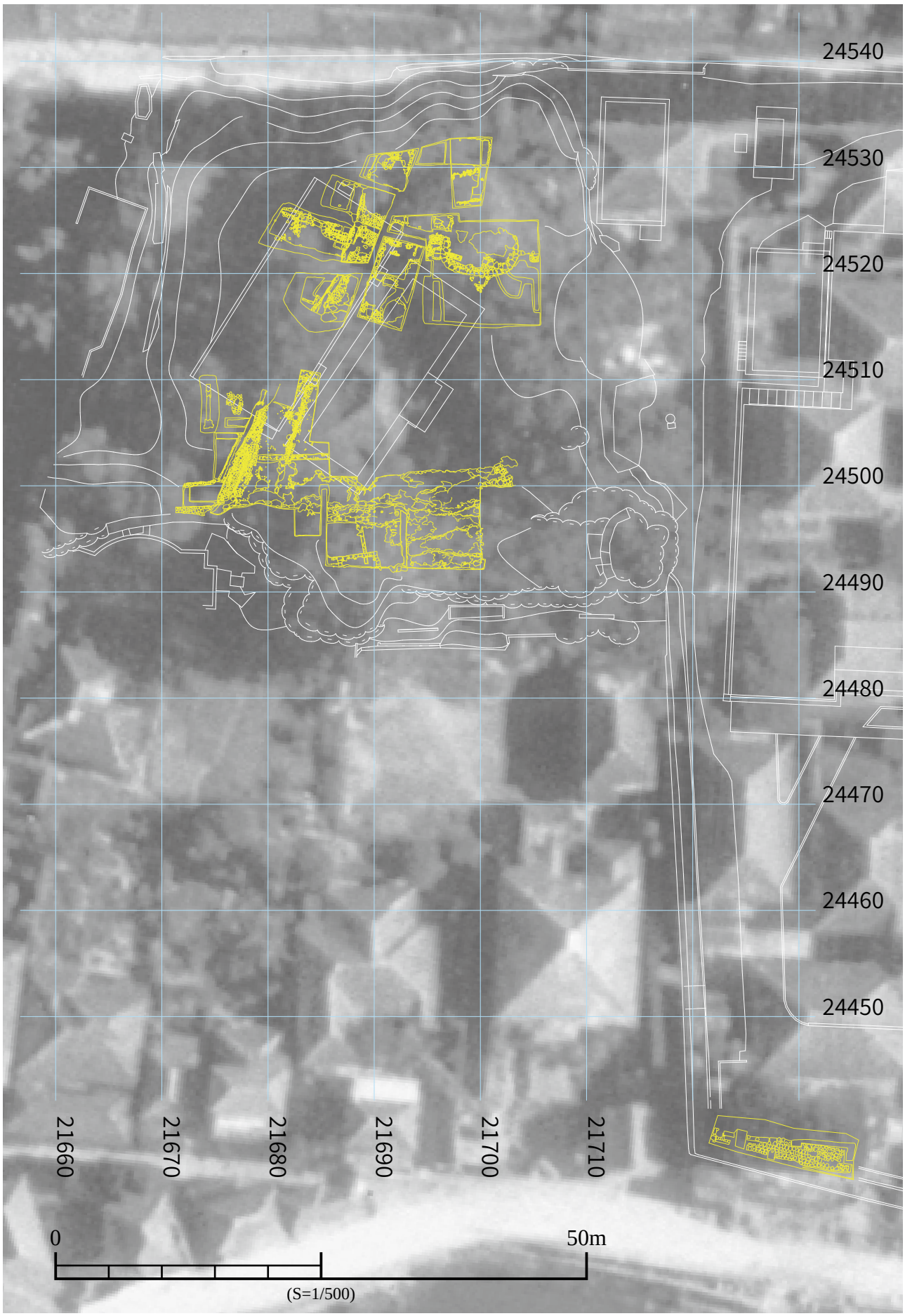
２.岩盤加工部（トレンチ６、西から）

３.庭園基盤岩盤加工部（トレンチ７、西から）

４.方形石組１（トレンチ 12、上空南から）

５.方形石組１検出部壁面（トレンチ 12、北から）.

図版 44　遺構検出状況２



第 53 図　上之御殿遺構図と戦前航空写真の合成

引用・参考文献

表紙

沖縄風土記刊行会編 1970『首里古地図』

第２章

第１節　地理的環境

都築昌子 2005「龍のひそむ島－近世琉球の風水－」『沖縄県史各論編第４巻 近世』沖縄県教育委員会

球陽研究会編 1974『球陽 読み下し編』沖縄文化史料集成５ 角川書店

真栄平房敬 1983「首里」『沖縄大百科事典 中巻 ケ～ト』沖縄タイムス社

第２節　歴史的環境

真栄平房敬 1983「中城御殿」『沖縄大百科事典 下巻 ナ～ン』沖縄タイムス社

沖縄県立博物館 1993『旧中城御殿－石牆工事にかかる第一次発掘調査－』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1994『旧中城御殿－石牆工事にかかる第二次発掘調査－』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1995『旧中城御殿－石牆工事にかかる第三次発掘調査－』沖縄県立博物館

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 53 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（4）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 67 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（5）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 84 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『中城御殿（首里高校内）－首里高校内校舎改築に伴う発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 93 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2018『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（6）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 95 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（7）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 102 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

第３章

第４節

１　中国産青磁

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2008「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究５』沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（2）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69

集 沖縄県立埋蔵文化財センター
２　中国産白磁
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2008「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究５』沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (３) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
３　中国産青花
東京国立博物館 2009『染付　藍が彩るアジアの器』東京国立博物館
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (３) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書 (２) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
京都国立博物館 2013『特別展覧会 魅惑の清朝陶磁』読売新聞社
４　中国・タイ産褐釉陶器
向井亙 2003「タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.23』日本貿易陶磁研究会
沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 29 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2008「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究５』沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書 (２) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
５　その他の輸入陶磁器
中国産色絵
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (３) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
中国産黒釉陶器
沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 29 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
紫砂
沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『首里城跡－御内原東地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 88 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
６　本土産陶磁器
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (３) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
佐賀県立九州陶磁文化館 2012『古伊万里の文様集成』佐賀県立九州陶磁文化館
北谷町教育委員会 2016『平安山原 A 遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 38 集 北谷町教育委員会
那覇市立壺屋博物館 2016『朝鮮人陶工来琉四〇〇年記念 一六一六年 琉球陶始四〇〇年』那覇市立壺屋博物館
７　沖縄産施釉陶器
佐賀県立九州陶磁文化館 1998『沖縄のやきもの－南海からの香り－』佐賀県立九州陶磁文化館
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書 (３) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書 (２) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『首里城跡－銭蔵地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第77集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(7)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第102集 沖縄県立埋蔵文化財センター

8　初期沖縄産無釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
新垣力 2013「17世紀前半～中葉の琉球陶器について －「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の影響－」『鹿児島考古 第43号』鹿児島県考古学会

9　沖縄産無釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

10　陶質土器

曽根信一 1983「アカムヌー」『沖縄大百科事典 上　ア～ク』沖縄タイムス社
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第３集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(7)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第102集 沖縄県立埋蔵文化財センター

11　瓦質土器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『首里城跡－銭蔵地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第77集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(7)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第102集 沖縄県立埋蔵文化財センター

12　土器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡(Ⅰ)－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第２集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿－県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

13　煙管

沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(7)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第102集 沖縄県立埋蔵文化財センター

14　金属製品

沖縄県教育委員会　2008『沖縄の金工品関係資料調査報告書』沖縄県史料調査シリーズ第

４集　沖縄県文化調査報告書第 146 集　沖縄県教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書 (3) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書 (2) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2018『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書 (6) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 95 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
15　円盤状製品
上原静 2004「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える 世界遺産国際シンポジウム＜東アジアの城郭遺跡を比較して＞の記録』今帰仁村教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (3) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書 (2) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
16　骨製品・土製品
骨製品
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (7) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 102 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
土製品
川田壽文 2010「Ⅳ 遺構と遺物 3 江戸時代 2) 遺物　B 土製品」『新宿区 内藤町遺跡－新宿御苑大温室の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査－』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 246 集 東京都埋蔵文化財センター
17　ガラス製品・ガラス玉
桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (3) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
18　石製品・石器・石造製品
沖縄県立埋蔵文化財センター 2009『首里城跡・真珠道跡－首里城跡守礼門東側地区・真珠道跡起点及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 51 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
有銘倫子 2011「沖縄県内における遺跡出土硯」『南島考古 第 30 号』沖縄考古学会
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (2) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (3) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
19　瓦・塼
上原静 2008「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『沖縄国際大学総合学術研究紀要 第 11 巻第 2 号通巻第 14 号』沖縄国際大学総合学術学会
坪井利弘 1977『図鑑瓦屋根』理工学社
20　銭貨
永井久美男 1996『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (7) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 102 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

第４章

藤木利之・小澤智生 2007『琉球列島産植物花粉図鑑』アクアコーラル企画 p.155

金原正明・金原正子・中村亮仁 1995『大宮坊跡 (厠跡) における自然科学的分析 史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ』石川県鹿島町教育委員会 pp.51-70

黒崎　直・松井　章・金原正明・金原正子 1993「糞便堆積物の分析－特に寄生虫卵分析について－」『日本文化財科学会第 10 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 pp.115-115

三宅　尚・中越信和 1998「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究 6』p.15-30

三好教夫・藤木利之・木村裕子 2011『日本産花粉図鑑』北海道大学出版会 p.824

中村　純 1967『花粉分析』古今書院 p.232

中村　純 1980「日本産花粉の標徴 Ⅰ Ⅱ (図版)」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第 12,13 集』p.91

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑 (2010 年改訂版)』東北大学出版会 p.678

佐伯秀治・升　秀夫・早川典之 1998『臨床検査シリーズ 寄生虫鑑別アトラス－オールカラー版－』株式会社メディカルサイエンス社 p.162

斉藤崇人・田中義文 2007「寄生虫卵殻の形態分類」『徳永重元博士献呈論集』パリノ・サーヴェイ株式会社 pp.407-416

島倉巳三郎 1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第５集』p.60

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文 2018『草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる 734 種 増補改訂－ . ネイチャーウォッチングガイドブック』誠文堂新光社 p.303

徳永重元・山内輝子 1971『花粉・胞子 . 化石の研究法』共立出版株式会社 pp.50-73

氏家　宏・兼子尚知 2006『地域地質研究報告 (５万分の１地質図幅) 那覇及び沖縄市南部地域の地質』独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター p.48

第５章

山里銀造 1983「庭園」『沖縄大百科事典 中巻 ケ～ト』沖縄タイムス社

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (2) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書 (3) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (5) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 84 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどぅんあと
書名	中城御殿跡
副書名	県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（8）
巻次	—
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 109 集
編著者名	田村　薫、奥平大貴、久場大暉、島袋桃子、國吉ななせ、パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7　　TEL　098-835-8752
発行年月日	令和3年3月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
なかぐすくうどぅんあと 中城御殿跡	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市 しゅりおおなかちょう 首里大中町 ちょうめ　ばん 1丁目1～3番	472018	—	26° 13′ 15″	127° 43′ 05″	2015.6.1～12.18 2016.10.12～11.11 2017.8.2～2018.2.28 2019.6.25～12.4	334 ㎡ 130 ㎡ 130 ㎡ 179 ㎡	県営首里城公園 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中城御殿跡	屋敷跡	近世～現代	石積み 配石 石牆 石列 石畳 井戸 溜池 庭園 方形石組 円形石組 石敷き	中国産青磁 中国産白磁 中国産青花 中国・タイ産褐釉陶器 その他の輸入陶磁器 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 初期沖縄産無釉陶器 沖縄産無釉陶器 陶質土器 瓦質土器 土器 煙管 金属製品 円盤状製品 骨製品・土製品 ガラス製品・ガラス玉 石製品・石器・石造製品 瓦・塼 銭貨	

要約	中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、1870 年から 1945 年まで存在していたが、沖縄戦で焼失した。戦後は県立博物館が建てられるが、老朽化により撤去される。調査は、中城御殿の遺構残存状況を確認する目的で行われ、石牆や石畳、庭園跡などの遺構が良好な状態で検出された。

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 109 集

中 城 御 殿 跡

― 県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書（８）―

発行年　令和３（2021）年３月 31 日

発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター

編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター調査班
〒 903-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098（835）8751・8752

印　刷　沖縄県自分史センター株式会社
〒 903-0804
那覇市首里石嶺町４丁目 288 番地

沖縄県立埋蔵文化財センター 2021　Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

首里古地図

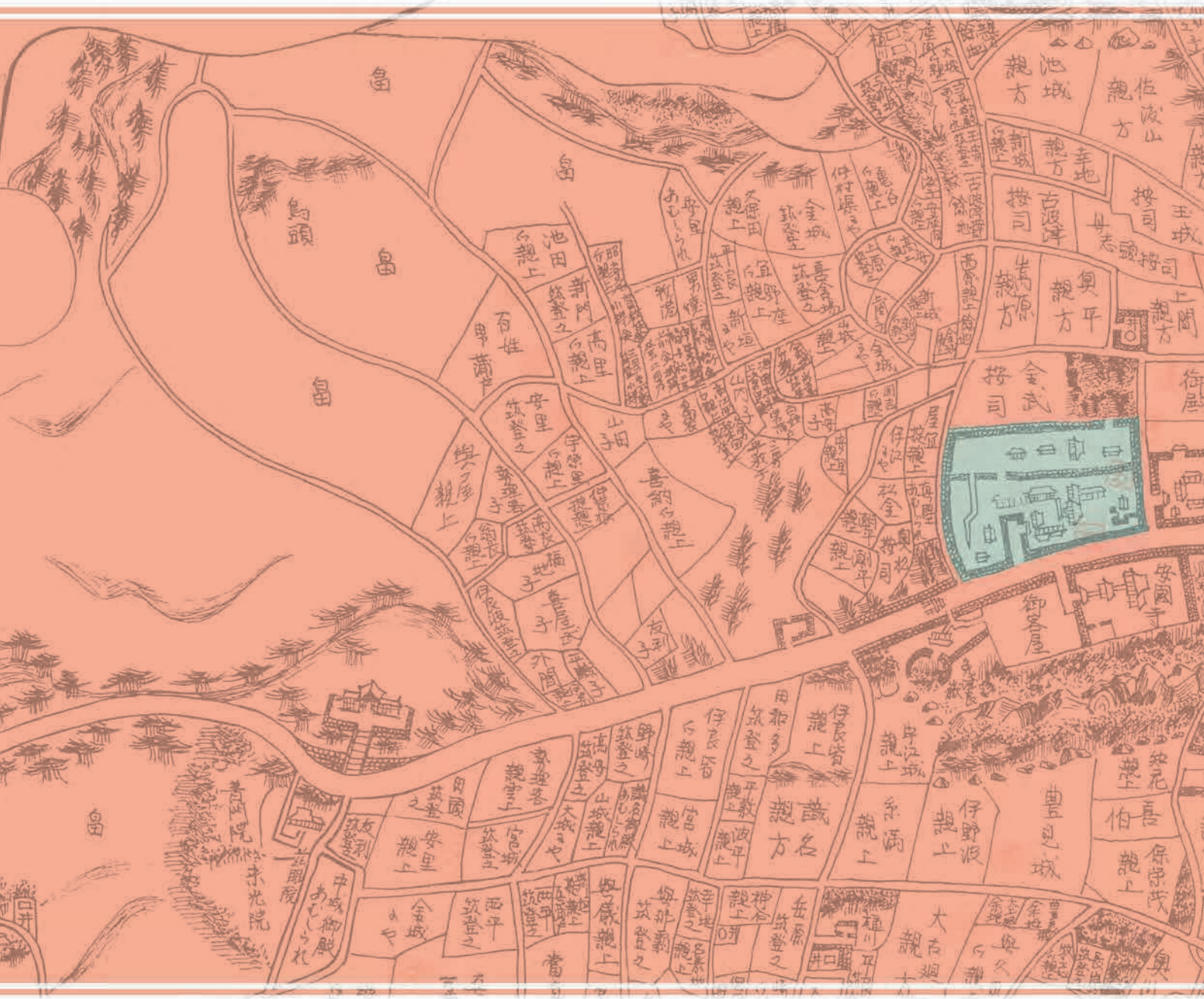
康熙39（1700）年に作製されたものである。これより２年前に江戸幕府から全国各藩に対して、地図を作製提出するよう指令が出ておるので、この地図もその一環であろう。

ところが、この地図も時代が経つにつれて、汚損はなはだしく、威豊のはじめごろには開くことさえ出来ず、まったく使用にたえない状態になっていた。秋姓家譜によると、九世崇俊（さいしゅん）が絵図書調方筆者として、この地図を再調製したことがみえている。当時、原図は使用できないので、屋敷図帳、山敷図長を参照し、各当事者にきいたりして、この仕事を完成し、褒賞を賜っている。

図中約千百余の公署、屋敷等が綿密に記載され、270年前の状況を詳しく伝えているが、この地図が年代推定に疑問を宿した理由は1700年当時の状況を伝えながらも、当事者たちの記憶違い、あるいは伝え違いによって、後代的な要素があるからである。

この地図の原図は６畳敷大の大きさで、研究に不便になるため、よく観察して書きあらためたものである。（嘉手納宗徳）

沖縄風土記刊行会1970



沖縄県立埋蔵文化財センター